STUDY ABROAD REPORT 2018-2019

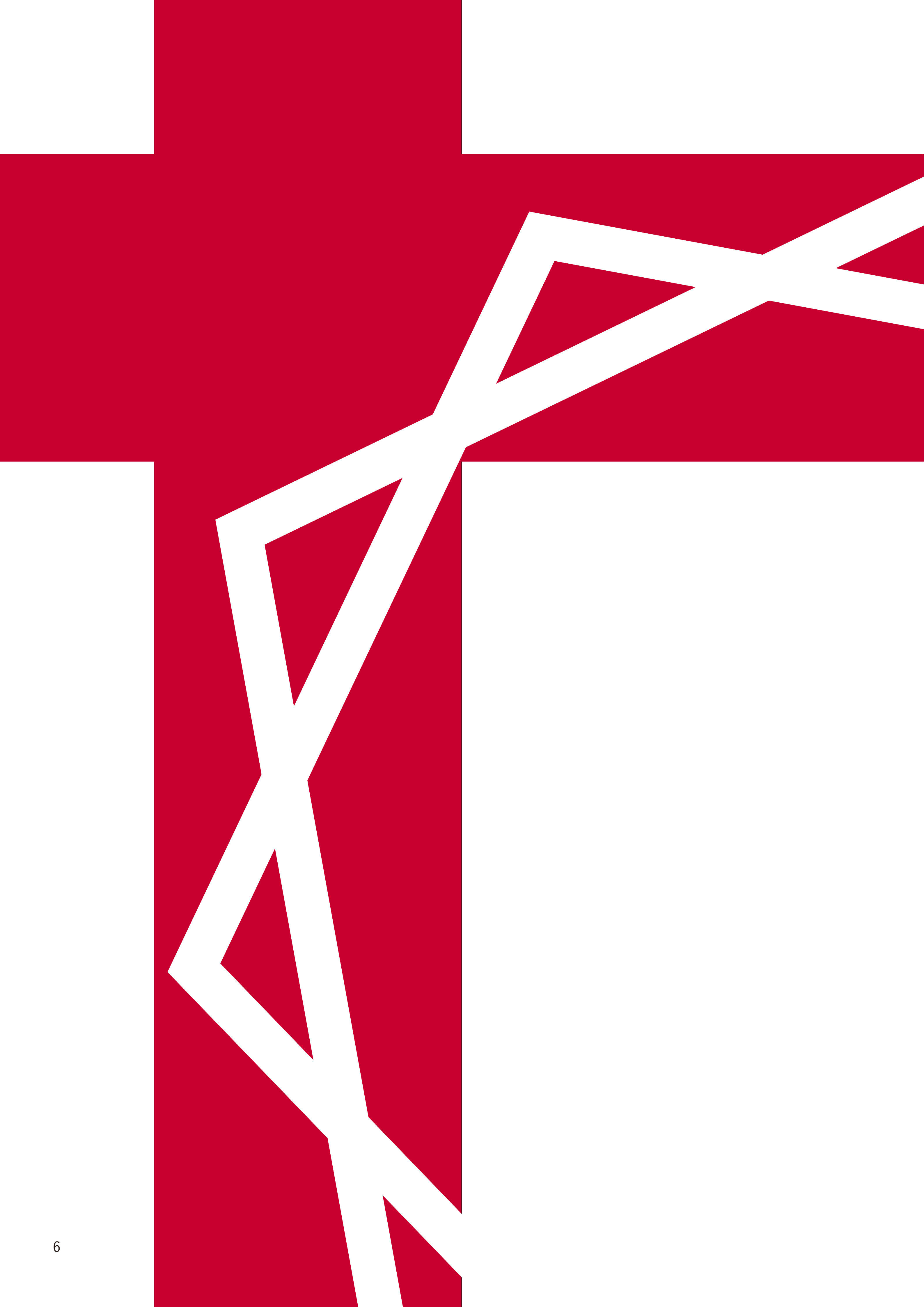
2018
2019

CHIBA UNIVERSITY

C

目次
CONTENTS

07	UNIVERSITY OF CINCINNATI Ohio, America	工学部　共生応用化学科　3年 高木真惟
08	UNIVERSITY OF CINCINNATI Ohio, America	工学部　デザイン学科　4年 松本達也
09	UNIVERSITY OF CINCINNATI Ohio, America	融合理工学府　創成工学専攻デザインコース　1年 伊集千夏
10	UNIVERSITY OF CINCINNATI / AALTO UNIVERSITY Ohio, America / Espoo, Finland	融合理工学府　創成工学専攻デザインコース　2年 島田誠人
11	UNIVERSITY OF WISCONSIN-MILWAUKEE Wisconsin, America	法政経学部　法政経学科　4年 舩岡英里
12	UNIVERSITY OF WISCONSIN-MILWAUKEE Wisconsin, America	人文公共学府　人文科学専攻　2年 野間口哲
13	COLLEGE OF CREATIVE STUDIES / ENSCI LES ATELIERS Detroit, America / Paris, France	融合理工学府　創成工学専攻デザインコース　1年 村田基
14	UNIVERSITY OF REGINA Saskatchewan, Canada	国際教養学部　国際教養学科　3年 吉原七帆
15	UNIVERSITY OF MONTERREY Nuevo Leon, Mexico	融合理工学府　創成工学専攻建築学コース　1年 北川駿介
16	NORTHUMBRIA UNIVERSITY Newcastle upon Tyne, England	国際教養学部　国際教養学科　3年 岡村玲奈
17	UNIVERSITY PARIS-EST CRETEIL VAL DE MARNE Creteil, France	文学部　国際言語文化学科　4年 谷口葵
18	ENSCI LES ATELIERS Paris, France	融合理工学府　創成工学専攻デザインコース　1年 田中翔子
19	POLITECHNIC UNIVERSITY OF MILAN Milan, Italy	融合理工学府　創成工学専攻デザインコース　1年 田中翔子
20	UNIVERSITY OF LEIPZIG Saxony, Germany	理学部　化学科　3年 大野亘児
21	POLITECHNIC UNIVERSITY OF MILAN Milan, Italy	融合理工学府　創成工学専攻デザインコース　1年 岩﨑有紗
22	COLOGNE UNIVERSITY OF APPLIED SCIENCES Cologne, Germany	融合理工学府　創成工学専攻デザインコース　1年 岩﨑有紗
23	POLITECHNIC UNIVERSITY OF MILAN Milan, Italy	融合理工学府　創成工学専攻デザインコース　1年 仲宗根掌心
24	COLOGNE UNIVERSITY OF APPLIED SCIENCES Cologne, Germany	融合理工学府　創成工学専攻デザインコース　1年 仲宗根掌心
25	UNIVERSITY OF EASTERN FINLAND Joensuu, Finland	国際教養学部　国際教養学科　3年 田中 静香
26	UNIVERSITY OF EASTERN FINLAND Joensuu, Finland	文学部　国際言語文化学科　4年 吉田茜
27	UNIVERSITY OF LAPLAND Rovaniemi, Finland	国際教養学部　国際教養学科　4年 湧井悠真
28	UNIVERSITY OF JYVASKYLA Jyvaskyla, Finland	教育学部　中学校教員養成課程英語科教育分野　4年 佐野光
29	UNIVERSITY OF JYVASKYLA Jyvaskyla, Finland	教育学部　スポーツ科学課程　4年 高橋諒多
30	LINKOPING UNIVERSITY Linkoping, Sweden	国際教養学部　国際教養学科　4年 秋田谷蘭
31	UNIVERSITY OF SALAMANCA Salamanca, Spain	文学部　人文学科　4年 三橋諒子
32	UNIVERSITY OF THE BASQUE COUNTRY San Sebastian, Spain	融合理工学府　創成工学専攻建築学コース　2年 原田瑞妃
33	TSINGHUA UNIVERSITY Beijing, China	法政経学部　法政経学科　3年 長弓拓矢
34	MAHIDOL UNIVERSITY Phutthamonthon, Thailand	国際教養学部　国際教養学科　3 年 小林拓磨
35	CHIANG MAI UNIVERSITY Chiang Mai, Thailand	国際教養学部　国際教養学科　3年 菅野博斗
36	UNIVERSITY PUTRA MALAYSIA Selangor, Malaysia	園芸学部　緑地環境学科　4年 菊地達郎
37	RMIT UNIVERSITY / UNIVERSITY OF MONTERREY Melbourne, Australia / Monterrey, Mexico	国際教養学部　国際教養学科　3年 高木峻



UNIVERSITY OF CINCINNATI Ohio, America

工学部　共生応用化学科3年　高木真惟

シンシナティ大学は 40,000 人を超える大規模大学であり、アメリカでも有数な大きなジムなども敷地内にある。24 時間利用可能の図書館もあり、勉学に励むのには適した場所であった。シンシナティ大学は留学生も多く、特にインド人や中国人などが多かったように思う。一方、留学生向けのサポート体制はそれほど手厚くは無いと思われる。留学中にサポートに問題があると感じることはなかったが、帰国後、同期の派遣留学生の話を聞いてみると、特に小規模の大学では留学生一人に対してチューターが一人つくような大学もあるようであった。チューターがいない分問題が発生した際に独力で解決しなければならなかったため、経験値をあげると言う観点も加味すると簡単にどちらが良いか判断は難しいと思う。

C

留学をする分、取得単位が同級生よりも少なくなるため、2 年前期（留学にいく直前のターム）はできるだけ多くの授業を取った。この為、その分留学前の語学の勉強との両立をするのが少しきつい時期もあった。語学に関しては、TOEFL のテスト対策をし、一日一回は英語を聞く習慣をつけた。そのほかは、自分の専攻が化学であったため、理系英語や専門用語の英単語を覚える努力をした。この英単語学習は非常に役に立ち、アメリカに行っても最初から授業についていくことができた。
【良い点】大規模大学のため大学内に生徒は無料で使えるジムやプールがあり、適度に運動ができて大変良かった。また留学生の割合が多いためか、一切人種差別を受けなかった。【悪い点】治安が良くない地域であるので、「学内で発砲があったため、寮から出ないように」などの日本では経験したことの無いようなアナウンスがあり、驚いた（但し、セキュリティの高い寮に住んでいたため実際に危険を感じる目にあう事はなかった）。

大学の寮に住んでいた。寮内洗濯機や乾燥機やゴミ捨て場があり、不自由なく暮らしていた。また、大学の敷地内に寮があったため居住や通学時に身に危険を感じることは無く勉強に集中できてよかった。食事は「ミールプラン」という大学の4つほどあるフードコートで好きな時に何回でも食べることのできる制度を利用していた。深夜 12 時まで空いているフードコートもあり、また、野菜も充実していて大変満足な制度であった。生活必需品の入手は、近くのスーパーに行くか、休日には現地の友人にモールまで車で連れて行ってもらい、補充していた。一週間のスケジュールとしては月曜日から金曜日の午前までは課題や授業の予習復習に追われる毎日であった。一方週末は意識して現地の友人たちと触れ合う機会を持つようにした。このことは英語力の向上に役立ったことは言うまでもなく、異なった文化をバックグラウンドに持つ人たちと人間対人間として触れ合う貴重な経験となった。

有機化学、一般化学、生物学実験、持続可能化学エネルギー（大学院生向け）、生物学、英語など、秋学期 17 単位、春学期 18 単位履修した。自分の専門科目を中心にシラバスを読んで履修する科目を決めたが、履修必要条件（例えば、有機化学を履修するためには数学1がグレード C 以上、基礎化学がグレード C 以上取っていること、など）を満たしていない科目もあったため、教授にメールをし、直接交渉したりなどをして、履修登録をした。大学院生向けの授業を履修できた理由としては、履修登録に関して教授とメールもやり取りをしていたところ、特別に大学院生向けの授業を紹介してくれ、その担当講師の方に直接交渉してくれたため、受講することができた。

【有機化学】自分の専攻の分野を英語で学んだ。講義スタイルは日本と同様、座学であった。日本と異なる点は、生徒による質問の数で、授業中に多くの生徒が手を挙げ質問をしていたのが印象的であった。【生物学】自分の専門分野とは少しだけずれた分野であった。講義スタイルがユニークで、予習として教科書の該当範囲のオンライン課題が出て、実際の教授を交えた講義の場では 4 人グループによるディスカッション&4人一組で取り組む問題演習を行った。半年間同じグループのため、回を重ねるにつれ仲が深まり、講義中のディスカッションがより有意義なものになっていったことを感じた。私はこの講義を後半のセメスターで受講したため発言もたくさんすることができたが、正直もしも前半のセメスターに受講していたらほとんど話せず終わっていたであろう。【英語】留学生向けの英語の授業を受講した。これは本当にいい機会であった。はじめはアメリカにいてわざわざ英語の授業を取るのは勿体ないとも考えたが、プレゼンテーションの仕方や発音等ネイティブの専門講師から学ぶことは独学の場合の何倍もの効果があったように感じる。プレゼンテーションの仕方などは英語に限らず日本語の場合であっても活かせる技術であるので、いまでも大いに役に立っている。【生物学実験】生物学実験を行いレポート提出するところまでは、千葉大学での実験とほとんど変わらなかったが、それに加えシンシナティ大学での生物学実験は実験結果をクラスメートの前でプレゼンテーションすることを求められた。とても緊張したが良い機会であった。

もともと外交的なタイプではあったと自己分析していたが、留学を経験することにより何か新しいことにチャレンジすることへの抵抗がよりなくなったと思う。また、留学中はトラブルの連続のような毎日であったので、帰国後に何か課題にぶつかっても、立ち止まったりせず、どのように乗り越えようかと思索することが習慣となり、さらにその思索に面白味を感じられるようになった。
また、英語に触れることが当たり前になったため、帰国後、専門分野の英語の論文を読むことに対する精神的障害がなくなった。帰国後、実験のレポートを書く際なども参考文献として英語の論文を引用する等、レポートの質の向上にも大いに役立っている。
世界で通用する研究者になるという夢をかなえるために、英語での学会発表や英語の論文執筆に励んで行きたい。ゆくゆくは、海外の大学で研究活動をし、その技術を十分吸収した後日本に帰国し、還元できるような人材になりたい。

留学に行った人で後悔している人を私は知りません。留学中にどんなにつらくてもあとから思い出すと、その当時のつらさよりも、それを乗り越えたことの自信の方が　自分の中に強く残ります。辛くなった時こそ、乗り越えた後の自分を想像して頑張ってください。心から応援しております。

UNIVERSITY OF CINCINNATI Ohio, America

工学部　デザイン学科 4 年　松本達也

シンシナティ大学は学生都市なので大学周辺に飲食店とスーパーがあるが、それ以外は基本的に何もない。ホームセンターや商業施設、ちょっとした遊びに行きたい時は車がなければ移動手段はない。夜の大学周辺は少し暗めで気持ち治安悪めだが、特に事件もなく問題はないが人によっては怖いと感じることもあるようだ。学費としては学生健康保険に加入する場合、健康保険費と国際学生費がかかるようになっている。

C

留学前は、基本的にポートフォリオの提出と CV のみ。最も大変なのは米国ビザ取得のための書類集めや手続き。自分の場合は 2 校目だったため、準備は基本的に向こうの大学のコーディネーターの方とのコンタクトや空港からのシャトル予約。家探しなど。チェックリストを用意してくれるので比較的わかりやすい印象だった。いい点と悪い点はとてもシンプル。
デザインの基礎を学ぶには確実にシンシナティ大学は良い環境である。学生は皆 1 年のうちから独立しきっており、自己管理が非常に上手で自ずと感化されできるようになって行く感覚があった。悪い点はというと、大学以外に何もないということ。皆忙しいため、現地の学生との交流もあまり盛んではなく、何より車がないため課題とスーパーへ行くこと以外にこれといってすることがない。

家探しで直面することとしては、Facebook の UC housing groups に参加することを勧めたい。Sublease という短期的な貸し家を探すことができ、家主とのメッセージを通じて家賃や期間をより効率的に探すことができる。インターンをするのであれば必須だが、基本的な生活を送る上でも現地の銀行口座を開設すると良い。PNC BANK はキャンパス内にある為作りやすい上、学生向けのデビットカードを 1、2 日程度で作れるので非常に便利。家賃の支払いは、場合によってはチェックなので必然的に必要となる。授業のない日は友人がいれば、昼頃からショッピングセンターへ買い物へ。課題が多いので土日も課題を終わらせるために消費することがある。

前半でシンシナティ大学へ留学していた友人からの勧めで Tony Kawanari さんという日本人教授の授業の product design studio を受講。課題が非常に忙しかったが椅子のスケッチから三面図、3D 検討やビジュアルモデルと実働モデル (1:1 スケールモデル) と外注等を含む実制作に至るまで全体のプロセスを学ぶことができ、非常に学びの多い授業であったと思う。Intro COOP という授業では、Summer semester に申し込むインターンのために portfolio や CV, インタビューの受けかた、そして留守電の設定といった細かいところまでを学ぶことができ、アメリカでインターンをする上で非常に貴重な経験を習得できた。Making things は基本的に低学年が受ける授業であるが、基礎的な木工・金工やレーザーカッター・3D プリンターなどのスキルを実践的に扱うことができる。施設を知ることにも繋がる上、他の授業でのプロトタイプや自主的なプロジェクトにおいても大きな成果を得られた。

上にもあげた Product design studio という授業では、椅子のデザインをゼロから実際に製造するところまで行う。まずはじめに 1、2 週間で 300 のサムネイルスケッチを行い、同時並行でチェアデザインを学んだりコンセプトメイクとペルソナ設定を進める。その後、20 のアイデアを元に人間工学を意識しながら三面図を描き起こすが、学内外の椅子の寸法を測り実際のスケール感をチェックする為、より実製作を意識してデザインできる。その後、3 案に絞ってレンダリングや 1/8 スケールモデルをプロトタイプ。素材や加工法を現実的に考慮して 1 案に絞った後フルスケールで Top/ Side view を確認。Visual model、Full scale model を作って大まかな見た目と実際のアームレストと座面の高さをチェック。実際にファブリケーションやチェアデザインを行なっている会社へ訪問しデザインの実現性やより良い製造方法を検討し、細かい素材の決定やかかるコストと加工にかかる時間について相談を行った。最終提案には furniture shop のオーナーや卒業生、椅子の製造に携わってくれた方、そして一般の人も実際に訪れて、プレゼンを行った後実際に座ってフィードバックを得ることができた。デザインにおいての学びもあったが、その一方でより社会的で実践的な学びを得られたのは Intro to COOP-Industry。アメリカで文化は想像以上に日本ともヨーロッパとも異なり、インターンや職を得る上で必要となってくることや考慮しなければならないことは多い。インタビューの受け方や portfolio と CV の書き方などを学べる。portfolio に自分の顔写真を載せると少し採用にしにくいといった事実などに直面しながらインターン先を決定できたり文化を学ぶことに繋げられた。

デザイン学習において変わったことは、手を動かすことにおける自信が以前よりついたことで積極的にプロトタイプを行うようになった。疑問が生まれた時に質問を自分で考える時間の往来が以前よりうまくなった。ラップトップ、スケッチ、手を動かす。の行程を一箇所に留まらずにいることの難しさを実感した。一つコツとして、自分のスケジュール管理は非常に大事でありタスクを固定しないことで考えを循環させ、作業効率をあげることができるようになったと思う。具体的なスキルは、自ら磨くというよりは一つのプロジェクトを通じてのパフォーマンスから得るのが得策だと感じた。基本的にデザインにおける学びというのは強く感じなかったが、間接的なスキルやマインドセットがデザインスキルを高めてくれるということは大いにあり得る話であると思う。この留学において最も自分にとって大きかったのは、インターンシップである。実際に自分が海外で、デザイナーとして働けるのだという自信がついたことや実績となったことで、どんな会社でも躊躇わずに挑戦しようという気持ちが生まれるようになった。失敗しても、採用されなくても自分には最低限求めてくれることがある。目の前にあることを目一杯やることで次に繋がると思える。

日本を出た途端に、自分を守り自分を突き動かすのは自分でしかない。大学のプログラム。という認識はすぐに捨てて自主的に行動に移すことが重要であると思う。協定校での学びも重要だが、そこに限界を定めてしまうと身動きが取れないこともある。自分がやってみたいことを最大限に挑戦できる環境に、コンタクトを取るという勇気が出せるとその後からは何でもできる気分になれるはずだ。

UNIVERSITY OF CINCINNATI Ohio, America

融合理工学府　創成工学専攻デザインコース　1 年　伊集千夏

広大な敷地にシアターやスタジアムがあり移動が大変だがまわりには飲食店があり、食べるところには困らない。授業の質はとても高い。オリエンテーションなどは非常に丁寧なので施設には困らなかった。留学支援課はあるが、数え切れないほどの留学生がいるので個人的な質問は自分の学科の先生にするのが一番いいと思う。非常にデザイン学科の先生は生活の面でもサポートしてくれた。

C

英語の TOEFL の受験をした。Facebook で家探しを行い、オーナーとコンタクトを取っていた。ホテルや Airbnb は基本ないので自力で行く前に探すか寮がいい。
ワクチン摂取が必要なので 3 本くらい専門の病院で打った。大学がとても広くジムやシアターなどなんでも設備がある。大学内で不自由ない生活ができる。大学からタクシーのようなものがでておりアプリで呼ぶことで無料で安全に家まで帰れる。悪い点は交通手段が車しかないこと。Uber を使うことが多かった。

Kroger という大きいスーパーがあり品揃えがいいのでみんな行っていた。しかし交通手段が車しかないので車を持っている友達に頼んで買いに行く必要があるため現地の友達作りは非常に重要であった。通学がスクールバスか徒歩だった。徒歩 30 分くらいは覚悟しておく必要がある。寮も入れるが月額 12 万くらいするので Facebook などで普通の シェアハウスを探す方が 5 万くらいにコストを抑えられる。授業時間が非常におおく、一つの授業に対して週に大体 6 時間ある。だいたい 3 つから4つ授業をとっていた。課題もデザイン学科は多く夜遅くまで残ってみんなでやっていた。授業がない日はジムに行ってみんなでバスケをしたり映画をみたりしていた。構内にスタバやフードコートもあるので不自由なく過ごせる。

オンラインで探して登録した。現地についてから先生と相談して決めるのが良いと思う。取っていた授業。Packaget design:商品のパッケージをデザインし直す授業。3 人のグループワークですすめた。授業の中には工場見学に行ったり、パッケージデザインをしている会社を訪れる機会もあり非常に楽しかった。Packaget design：商品のパッケージをデザインし直す授業。3 人のグループワークですすめた。授業の中には工場見学に行ったり、パッケージデザインをしている会社を訪れる機会もあり非常に楽しかった。Infomation Design：情報をわかりやすく図解する授業。情報をいろんなパターンのグラフに当てはめてどんなグラフが見やすいのか、情報をビジュアル化するときに一番伝えたいポイントをどこに持ってくるかなどを学んだ。 Oral English：英語でプレゼンテーションを行う授業。語学学校と連携しているので、教え方が非常に上手だった。毎回の授業が楽しく英語が伸びるきっかけになったと思う。交換留学生は是非とることをおすすめしたい。ミドルクラス以上を取ると英語が伸びると思う。

シンシナティ大学では、パッケージデザインの授業を選択し、アメリカの社会問題と文化背景を意識し、子供のためのサブスクライブ式の絵本のパッケージデザインを行った。両親が共働きで、本を一緒に買いにいく時間がないという背景と、パッケージのゴミ問題、こどもがお片づけを楽しんでできるようになってほしいという 3 つの Issue を組み込み、絵本をしまう引き出しとして活用できる箱のデザインを行った。作る課程では、子供がいる人にインタビューを行ったり、アメリカの社会問題を調査するなど、文化、環境、子供の行動の観点からデザインを評価し、試作していく方法を学ぶことができた。デザインの評価軸が日本と違い、環境配慮やどうやったら目立つかを重視してデザインを行なった。また、企業の方にフィードバックをもらえる機会が多数あり、現場でのアドバイスをもらうことができた。学生の意識も非常に高く、出席点やコミットメントも日本よりも強く求められる。一限目が 8 時から始まるので朝雪が積もっている中、学校に行くのが大変だった。

留学に行く前は、英語の勉強もしていたし、怖気付かない性格だと思っていたが、留学してディスカッションでは、周りの言っていることが理解できないし、自分の意見も内容に沿っているか心配で言えないことが多かった。その状況を打破したくて毎回のミーティングに言語力以外で自分の存在を認めてもらう方法を試すことにした。自分のためにも、前回のミーティングで決まったことをビジュアル化して持っていくこと。書記のような役割で周りに認めてもらえるし、何より自分の認識を周りに知らせることで、勘違いしていた点を指摘してもらうことができる。そして、自分がやりたいデザインやアイデアをチームの人に伝えるために、プレゼンを作成していった。絵やキーワードにして自分の意見を伝えることで、自分の意見とチームに貢献したいという思いが伝わるようになった。
このような経験を得て、弱点があっても、自分ができることを探し、事前準備をしっかりすることでそれをカバーできることを学ぶことができた。留学を終え確実に自分の中で自信がついたのはサバイバル力と自信だった。語学も文化も違う海外に行けば赤ちゃんになったのも同然で、人の助けなしでは生きていけなかった。感謝を忘れずに人にお願いをする傲慢さと謙虚さを持ち合わせることで人の助けを借りることでなんとか生き延びられた。日本では謙虚で下からの姿勢こそ評価されるが、海外では対等な立場に立ち意見を言うことが評価されると感じた。自分の意見をしっかり持ち、いつも笑顔でいることで周囲にも信頼されることは分かった。これらの経験を踏まえて日本では自分が助けてもらった分助け返していきたい。

留学をし、人と違う道を選択することで、自分の人生を生きられるようになり、他人と比べなずに行動することができるようになった。日本では得られなかった多様な価値観を得ることができ、型から外れて自分の人生を考えるきっかけとなるので是非挑戦してみてください。あと、本当に辛ければ帰国するのも選択肢の一つだということを忘れないでほしいです。

UNIVERSITY OF CINCINNATI / AALTO UNIVERSITY Ohio, America / Espoo, Finland

融合理工学府　創成工学専攻デザインコース２年　島田誠人

シンシナティ大学は、アメリカのオハイオ州、シンシナティにある公立大学です。大学自体はとても大きいですが、留学生はあまり多くないです。サポートや学校関連の内容はメールなどで知らされ、自分で見逃さないように色々情報をキャッチしていくことが重要です。
アールト大学はフィンランドのヘルシンキにある総合大学です。最近、デザイン部門はヘルシンキから隣のエスポーに移りました。留学生がとても多く、院の授業では半数以上が留学生です。留学生へのサポートなどは特になく、自分で情報をキャッチしていくか、他の留学生に聞くなどする必要があります。

留学前の主な準備は学校へのアプライや VISA 取得のための書類づくりなどに費やしました。それだけでも、初めてのことなのでとても大変ですが、二校行く人はそれを留学中にもう一度しなければなりません。これは感想ですが、留学前の準備の前に、英語の勉強（特にリスニングとスピーキング）やポートフォリオが必要な人はポートフォリオを英語で作っておくと良いと思います。
シンシナティ大学について
良い点：授業の雰囲気がいい意味で自由な感じがしました。一方で、大学は学生を即戦力になるように厳しく教育しており、アメリカの教育の熱意と凄さを感じました。
悪い点：大学外は治安が悪いので気をつけなければいけないです。
アールト大学について
良い点:大学内の設備が完備されています。優秀な留学生が多くグローバルな環境で学ぶことができます。
悪い点：冬はとても寒いです。

渡米後、住居を craigslist で探し月５万円で契約しました。食事に関しては、主に外食をしており、ハンバーガーだけでなく意外と中華や和食などのアジアン料理も学外にあるので満足していました。２０時以降は学生専用の無料タクシーが使えるため活用していました。シンシナティ大学での1日のスケジュール：６：００起床→８：００授業開始→１７：００授業終了→２２：００宿題→帰宅（平日）９：００起床→１２：００自習→２１：００終了→帰宅（土日）アールト大学から合格通知書が届いた後、すぐに HOAS で住居の申請をしました。学校のすぐ近くに住むことは難しいので、電車とバスを使って４５分かかるところに住みました。地下鉄は遅れることがほとんどなく、とても快適でした。アールト大学での1日のスケジュール：８：００起床→９：００授業開始→１７：００授業終了→２１：００宿題→帰宅（平日）9:00起床→12:00自習→17:00終了→帰宅（土日）

シンシナティ大学
Design Visualization ２：主にインダストリアルデザインのサムネイルスケッチからレンダリングまでの流れを家電製品などの例を用いて学びました。Design Technology ２：Fusion360 と Keyshot の使い方についてサンプルを作りながら学びました。Product Design Studio ２：パッケージデザインについてグループで市場調査とコンセプト立案を行い、最終的にパッケージ提案を行いました。Product Design Communication ２：デジタルにおけるデザインの表現能力の向上を目的とし、3D スケッチ、UI/UX、illustrater レンダリング、ストーリーテリングなどの表現方法を学びました。
アールト大学
Color and Sensorial Design:複数のマテリアルを使って、カラー、テクスチャー、仕上げについて模索しました。文化や消費者の好み、市場動向、季節の流れ、ライフサイクルを考慮して、色と感覚のデザインを実践しました。講義やリーディング、実地調査を通じて、新しい色と感覚的なデザインのトレンド、製造方法と技術、持続可能性、デジタル環境における色の重要性について学びました。

シンシナティ大学の授業はとても忙しかったので特に忙しかった授業の例をあげます。１つ目の授業では、スケッチ能力向上のために

様々なプロダクトのスケッチをしました。例えば、電子機器やキッチン用品、蛇口のデザインなどでした。スケッチやレンダリングに関しては具体的な手法を教えてくれ、ラフスケッチからレンダリングまでの流れを、実際に働く環境と同じように学ぶことができました。基本的に授業内に終わらない量のスケッチの課題を出され、残った分が宿題になるのでとても大変でした。２つ目の授業では、パッケージデザインの理解とグラフィック能力向上を目的とし、パッケージデザインの提案をしました。初めに、近くのスーパーマーケットに行き、一つのパッケージを選び、そのパッケージデザインの改善点をあげて、コンセプトを考えました。それと並行して、サステナブルデザイン観点の資料を読み、現在行われているパッケージに関する知識をつけました。リーディングは毎授業課されており、感想文を提出するのですが、このリーディングの量がとても多いので大変でした。アールト大学の授業は産学連携が多く、実践的であることが多かったです。カラーと感覚的なデザインを学ぶ授業では、複数のマテリアルを使ってプロトタイプを作りながら学びました。ナイキとコンバースとの共同プロジェクトで最終的にシューズや服を制作し発表しました。テーマはサブカルチャーで各個人それについて、リサーチやアイデア出し、プロトタイプ作りをしました。週に一回程、先生からフィードバックをもらえる機会が用意されていました。授業内では、カラー戦略やナイキのブランド戦略などの講義形式の授業とカラーパレットの作成方法やスニーカーや革靴の製造方法、３Dプリントやシリコン、シルクスクリーンといった実際のものづくりについて学ぶワークショップなどが開催されました。

学習面において、何かのスキル（例えばスケッチや CG レンダリングなど）を学ぼうとするときや論文を探すときに、英語で検索したり、英語で聞いたりすることに躊躇することがなくなりました。デザインの先進的な分野は日本語の情報よりも英語の情報の方が豊富にあるので、留学前ではアプローチしない情報に気楽に取り組めるようになりました。また、帰国後に海外ワークショップに参加する機会があったのですが、やはり留学前より留学後の方が内容を理解でき、英語でのコミュニケーションも上達しているなと実感しました。
学習面以外で変わったことは、海外の友達ができたことです。今でも、彼とは連絡をたまに取り合ったりしていて、フィンランドに行けば彼が出迎えてくれるという関係はとても嬉しいことです。

留学で経験したことは外国の授業や日常の生活だけでなく、同じ世代の海外の学生や海外で働く日本人など、普段体験できないことや知りえないような人と時間を共にしたことです。これらの経験は就職活動だけでなく、そもそもの自分の価値観や生き方までも変えると思いました。この先この経験をどう活かしていくかはわかりませんが、絶対にどこかで活きてくると思います。社会人になって留学することは、時間や金銭的制約などでなかなか難しいと思います。協定派遣制度はとても学生にとってありがたいものです。是非、大学生での留学をお勧めします。

UNIVERSITY OF WISCONSIN-MILWAUKEE

Wisconsin, America

法政経学部　法政経学科４年　舩岡英里

ウィスコンシン大学ミルウォーキー校（以下、UWM）は、アメリカ、ウィスコンシン州にある州で二番目に大きい総合州立大学です。UWM は、１３１ある“研究が盛んな大学ランキング”のなかにランキングするほど研究が盛んであり、生物学や経営学など、多彩な分野で多くの学生が研究に関わっています。アメリカ国内はもちろん、世界中からたくさんの留学生が学びに来ており、多様性の豊かなキャンパスです。留学生向けのイベントやヘルプデスクなど、留学生のサポートも充実しています。キャンパスの近くには、五大湖の一つであるミシガン湖があるほか、豊かな自然に囲まれており、学びを深めるのに適した環境が整っています。

W

学習面では、派遣留学の切符を勝ち取るため、IELTS のスコア獲得に向けて勉強をしました。次に、YouTube で TEDTa l kを聴き、内容を要約したもの、およびその感想を留学生と英語で伝え合うという練習をしました。また、現地でマーケティングを学びたかったため、基礎的理論を千葉大学の授業を通して学びました。生活面では、２年生の春休みに一か月フィリピンで過ごし、長期間外国で暮らすことについての不安を少なくできるように準備しました。
良い点：アメリカの中でも比較的中立なウィスコンシン州に属しているため、人種差別に苦しむことはありませんでした。様々な国や地域出身の、様々な人が生活していて色々な人と友達になることができました。改善点：留学生に課される学校の強制保険がほかのアメリカの大学に比べて高額なこと、基本的に寮に住むことが前提であるため、ホームステイをしたい人は自分で探してくることが必要なこと。

住居：オンキャンパスの寮が５つあり、構内で最も近く、キッチンが付いていて値段も一番安い寮の二人部屋に居住しました。　食事：キッチンが付いていたので、基本的に自炊で、週末のみ大学近くのレストランでご飯を食べました。また、大学近くの教会やお家で無料でご飯を提供してくれるところがあったため、節約兼友達づくりのため、そういった公共の場を活用しました。買い物：最初に Target というホームスーパーで家電や食器を買い、あとは寮からバスで 20 分くらいの Walmart と MetroMarket というスーパーで食料や衣料を調達しました。時間の使い方：授業は一日大体二コマ、午前に一個、午後に一個取り、空きコマは図書館で課題をこなしていました。週末は友達のうちに遊びにいったり、州内や隣のシカゴに行って買い物を楽しんだりしました。通学手段、交通の便：寮からキャンパスは徒歩で行けて便利でした。学校で市内バス無料券が配布されたので、市内はバスで移動できました。

AIS 101-400 Introduction of American Indian Studies
AIS473-001 Wisconsin History
ネイティブアメリカンについての授業です。文化の３要素、ネイティブアメリカンの Creation　Story、ネイティブアメリカンとアメリカ革命との関係などを学んだほか、過去フランスやイギリスの植民地支配に苦しんだ歴史を踏まえ、その影響と今後私たちがどうその歴史と向き合っていくべきかを学びました。
ADM330-405　Organization
日本でいう「組織論」です。組織がうまく機能するうえで重要な要素を、教科書及びグループワークを通じて学びました。
BUS　ADM360-404　Marketing
マーケティングの基礎と原理について理解を深める授業です。週二回の座学で学んだことをもとに、金曜日にディスカッションを通して実務でどうその原理が使われているかを学びました。
AIS 101-400 Introduction of American Indian Studies
AIS473-001 History of Wisconsin Indians
ネイティブアメリカンの歴史を、５つに分け、時代ごとに特徴的な出来事を学びました。これは現地に行ってから取ろうと決めたため、理解するのが非常に大変でした。そこで、理解できない部分は教授や友人に質問して、新しく得た知識を習得しました。

BUS3-4 Principle of Marketing
B2B（企業対企業）マーケティングや、４P（Price, Place, Product, Communication）において、企業がどのような戦略を使って新しい製品を作り出しているかを学びました。特に興味深かったのは、アメリカのケチャップ会社 Heinz の事例です。この会社の社長は新興国の市場をターゲットにし、各国の事情を考慮した商品を販売しています。帰国後、日本の企業の事例も研究し、より理解を深めることができました。
BUS4-405 Organization
先生の話はもちろん、授業中にみる動画が面白かったです。中でも「ストレスは健康を害するか?」というものは、ストレスは自分がどう考えどう行動するかによって変化するものだ、ということを改めて感じ、日ごろの課題に対する考え方も変わりました。最後にチームでホームページを作成し、自分で作品を作る面白さを知ることもできました。

学習面において、留学前に比べて疑問を持ち、自分で調べて理解を深めていく積極性を身につけることができました。アメリカの学生は日本の学生に比べて、生じた疑問を言葉にして発し、他の学生と議論する姿勢が強く、その姿勢に自分も感化されたのだと思います。また、留学を通じて、自身を相対的に見ることができるようになりました。世界には様々な人種の人がおり、見た目も考え方もみな異なっていること、そこに優劣はなくまさに「みんな違ってみんないい」という寛容さを得ることができました。この寛容さは帰国後外国人留学生や旅行客とかかわる際、非常に役立っていると感じます。さらに、あらゆる場面で自分にとって当然のことが相手にとって当然ではないことを理解し、行動するようになりました。留学は知識だけでなく、人間性をあげることにも貢献したと感じます。

留学先でぶち当たった数々の困難に、自分で調べて、また周りの人の助けを借りて乗り越えてきた力を就職活動でアピールしました。留学を通して改めて異なる価値観を持つ人とのかかわりあいに魅力を感じ、外資系の IT 企業に就職を決めました。また、留学先でクラスメイトやルームメイト、千葉大に交換留学に来ていた UWM の学生などたくさんの人にお世話になったので、今度は自分が留学生の力になりたいと思うようになりました。
留学は大変なことが多いですが、その何十倍も楽しいことがたくさんあります。行きたいという気持ちが少しでもあるなら、是非、一歩踏み出してみてください！

UNIVERSITY OF WISCONSIN-MILWAUKEE Wisconsin, America

人文公共学府　人文科学専攻２年　野間口哲

ウィスコンシン大学ミルウォーキー校（以下、UWM）はシカゴから車で２時間ほどに位置する中規模程度の総合大学です。Research University をアピールしており、特に研究に力を入れているようです。留学生の受け入れ態勢はシステムとしても風土としても整っていると感じました。システム面では非ネイティヴ向けの英語の授業が豊富に開講されていること、留学生のコミュニティがしっかりとあること等があげられます。風土としては、私が研究の相談などをしに行った際に先生が多忙にもかかわらず快く議論に付き合ってくれたことが印象に残っています。他の学生も私を初めから一人前の学生として扱ってくれました。

W

以下には準備・結果としてやっておいて良かったことを書きます。また、学業面は専門分野と英語の２つに分けて書きます。まず専門は文献が英語で書かれたものが多かったため、これが功を奏してアメリカでも授業で困ることはありませんでした。英語は TOEFL 対策をやりました。特に Speaking はスクリプトを作って練習しました。生活面では、出発前の数か月はなるべく米ではなくパンやパスタを食べるように心掛けました。以下には準備・結果としてやっておいて良かったことを書きます。また、学業面は専門分野と英語の２つに分けて書きます。まず専門は文献が英語で書かれたものが多かったため、これが功を奏してアメリカでも授業で困ることはありませんでした。英語は TOEFL 対策をやりました。特に Speaking はスクリプトを作って練習しました。生活面では、出発前の数か月はなるべく米ではなくパンやパスタを食べるように心掛けました。

私のモデル的な１日を数個書きます。①通常時 (授業アリ): 10:00 起床・食事・身支度・その日の授業の課題 12:00 授業　17:00 授業終了･食事 20:00 課題や勉強のため図書館へ 23:00 帰宅･軽食･入浴 24:00 自由時間 (勉強の続き・ネット・散歩) 1:00 〜 3:00 就寝　②通常時 (授業ナシ): 10:00 起床・食事・身支度 12:00 課題や勉強のため図書館へ 18:00 買い物 20:00 帰宅・食事　23:00 入浴・ 自由時間 (勉強の続き・ネット・散歩) 1:00 〜 3:00 就寝 ③課題前 : 10:00 起床・食事 12:00 授業 / 図書館へ 19:00 食事 21:00 図書館へ 1:00 帰宅・入浴 2:00 課題の続き　3:00/4:00 就寝。通学はシャトルバスで 10 分ほどです。買い物は無料で乗れるシティバスで 20 分圏内で全て揃います。また、食事は自炊か学校のカフェでが主です。最後に、住居はキャンパス内と外がありますが、外の方が綺麗で部屋も広いです。通学も上述の通り便利です。

私の場合は専門知識の理解を深めることが留学の目的だったため、受講する授業は前もって決めてありました。また、シラバスと実情に相違はありませんでした。シラバスは契約書のように捉えられており、少なくとも UWM ではかなり厳密に履行されていると感じました。印象に残っている授業と内容を以下に書きます。LINGUIS 464 Introduction to Syntax は私の専門分野の入門の授業です。日本で習ったものと比べて、理論の背景となる哲学より技術的な話が多かったように思います。これは、UWM/ アメリカ全体に当てはまることですが授業の成果を可視化するためのようです。テストでも記述ではなく理論を使って分析ができるかどうかを問われました。次に LINGUIS 708 Proseminar in Linguistics は各々がマイナー言語を１つ選び、その音、単語の形態、文法のシステムを調べ発表するという授業です。ひと月に一度プレゼンが回ってくるのですが、質問と授業後のコメントの多さに驚きました。学生主体で授業が進んでいることを特に実感した授業です。

私の専門は言語学の統語論という分野です。語を統べる、つまり文の研究です。単語を組み合わせる能力は他の動物には見られず人間特有です。また、この " 組み合わせる " 能力は人間の複雑な思考、創造性を可能にしていると考えられるため、統語論とは人間の知性･創造性の根幹を言語を通して解き明かす研究です。言語を通して純粋な組み合わせる能力だけを研究することは困難です。なぜなら言語は音と意味を伴うからです。このため、統語論の研究では音と意味は取り除かなくてはなりません。そのためには当然、言語の音と意味についての知識が必要になります。実は、私が留学で勉強したかったことは音と意味についてより深く学ぶことでした。日本では１つの大学に統語、音、意味の専門家が揃っていることは稀ですが、UWM では揃っていました。以下に具体的に学んだ内容を書きます。まず音に関しては LINGUIS 450 という授業を取りました。この授業では言語に使われる音の種類や体系を学ぶとともに、実際に音声データを取ってその分析を行いました。私はパートナーとミルウォーキーの英語の母音の体系について調査しました。日々の小テストに加えてデータの収集や整理、仮説の検証を一学期かけて行いました。締め切りの前の週は図書館で徹夜をする日々でしたが辛くも有意義な授業でした。意味では LINGUIS 466 と 566 を履修しました。この授業では統語理論を意味に応用した理論を学びました。つまり、単語と単語が組み合わされた時、意味の組み合わせの計算はどう行われるか?ということです。集合論や関数、よく分からないアルゴリズムなど数 I/A 程度の知識が必要だったのが辛かったです。また、毎週難解な Problem set を解かなくてはならず、図書館でクラスメイトと集まって必死にこなしました。

学習面では、まず単純に知識が増えました。既に書いたように言語学についての知識がある程度身に付き、研究に活きていると感じます。英語力も上がりました。特に新しい言葉をたくさん覚えたということはないのですが、レスポンスのスピードが格段に上がったように思います。やはり日々英語を使う生活の効果は大きいと思います。

上記２点に加えて、私が１番変わったと思うのは勉強 / 研究に対する姿勢です。アメリカの学生は確固たる自分の意見を持ち、臆することなくそれを追求していました。その意見が間違っていると思うことも、自信過剰で攻撃的すぎることもよくありましたが、そういった姿勢は少なからず見習うべきものがあります。学習 / 研究する際は鵜呑みにせずに立ち止まって徹底的に考え、代替案を考えることの重要性を強く認識させられました。

私はこの先アメリカの大学院で PhD を取る予定ですので、今回の留学経験は直接的に私のキャリアに活かされます。というのも、私が今回の留学で過ごした１年間はアメリカの大学院１年生のものとほとんど同じだからです。この経験のおかげでアメリカで正式に大学院生になった際は円滑なスタートがきれると思います。その他にも、積極性やあるもので何とかするサバイバル精神が磨かれました。これは人生において大きな財産だと思います。

留学では今までとは全く異なる環境で半年から一年を過ごすことで、あらゆる面において成長します。留学の成果は往々にして帰国後に現れるものですので、それが何であれ焦らず信じて目の前のことに取り組んで下さい。

COLLEGE FOR CREATIVE STUDIES / ENSCI LES ATELIERS

Detroit, America / Paris, France

融合理工学府　創成工学専攻デザインコース1年　村田基

College for Creative Studies：デトロイトに位置する美術大学。古くから自動車産業が栄えた街にあるため、カーデザインや工業デザインの教育で有名。留学生は International Student Officeが窓口となり、問題（語学力や文化の違いなど）が起きた際にサポートをしてくれる。
Ensci Les Ateliers：パリに位置する工業デザインの学校。フランスの中でも珍しく教育省ではなく工業省が管轄する学校で、大学一階部分が全て工房となっているなど工業デザインを学ぶために必要な設備が充実している。留学生には一人一人SAがつき、学校生活のサポートをしてくれる。

受け入れの選考に出すためのポートフォリオを準備し、Ensciではフランス語で行われる授業もあるため、フランス語の勉強もした。生活面では、留学前にCollege for Creative Studiesの寮に入寮するための手続き及び、パリでのホームステイ先を探し契約をする手続きを行なった。
College for Creative Studies：総合美術大学であるため、デザインやファインアートに加え、エンターテイメントアートなど様々な分野を専攻する学生がいるため、視野が広がる点が良い。学部の授業では交換留学生が3年生や4年生の授業を履修すると、すでに友達グループができており、クラス内で友人を作ることが難しい点が悪い点である。
Ensci Les Ateliers: 工房設備が充実しており、また各工房に技術者が常駐しているため、いつでもモデルや試作品を作り始めることができることが良い点である。

College for Creative Studies: 住居は寮、近隣のアパートまたはシェアハウスなどを選択できるが、交換留学生は基本的に寮が手続きの簡潔さという点でおすすめされる。寮は大学内に位置し、食事はカフェテリアでとることができるため、基本的には生活は大学内で完結する。大学近くにはデトロイト美術館などの施設があり、また大学からバスで15分ほどのダウンタウンには商業施設があり、週末は買い物に行ったりなどリラックスして過ごせる。

Ensci Les Ateliers: この学校は寮をもっていないため、自分自身でアパートなど住居を探すことが必要となる。私は日本に住むフランス人がエージェントの会社を使い、ホームステイ先を見つけることができた。ホームステイ先から学校までは徒歩20分ほどであったため徒歩で通学したが、パリ市内に住んでいればメトロを使うことで30分以内に市内のほとんどの場所へ移動できる。パリにはたくさんの美術館・博物館があり、休日は市内探索や美術館巡りをしていた。

College for Creative Studies
受講授業
Design Graduate Studio I, Data Visualization, Contextual Design Research, Professional Design Development
CCSでの私が所属していたIntegrated Design Courseでは、受講科目が予め決められている。受講科目はUX DesignやService Designに必要とされる知識や能力が獲得できるように設定されている。そのなかでもDesign Graduate Studio Iはメインとなる授業で、企業と共同で行うPBL型の授業である。
Ensci Les Ateliers
受講科目：Atelier de Projet, Data Vis, Graphic and Interaction, Sound Design, Graphic Atelier, Culture Code
Ensciでは受講科目をセメスターが始まる前に、留学生担当課のスタッフと相談して（専門分野や語学力など考慮して）決定するシステムとなっている。ただし受講科目は留学生・現地生を合わせた抽選で決めることになっており、必ずしも第一希望の授業が取れるわけではない。Atelier de Projetはアトリエ授業と呼ばれるメインとなる授業で、全ての学生が必ず受講する授業となっている。企業と共同で行うPBL型の授業で、最終プレゼンテーションでは大学の工房を使い、レベルの高いモデル製作まで行うことが特徴である。

College for Creative Studies
サービスデザインとその方法論について学んだ。Data Visualizationではサービスをデザインする際に必要なデータの収集方法や解釈方法またその視覚的な表現方法（どのようなグラフィックを用いれば分かりやすく伝わるかなど）について学んだ。Contextual Design Researchではデザイナーに求められるリサーチの方法論、具体的にはユーザーインタビューの仕方や定性分析、定量分析などについて学んだ。Design Graduate Studio Iではこれら授業で学んだことを活かして、実勢にサービスをデザインするプロジェクトを行なった。
Ensci Les Ateliers
主に工業デザインについて学んだ。ただ千葉大と大きく異なるのは、千葉大が論理的な思考に基づくデザインを学ぶことに対してEnsciでは新しい表現方法の探索といったアートに近いデザインを学べた点である。Sound Designでは日常の中に潜む水の音を録音し、それを再編集することで新しい音のコンポジションを制作する課題に取り組んだ。Atelier de Projetでは欧州のホテル企業と共に3歳から8歳のゲスト向けのプロダクト提案を行なった。大学の工房を使用してモデル製作を行い、工業デザインに必要な工作機械を用いたモデルやプロトタイプ（試作品）作りの能力を養った。

College for Creative stdudiesではプロジェクトのストラクチャーがきっちり決まっていた（毎週のタスク及び目的などがセメスター始めに決定されており、それを元にプロジェクトを進める等）。デザインのプロジェクトではゴールが明確に決まっていないことが多く、留学前は事前にスケジュールをたててプロジェクトを進めることが苦手だったが、留学後は計画的にプロジェクトを進めるマインドセットが身についたように感じる。
留学先で印象的だったことの一つに、フランス人の人間関係作りがあった。私のホームステイ先の家族が毎週友人を自宅に招き、夕食を共にしながら情報交換や関係深化を行なっていたことを目の当たりにした経験は、デザインにしか目を向けていなかった私には驚きであった。この経験を活かして、人間関係を豊かにし、信頼しあえる関係を築くことのできる人間になれる努力をしていきたい。

留学中は日本で当たり前にできていたことが、できなくなってしまうことが多々あります。それはかなり辛い経験になりますが、その一つ一つが成長の糧になり、またそれは日本では得ることのできない経験になると思います。

UNIVERSITY OF REGINA Saskatchewan, Canada

国際教養学部　国際教養学科３年　吉原七帆

レジャイナ大学には、様々な文化的背景を持った学生が在籍しています。留学生だけでなく、正規生にもカナダ以外のバックグラウンドを持った学生が多いように感じました。私はカナダでは”アジア人”として見られますが、大学には馴染みやすく、居心地が良かったです。留学生へのサポート体制としては、インターナショナルオフィスがあり、イベントなどで留学生同士が知り合える場を提供してくれました。また、勉強面では学部のオフィスに留学生担当のアドバイザーがいて、履修の手続きなどを行ってもらいました。ただ、どのオフィスで手続きするべなのか明確ではないことも多く、オフィスをたらい回しにされるという面倒なこともありました。

R

留学前の準備として、自身の英語力に自信が無かったため、リスニング練習のために Netflix を登録して海外の番組を見ていました。また、レジャイナ大学で心理学を履修する予定であり、加えて心理学は専門分野ではなかったので、心理学の基礎について少し勉強しました。生活面の準備としては sim カードを日本で申し込み、出国前に自宅に届けてもらいました。カナダに到着してすぐに連絡が取れる状態だったので、少し安心でした。
レジャイナ大学は、留学生のサポートがしっかりしていると感じました。インターナショナルオフィスのイベントでは、様々な企画があり、日常の楽しみが増えました。また、英語が母語ではない生徒のためのサポートのために千葉大学でいう English House のような場所がありました。悪い点は、手続きをする際にどのオフィスに行ったらいいのか分かりづらかったことです。また、授業料の関係で聴講は出来ないというのも残念でした。

私は大学内の寮で生活していました。寮は大学の建物と繋がっており、エレベーターを降りると大学の廊下というような環境でした。レジャイナの冬は厳しく、-30℃くらいまで気温が下がるので、外に出る必要が無く有り難かったです。一方で、大学内に幽閉されているような状態であるため、外出したくなることもしばしばありました。交通手段はバスのみで、バスを利用してスパーマーケットに行っていました。カナダでは売っている商品が大きいサイズであることもあり、日用品・食品の買い物は大変でした。通学する必要がなく、寮から授業に向かい、図書館で勉強するというような日々を過ごしていました。練習があるときはアルティメットフリスビーをしたり、勉強が嫌になったらジムに行くなどして気分転換をしていました。休日は特に遊びに行くところもないので、外食しに外へ出たり、友人達と料理をしたりと自由に過ごしていました。時間はたっぷりあるので、勉強に時間をかけて取り組む事が出来、自分でのんびりする時間も確保することが出来ました。

移民・難民についての科目と心理学を平行して専攻する予定だったのですが、昨年度のシラバスにあった移民関連の授業が今年度は開講されないということが判明し、心理学を中心に履修する事に変更しました。私は各学期三つの科目を受講していました。二学期間滞在する予定であり、社会心理学の授業の履修条件である心理学基礎の授業二つを秋学期に取り終えることを決めました。そのため、履修希望表で申し込んでいた社会学の授業の履修をやめました。残りの一つは、国際学 (International Studies) を履修しました。この授業の教授が非常に親切で、留学生が多い授業でした。後半の冬学期では、計画通り社会心理学の授業を履修しました。残りの二つの科目は、いくつか気になる授業の初回に出席して決めることにしました。また、教授についての情報検索サイトを友人に教えてもらい、同じ科目名でも人気の先生の授業を履修する事にしました。結果的に、文化人類学 (anthropology) の授業と、レクリエーションとレジャーという授業を履修する事にしました。

まず秋学期の授業について。心理学基礎の授業（2 科目）で学問領域全体の概要を学びました。神経の働きや脳科学的な領域も学習しました。医学系の語彙も多く、覚えるのが大変でした。国際学の授業では、国境を越えて広がるあらゆる問題の概要を学びました。経済、文化やアイデンティティ、紛争など毎回視点を変えての講義でした。テストは記述式の問題が多く、三時間の制限時間ぎりぎり使って回答しました。次に冬学期の授業について。秋学期に心理学基礎を履修したおかげで、社会心理学の授業を履修する事が出来ました。社会心理学とは、他人の存在によってその人の思想、感情、行動がどのように影響を受けるかということを研究する学問です。理論を中心に学習し、課題ではそれに基づく事例を考えました。実際に自分の日常生活にも当てはまる理論であったり、はっとさせられることが多く、興味深い学問だと思いました。また、文化人類学の授業も履修していました。前半は、いくつかの論文を読み、人種や文化についての創られたイメージ、言葉の意味の記号論的思想、社会規範の違いなどについて学習しました。後半は、アマゾン地域におけるカニバリズム（食人俗）について、一冊のエスノグラフィーを読みました。最後に、レクリエーションとレジャーという授業を履修しました。その名の通り、レクリエーションやレジャーについて、その歴史や意義、政策など幅広い視点から学習しました。カナダならではの発展の歴史や、事例、施策などを知ることが出来ました。全体的に授業の科目数は少ないですが、その分週に 2、3 回授業があり、1つの授業に対して集中して勉強する事ができる環境でした。

学習面では、積み重ねて学習していくことを身をもって感じました。英語での勉強は何をするにも時間がかかりました。教科書を読むのも、レポートを書くのも、普段の何倍もかかりました。この経験から、ゆっくりでも粘り強く頑張ることが大切だと気がつきました。分厚い教科書を読み切ったときは大きな達成感を得ました。勉強面以外では、自分から興味のあることに飛び込むことの大切さを感じました。英語に自信が無く、尻込みしてしまうこともあるかと思いますが、自分のやりたいこと、困っていることなどは自ら声を上げていかないと外部と関わりは出来ません。実際に私は、アルティメットフリスビーのチームに入りたくて、フリスビーをやっていた知らない生徒さんに話しかけて入れてもらいました。

留学を通して、自分の心の持ち方に変化が生まれたような気がします。物事には様々な考え方があり、その背景には多くの要因が関わっていることが分かりました。留学で得た視点、感じた気持ちを忘れずに頑張りたいです。また、支えてくださった周囲への感謝を忘れず、加えて、自分で選択・挑戦して成長できたことを自信に、これからもいろいろな壁を乗り越えていきたいと思います。
期待と不安がいっぱいだと思いますが、せっかくの機会なので後悔の無いような時間を過ごしてきてください！たくさんの人に出会って、多様な価値観、生活を体感して欲しいです。終わってしまえばあっという間ですし、どんな経験も無駄では無いので、全て楽しんでしまうくらいの意気込みで頑張ってください！実りの多い留学となることを願っています。

UNIVERSITY OF MONTERREY Nuevo Leon, Mexico

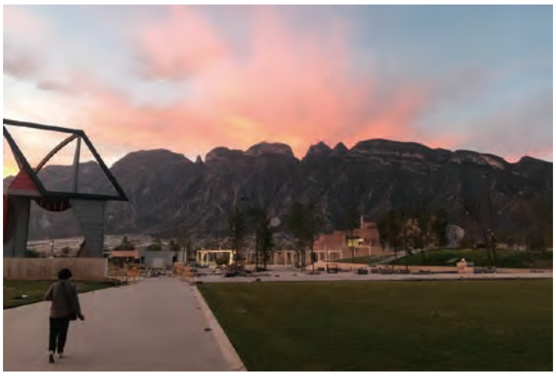
融合理工学府　創成工学専攻建築学コース１年　北川駿介

モンテレイ大学は世界中から留学生が集まる大学で毎学期 200-300 人の留学生を受け入れています。留学生へのサポート体制がしっかりしており、メキシコ到着前から、チューターがサポートしてくれます。学校の手続きだけでなく、家探しや交流イベントの開催など様々な面で面倒を見てくれたので非常に助かりました。学習面においてはデザインに力を入れており、メキシコだけでなくヨーロッパなどから教授を集めています。特徴として、５年前に日本の建築家　安藤忠雄が設計したデザイン棟が新設され、様々な設備も充実しています。また、この棟には建築学科だけでなく、インテリアやアート、ファッション学科も同じ大きな作業部屋を使っていて、他学科の学生と刺激し合える環境でした。

M

留学前は手続きがギリギリだったことや研究室での仕事で忙しかったためあまり留学に向けた準備ができませんでした。英語の準備は日頃からしていましたが、会話の練習があまりできていなかったので、最初の頃は苦労しました。
日本とは違って授業を丁寧にやってくれたので非常に勉強になりました。また、学内では英語でコミュニケーションをとることができますが、一歩大学から出るとスペイン語しか通じません。それは僕にとってマイナスではなく、プラスにつながりました。なぜなら、スペイン語を話せなければ生活できないという事実が、スペイン語を学ぶモチベーションにつながったからです。ヨーロッパ留学では英語がほとんど通じるため、その国の言語を学ばない学生が多いですが、メキシコに行ったことで英語・スペイン語両方とも身につけることができました。

前期は大学内にある寮に滞在しました。学校の隣にはスーパーがあるので買い物には困りませんでした。寮の中でトラブルがあっても、フロアのリーダーが助けてくれます。後期には寮の家賃が高かったため、友達と大学から少し離れたシェアハウスに住むことにしました。ルームメイトはメキシコ人４人とペルー人です。ペルー人のルームメイトは英語があまり話せず、会話が大変でしたが、片言のスペイン語でコミュニケーションをとっていました。メキシコは車社会で歩道が整備されていないため、あまり歩行には向いていません。移動手段はタクシーだとぼったくられる可能性が高いため、常に Uber を使って移動していました。また学校から出ているバスがあるためタイミングがあった時はそれを使っていました。



事前に英語で行われる授業のリストが送られてきたのでその中から自分が受けたい授業を選んで履修しました。英語で行われる授業は数に限りがあり、取れない授業もいくつかありましたがインテリア学科の授業を受けるなど、建築学科に関係ある他の学科の授業を受けました。後期は英語で行われる授業のリストの中には興味があるものがなかったので、自分で受けたい授業の担当教授にメールで「英語で授業をやってくれませんか」と問い合わせました。そのうち半分の教授から英語でやっても構わないと連絡が帰ってきたのでその授業を履修しました。

専門の建築だけでなく、インテリアデザインやランドスケープデザインを学ぶことができました。インテリアデザインの授業では、建物の形態や構成などではなく、インテリア、つまり内装デザインによりフォーカスしたもので、初めて学ぶことが多くあり、非常にためになりました。ランドスケープデザインは、日本では園芸学部と区別されていて、学部間の連携があまりないため、自主学習するしかありませんでした。しかし、メキシコではインテリアデザインと同じく丁寧に指導され、いろはを学ぶことができました。建築の授業では、日本はコンセプトやテーマを大事にするのに対し、メキシコでは形態のデザインやビジュアルが重要視されていて、最初は苦労しましたが、そちらの方の力もつきました。

学習面において：モンテレイ大学では広く・深く建築、インテリアデザイン、そしてランドスケープを学ぶことができました。この経験は私の視野を広げ、私が学ぶ建築に対し様々な視点を用いて自分のデザインを考えられるようになりました。　その他：コミュニケーション能力は確実に伸びたと思います。英語とスペイン語が上達したことはもちろん、この留学で得た経験は現在、自分が話すということに自信を持てました。
・視野が広がったこと：日本では建築だけを学んできましたが、インテリアやランドスケープなど建築に関わる他の分野を学ぶことができました。それは私に建築・インテリア・ランドスケープを一体として考える柔軟の思考の獲得につながりました。

・適応力がついたこと：私はメキシコでの経験で適応力がついたと思いました。自分がどこにいても、その場所で自分の居場所を作り出す力がつきました。
たった10ヶ月間の留学でしたが、非常に濃密な時間で初めての経験をたくさんすることができました。また、現地の人々や他の留学生が私のことを温かく向かい入れてくれて、非常に楽しい毎日をおくることができました。大変なこともたくさんありましたが、楽しむことを忘れず、行ってらっしゃい。

NORTHUMBRIA UNIVERSITY Newcastle upon Tyne, England

国際教養学部　国際教養学科3年　岡村玲奈

ノーザンブリア大学には学士、修士合わせてたくさんのコースがあります。専門の授業は大人数講義型の2時間のレクチャーと少人数ディスカッション型のセミナーが1セットになっており、交互に行われます。Academic Language Skills の授業は留学生のための授業で英語のエッセイの書き方から、引用や参考文献に関しても教えてもらえます。チューターと学生の距離が近く、オフィスアワーの時間には授業内容やエッセイの構成等の相談にも親身にのってくれます。図書館の隣には Ask for help といって学生の相談にのってくれるカウンターがあります。

N

イギリスの学士は３年、高校の卒業後には Sixth Form で専門の基礎を学ぶという特徴上、一年目から専門性の高い授業を行っているので、学業に関しては渡航前に専門分野について英語で少し基礎知識を入れておく、英語でエッセイを書くことに慣れておくといった準備をしておくと良いのではないかと思います。生活に関しては必要なものはほとんど現地でそろえられますが、冬が寒いため、ヒートテック衣類、ホッカイロを持っていくと役に立ちます。
ノーザンブリア大学には学士、修士合わせて多くのコースがあり、コース以外の人とも関わる機会があることから、話を聞いていると自分自身も今まで興味をもつことのなかったことに関心を抱いたりと視野を広げてくれるという点で良い環境です。悪い点としては時間割に関して、渡航前にシラバスを読んで申請したものに基づいて学校が取り決め、原則として変更ができないことや学生寮の手続きをはじめとして各所で融通が利かないことかと思います。

私は on campus の寮に住んでいたので、教室までは３分という好立地でした。自分の寮は留学生が多く、ヨーロッパ、アジアからの留学生が多くいました。女子専用のフラットで６人でキッチンを一つ、10 人以上でトイレ３つ、シャワー２つを共有するという感じでした。食事に関しては自炊をすることが多かったです。シティセンターまで 10 分ほど歩けば、大型スーパーやマーケットがあり、更に５分ほど歩けば、アジア食品のスーパーもあるため、必要とするものは大概揃うのではないかと思います。ニューカッスルは非常にコンパクトな街であり、徒歩圏内で問題なく生活できます。授業のある日は図書館で課題をし、授業を受けにいって、夜はご飯を作るというスタイルで授業のない日に３～４日分の食材をまとめて買い出しに行くなどしていました。土日の片方は友人達と出かける、もう片方は寮で課題や洗濯などをして過ごしていました。

Global Media の授業では映画の表象などを詳しく学び、サイエンスフィクションの映画が暗示しているメッセージは何か、映画を鑑賞して調べました。また、メディア、コンテンツ、audience の関係性について学びました。Writing for Publication の授業では読者に伝えたいことをわかりやすくまとめる記事の書き方、デジタルコンテンツを利用した発信の仕方など幅広く学びました。Practices of Journalism の授業ではジャーナリストとして必要とされる知識に関して、Key Concepts and Debates in Journalism の授業ではジャーナリズムやニュースコンテンツに関連する概念について現代のメディア界でどのように定義されるか学びました。Colloquium on British Culture はイギリスの North East の博物館や大聖堂、遺跡等を訪れ、現地の人に実際に話を伺うフィールドワーク形式の授業です。Academic Language Skills for Humanities and Social Sciences は留学生の参加が義務づけられているもので、アカデミックエッセイの書き方を中心に、リフレクティブライティングを行ったり、プレゼンテーションメソッドについて勉強しました。

Media and Communicatin の専門の授業では大人数講義型の２時間のレクチャーと少人数の１時間のセミナーが交互で行われます。レクチャーの授業で取り扱った内容に関してリーディングや調べ学習をしてセミナーではその内容を掘り下げてディスカッションを行うなどします。チュートリアルといってチューターと１対１でエッセイの構成に関して話し合うこともあります。それぞれの授業では西欧のメディア、ジャーナリズムに関する背景知識や関連した用語に対する理解が前提にあるものとして話が進められていきます。Practices of Journalism の授業ではイギリスや EU の選挙制度やイギリスの地方と国家の政治制度といった西欧の社会システムに関しても学びました。Key Concepts and Debates in Journalism の授業ではメディアの一点集中に関してやメディアイベントやモラルパニック、ニュースのタブロイド化など歴史も振り返りました。これらの内容は自分にとって馴染みがないもので理解が大変難しかったです。しかし、基本的にチューターはわかりやすいように話してくれますし、わからなかったことに関してはメールで再度確認する、オフィスアワーに聞きに行く、友人に聞くなどして補うことができると思います。厳しかったのはセミナーでのディスカッションです。特にイギリス人だけのグループであるとはやいスピードで会話が進められて、発言するのも難しく、会話内容を理解するのもチューターの話の倍は大変というように思います。事前に質問が提示されている場合には考えておくことができますが、その場のアドリブで尋ねられた質問に答えるのは大変でした。

自分が実際に留学をしてみるということでイギリス、英語圏の大学への留学の際にどのようなスキルを必要とされるか理解できました。スピーキング力に関しては未だにネイティブと対等に議論するのは難しく、もどかしい思いをすることもあります。しかし日本に帰ってきてから、自信をもって話すようになっていると言われることが多く、自分なりの成長はあったのではないかというように思いました。リーディング、リスニング、ライティングに関しては授業に出席して課題をこなすというルーティンの中で少しずつ慣れていくことができたと思います。留学前は留学とはこうあるべきであるという考えに固執し、自らの実力を過信して完璧にこだわっていましたが、セメスター２以降はストイックになりすぎず、気楽に楽しく頑張ろうと考えるようになりました。

授業、課題をはじめとしてアカデミック英語に何度も打ちのめされ、日常でも自分の英語力に散々悩まされましたが、帰国してもやはり思うのは変わらず、海外に行きたい、もっと英語スキルをあげたいということです。そういったことから、英語を使って発信できる仕事や日本から海外へいく人、海外から日本にくる人の手助けができる仕事に興味があります。
入念に準備をしていたとしても、現地に着いた後のギャップはあると思います。そのような状況に面した時、無理はせずにできる限りを尽くすことができれば大丈夫だと思います。一生に一度の留学生活の時間を楽しんでください！

UNIVERSITY PARIS-EST CRETEIL VAL DE MARNE

Creteil, France

文学部　国際言語文化学科４年　谷口葵

閑静なパリ郊外に位置する総合大学で、各学部に多くの留学生が所属していた。人文科学部にも約 20 名の留学生が所属しており、コーディネーターがそれぞれの学生の授業登録や学生生活のサポートをしてくれた。ただ、一定のサポートはあるが、不明点や不安なことは必ず自分から尋ねる必要がある。語学面ではフランス語の授業で親身にサポートしてもらえた。また、留学生向けにパリに出かけながらフランスの文化や歴史に触れられる授業もあり、交流の輪を広げられる場が設けられていた。寮での留学生に対するサポートはほぼなく、フランス語があまりできない生徒には冷たい対応をされるという印象だった。

P

学業面においては語学の勉強を中心に行った。留学の半年ほど前から語学学校に通い、特に聞き取りや会話のレベルアップを図った。また、フランス文学の知識をつけるために読書なども行っていた。生活面においては引っ越しやビザの準備を行った。スーツケース１つに最低限必要な持ち物を詰めた。また、段ボール１箱分に冬用の衣類や食料なども用意し、渡航後に両親から郵送で送ってもらった。

郊外に位置する大学で、静かな環境で勉強ができる。また、フランス語の授業では先生との距離が特に近く、授業もレベル別で開講されており、留学生それぞれの語学力をサポートしてもらえる点はとても良かった。また、留学生同士で仲良くなることはよくある一方で、現地の学生と交流を図ることは難しいと感じた。積極的に話しかける勇気や語学力があれば仲良くなることもあるが、そのような交流をサポートする場があればより交流が活発になるだろうとも思った。

住居は大学の寮を利用した。ネットでの登録の際に入居の申し出ができ、それが認められると１か月ほどで連絡が来て、書類の提出とデポジットの支払いが済めば入居できた。しかしルームメイトがフランス語を話せないこともあり、４月にホームステイに切り替えた。ホームステイ先は現地で知り合った日本人の方に紹介してもらい、値段交渉をして入居を決定した。食事は 80%自炊で、ルームメイトと夕食を交代で作っていた。一食３〜４€ の学食も時々利用していた。食品や日用品は大学近くのスーパーで手に入り、電化製品、衣類などは少し離れた大型ショッピングセンターで購入していた。通学は徒歩とメトロを使用していた。学生定期は安く、パリの広範囲で使用できた。平日は約１〜２時間授業を受け、その前後に図書館に行き、３〜４時間を予習･復習にあてていた。また、夜は週に 2、3 度日仏交流アソシエーションに足を運んでいた。休日は平日の残りの課題をやったり、買い物に出かけたり、美術館に足を運んだりしていた。

渡航前にシラバスに目を通し、19・20 世紀のフランス文学や比較文学、フランス語圏の文学、歴史学などの授業を選択した。用紙に記入し、千葉大学の担当の方に目を通してもらい、現地の大学のコーディネーターに提出した。渡航後、提出資料をもとにコーディネーターと話し合いながら授業を確定した。１年生向けの授業は大人数で先生との距離が近くないため、なるべく少人数で相談しやすい２年生以上の授業を選択するようアドバイスをもらった。最終的に詩・演劇・小説という異なるジャンルの文学作品を扱いながら 20 世紀のフランス文学の動向を追う授業、フランス語圏で活躍した複数の作家の作品を扱い、アイデンティティなどについて考える授業、タヒチ島を舞台にしたいくつかの作品の特徴などを比較し、分析する授業、あらゆる言語の構造など言語学の基礎を学ぶ授業、ヨガ、フランス語（ライティング、リーディング、会話、文法）、留学生が集まり、毎回異なる先生とパリの様々な場所を訪れ、文化や歴史について学ぶ文化交流の授業を履修した。あらかじめ授業についての書類は提出するが、本登録の際に修正して再提出するため、渡航前に全て確定させる必要はない。

① 20 世紀のフランス文学ー小説、演劇、詩など異なるジャンルの文学を読みながら、当時のフランス文学がどのような変遷を辿り、民衆や思想によってどのようにそれぞれのジャンルが成長あるいは衰退していったのか､20世紀とは文学界にとってどのような時代だったのかを学んだ。②フランス語圏の文学ーフランス語圏で活躍した４名の作品を扱い、作品の自伝的要素や彼らのアイデンティティなどについて分析した。作品ごとに指定された部分の commentaire composé（文学的分析のレポート）の提出が課された。フランス語のレポートは初めてだったため、形式も分からず、書き上げるのが大変だった。現地の友人に適切な表現を教えてもらったり、文法的な間違いがないかチェックしてもらったりしていた。③比較文学入門ータヒチ島のポリネシア人の生活やその異国情緒性、野生性などについて、様々な形式で描かれた４つの作品を読み、それぞれの作品の特徴や作者の背景などを比較しながら分析した。④言語学入門ーソシュールの提唱した記号内容と記号表現の関係、言語の分類（ヨーロッパ、中央アジア、東アジアなど）、文字の形式（アルファベット文字、表象文字など）など言語学の基礎的な知識を学んだ。１年生向けの授業のため、専門的な知識というよりは基礎を学ぶ授業。⑤ヨガー千葉大学で言う教養科目のスポーツの授業。⑥フランス語ー前期・後期共に中級〜上級レベルの文法、様々なテーマについて短いテキストを読解するリーディング、与えられたテーマについてディスカッションやプレゼンテーションを行うスピーキング、品詞の語用や類義語、同義語を学びながら自分でフランス語で文章を組み立てるライティングの４科目を受講した。学期ごとに３回のミニテストがあり、最終試験は上級クラスのみだった。

学習面に関しては学んだ範囲が狭く、奥深い学問でもあるため、まだまだ勉強を続けなければ知識を深められないと感じた。ただ、現在ヴィクトル･ユゴーの『レ･ミゼラブル』と貧困をテーマに卒業論文を執筆しているが、考察を進めていく上でのヒントになる知識は留学先で得られたと感じている。語学力においては自分では気が付かなかったが、周囲の人たちから上手になった、ペラペラ話せるようになったと言ってもらえた。当初は恥ずかしい、間違えたらどうしようなどと考えるあまり、一言も言葉が出ないこともあったが、現在では間違ってでも声に出してみようという風に意識が変わった。そのおかげで語学力の向上も見られたし、どんな人とのコミュニケーションも以前よりスムーズに進められるようになった。留学先では挫折経験や多文化に触れる機会を得ることができた。また、コミュニケーション能力を高めることもできた。就職活動においてこれらの経験や自らの適性、能力を活かした職業を見つけられたと思う。今後は壁にぶつかったり、周囲と意見をぶつけ合ったりすることもあるだろうが、その際にこれらの経験を活かし、自分の意見を明確に伝えつつも、異なる意見も受け入れられる姿勢で物事に取り組んでいきたい。

留学の決断は難しいことかもしれないが、今しかできないこと、後悔しない選択をすることで生涯自身の糧となる経験が得られるかもしれない。留学を決めた人は大小に関わらず、留学後に達成感を得られるような目標を持って、自分のペースで努力することが大切だと思う。

ENSCI LES ATELIERS Paris, France

融合理工学府　創成工学専攻デザインコース1年　田中翔子

全校生徒３００人程度の小規模な学校のため、学生間の交流が盛んでアットホームな環境です。設備に関しては、１階に木工・金工の工房があり、担当の先生が常駐しています。またアトリエと呼ばれるメインの授業では個人個人に作業スペースが与えられるため、２４時間で自分のペースで課題や制作を進められます。どの学生もデザインに対する意識が高く取り組みに真剣である一方で、昼食や夕食は多くの時間を割き、友人とのコミュニケーションに大切にしている印象です。パリの中心地に位置しており、美術館や展示会へのアクセスがよく、また学生証があれば大半の展示を無料で観れるため、知見を広めるのに大変適しています。

E

セメスター1に留学する際、5月上旬にポートフォリオやモチベーションレター、履歴書、推薦書を送りました。入学許可の後、アパートを知り合いづてに調べました。ビザの手続きは渡航の2ヶ月ほど前から行い、東京のフランス大使館で済ませました。大学の授業でフランス語ⅠからⅤまでを履修し基本的な文法を勉強しました。また6月頃にフランス語検定を受験し、渡航後も学校が始まるまでは語学の勉強を進めました。
24 時間学校で作業でき、アトリエに自分の机があるため、集中して作業を行うことができます。質問やアドバイスは英語対応してくれますが、授業の進行は全てフランス語で行われます。聞き取り調査でも相手の方がフランス語のみのことがあり、意図した質問をするのに苦労しました。学生はみんなフレンドリーなので、手助けしてくれ有り難かったです。

学校から徒歩でも 30 分圏内でメトロの出口すぐのアパートに部屋を借りていました。どこへいくにも利便性がよく、ベットルーム以外は大家さんと共用で夜は落ち着いて過ごすことができました。家に洗濯機がなかったため大家さんが週数回コインランドリーで洗濯してきてくれました。また暖房は小さな電気ヒーターのみでパワーを上げるとブレーカーが落ちてしまうため、冬は湯たんぽが欠かせなかったのが不便でした。パリは物価が高く、安価なファストフードも少ないため、朝夜はほとんど自炊です。基本的には近所のパン屋でフランスパンやクロワッサンを買い食べていました。昼食は学校が提携したパン屋があり、6 ユーロ以上購入すると 3 ユーロの割引が適応されるので、実質 3 ユーロほどで摂ることができます。また学校近くに冷凍食品専門のスーパーがあり、比較的安価なためよく利用した。時々、大家さんがモロッコ料理を振る舞ってくれたため有り難かったです。

履修する授業は、事前に170ページのシラバスのような冊子が渡され、フランス語で書かれたその書類を訳しながら目を通し概要を把握しておきます。ガイダンスの後簡単なワークショップがあり、内容に確信が持てない時は、その時に ENSCI の学生に経験を相談することができました。最終的には、コーディネーターの方とポートフォリオを見ながら、どのようなスキルがあるのか、留学で何を学びたいのかを具体的に説明し相談して決めます。ガイダンスを経て、英語に対応している授業やプロトタイプを何度も作れる授業を選択しました。その理由としては、英語対応の授業がパリの街を実際に巡って調査する内容だったこと、「手を動かして形を探る」という留学の目的によりマッチしていると感じたからです。受講した科目は「幼稚園での子供や先生の行動を調査し、家具や空間を提案する授業」「量感と色彩の関係を制作を通して考え表現する授業」「動物性と現代アートの関係性を見つめ、表現する授業」「パリを自転車で巡る中で、抱える政治、社会的問題に目を向け、人々の生活の問題を明らかにし解決策を模索する授業」です。これまでとは異なるプロセスや考え方を学ぶことができました。1週目にコンセプトを決めたら、翌週にはスケールモデルやプロトタイプを作りフィードバックを得るというサイクルを何度も繰り返すというデザインの方法は新鮮で、苦労も多くありました。しかし、形にすることで周囲の多くの人に共有することができ、課題が明確になり、それに対する会話が生まれます。会話での発見は「すぐに改善して確かめたい」という意欲につながり、手を動かして試すという流れが構築されます。これら一連の流れに対し、アトリエという作業空間は最適だったと感じます。これまで学んできた、調査やコンセプト決め、アイデア展開と言ったスキルが、最終アウトプットでさらに生きてくる経験ができました。また、ENSCI の学生の成果物やプロセスも非常に勉強になりました。授業の中でプロセスを統一することはなく、各学生の着眼点にあった手法を選択できるとこで授業内での提案の幅が広がります。同じ空間で作業を進めることでお互いを高め合っていました。

どの授業に対しても、最後には展示会が催されるため、制作したプロダクトに対し、どう展示空間を構成すれば良いかを考えるのも課題のうちでした。プレゼンボードのフォーマットを統一し、展示期間中の教室内の動線を考え作品を配置したりとプロセスが多くありました。授業は個人制作が多い一方で、展示では学生全体で協力して環境を作り上げていく面白さを学びました。一方でほとんどの授業がフランス語だったというのはやはり大変さを強く感じました。学期が始まった頃は本当に何も聞き取れず憂鬱な気持ちになることもありました。しかし時間が経ち慣れてくると、何の話題について話しているのか程度のリスニング力はつき、内容を把握できる程度のリーディング力もつきました。ある授業の最終プレゼンでは、友人に添削してもらいフランス語での発表にチャレンジしました。

私が留学していた際、丁度 Gilet Jaunes（黄色いベスト運動）が激化し、週末は大通りのお店や鉄道は封鎖され、物々しい雰囲気でした。行動が制限されるため何週間か窮屈な日々が続きましたが、次第に安全な道や時間帯を見つけることができ、普段の生活を送ることが出来ました。フランスの歴史や芸術だけでなく、今の情勢や社会問題を目にすることができ、貴重な経験でした。今後は、大学での勉強だけでなく、日本や世界で今何が起こっているのかを把握し視野を広く持とうと思います。　また週末、日本に興味がある学生とカフェで日本語とフランス語を教えあう会を開いていました。テキストを使いながら、互いに文法を習い、例文を作って答え合せしたりしていました。この経験を通して、帰国後も積極的に留学生と関わるようにしようと強く思いました。

ENSCI での留学を経て、手を動かし物を作り、検証し、ブラッシュアップしていく重要さと面白さを改めて知ることができました。どの学生もレベルが高く自分の未熟さを痛感しましたが、自分の作品や工程を評価されることもあり少し自信をつけることもできました。これからはなるべく「もの」に近い場所で活躍していきたいと思うと同時に、サービスデザインとの関わりも見つめていきたいと思います。
学校独特の雰囲気を楽しむことができ、新鮮で面白いです。フランス語ばかりで苦労するかもしれませんが目の前のことにしっかりと取り組めば成果を出せると思います。オープンな雰囲気なのでスキルもモチベーションの高い ENSCI の学生と積極的に関わると良いと思います。

POLITECHNIC UNIVERSITY OF MILAN Milan, Italy

融合理工学府　創成工学専攻デザインコース１年　田中翔子

学生数が多く、非常に規模の大きい大学です。School of Design の中でもプロダクトや空間デザインだけでなく、ファッションデザインやコミュニケーションデザインなど様々な分野に分かれており、それぞれの分野に特化して学ぶ事ができます。留学生の割合が高く、異なるバックグラウンドを持った学生と知り合い、一緒にプロジェクトを進める事ができます。一方で現地の学生と知り合える機会は多くはありません。どれだけ密に英語でコミュニケーションが取れるかが鍵になってきます。常に意見を持ってディスカッションに参加し、ただ目の前の作業をこなすだけでなく、先を見てグループを引っ張っていけると得られる経験も増えると感じました。

学内でノミネートしてもらい、個人情報の登録、任意でポートフォリオを提出しました。オンライン上で希望のコースを登録後、２週間ほどでコーディネーターからコース確認の連絡があり、決定されます。その後、シラバスや授業一覧の書類を参考に Laboratorio を一つといくつかの授業を任意で選択し、１セミスターで合計 30ECTS まで履修できます。希望授業が選択できなかった場合、他の授業の履修希望をコーディネーターに連絡します。
ダブルディグリーの学生がチューターとしてついてくれる制度があり、そこで交友関係を広めることができました。授業については、講義と制作が段階的に構成されているためプロセスが分かりやすかった一方で、受講人数が多い分教師と学生の距離が遠く、気軽に相談できませんでした。

キャンパスから電車を一回乗り換え、片道１時間程度のところにアパートを借りました。閑静な住宅街で、徒歩３分のところに大型スーパーマーケットがあります。アパートでは自室以外は共有で、初めの３か月はスーダンから来た留学生と、後半の2ヶ月はインドからの留学生と一緒に生活していました。大家さんも近所に住んでおり、同じ階に事務所を構えているため、給湯器などにトラブルがあった際はすぐに駆け付けてくれ安心です。また、インターネット環境に関しては Vodafone にて SIM カードを購入しリカリカというプリペイド式を利用していました。１ヶ月あたり、データ量 10GB 通話なしで 15 ユーロでした。アパートに wifi がありそちらは無料で無制限に使用でき、大学の wifi はどの校舎でも利用できました。食事については、大学周辺のテイクアウトは価格が低く４ユーロあればお腹いっぱいになれる量を買う事ができました。

私は、Ephemeral / Temporary Space 2、User and Social Innovation、Lighting（聴講）の３つの授業を受けました。どの授業も初めは講義、後半がグループワークという形式でした。成果物も映像や模型、ポスター、レンダリングなど様々で幅広いスキルが要求されます。Ephemeral / Temporary Space 2では、「Rebellion（反乱）」というテーマに対し、動画制作や建築模型を制作しました。コンセプトをどう形で表現するかを試行錯誤しました。最終成果物を動画で表現するというのも面白い経験でした。User and Social Innovation では、毎週イタリアや世界で使われているサービスを手がけたデザイナーが講義をしてくれました。サービスデザインがどのように発達し今日に至るのか、サービスの背景の物語を知ることができました。Lighting の授業では、与えられた空間に対し、コンセプトを決め照明計画を行いました。ビジュアルだけでなく、数値などでリアリティを示す必要がありました。今まであまり触れてこなかった分野だけに大変さもありましたが非常に勉強になりました。

英語でのグループワークの難しさと楽しさを一番に感じました。ミーティングが行き詰まった時、語学力不足が原因で、ついきつい口調になってしまい余計雰囲気を悪くしてしまう経験をしました。日本語でのコミュニケーションと同じく、相手がどう考えているのか、チームでのゴールはどこにあるのか、スケージュールを細かく組んで共有し明確にすることが重要です。ふたつの授業で、私と中国からの留学生数人というメンバー構成になり、中国語での会話に入れない事が何度か悔しい思いをしました。英語での理解力の向上が課題です。また、空間デザインや照明デザインの授業を通して触れたことのなかったソフトのスキルを得られました。照明デザインの課題では、企業が無償で提供しているソフトで照度計算をし照明の配置を決定し、Sketchup を用いてモデリング、Lumion でレンダリングといったステップ毎にツールを使い分けるスキルを得ました。提案にリアリティーを持たせ、クオリティーを上げることでフィードバックや改善点も見えやすくなりました。A1 サイズのプレゼンボードを構成したり、照明器具の知識を深めたりとインプットとアウトプットをバランスよく行う事ができました。またミラノデザインウィークでは、日本人のデザイナーさんの出展の手伝いをさせてもらいました。期間中は展示を見に来てくれた方に英語・日本語で作品の紹介なども行いました。作品のパーツを提供している会社の方とも知り合うことができ、将来についての相談にのって下さったり、お食事に連れて行って頂いたりと大変貴重な経験をさせてもらいました。期間中お会いできたデザイナーさんも企業の方も、自身の作品や仕事に自信と誇りを持っておられ、情熱を持って接してくださり、私の目指したい社会人像がそこにはありました。

グループワークが中心だったため、英語でのコミュニケーションにどれだけ参加できるかが重要でした。グループをファシリテートする立ち位置になれなかったのが今後の課題です。英語力を高めるだけでなく、思考力も磨こうと思います。また、POLIMI では空間デザインとサービスデザインの共通点やつながりを自分の中で明確にする事ができました。常に「ユーザーにとっての価値」を考え提案することや、事例や文献を集め分類し分析する点は共通しています。課題を通して、グラフィックやレンダリングソフトのスキルを身につける事ができこれからのデザインに活かしていけると考えます。また、ミラノデザインウィークでは学生の展示が多く、大変刺激を受けました。今後は発信者として学外でも活動していきたいと思います。留学を通してどの程度英語力がついたのか実感はありませんが、毎日英語でコミュニケーションをとれる体力と精神力はついたと思います。今後は、日本で行われている他の大学とのワークショップにも積極的に参加し、力を発揮していきたいです。また、空間デザインを学べたことで、将来の選択肢が広がったように感じています。新しい世界に思い切って一歩踏み出す勇気を得られました。
コースを選択する際、これまで学んできた分野以外にも挑戦する事ができます。積極的に意思を伝え、学びたい事を明確にしてから向かうと良いです。また、ミラノデザインウィークでは最先端の取り組み、世界の動きを含め多くの発見があのでぜひ訪れて欲しいです。

UNIVERSITY OF LEIPZIG Saxony, Germany

理学部　化学科３年　大野亘児

ライプツィヒ大学はドイツ東部に位置するザクセン州の中で最大の総合大学です。学生数は約 30,000 人、神学から医学まで、あらゆる分野の学部が存在し、Erasmus プログラムをはじめとするヨーロッパからの留学生も多く学ぶ、国際色豊かな大学といえます。ドイツ国内では 2 番目に古い歴史のある大学で、ゲーテやニーチェ、森鴎外といった著名人や、さらにはアンゲラ・メルケル現首相もその学生時代を過ごした場所です。千葉大学との協定の歴史も長く、現地には日本学科もあるので、日本人留学生は渡航して間もない時期から様々な事務手続きや日々の問題において、Buddy と呼ばれるドイツ人学生のチューターから手厚い支援を受けることが出来ます。

まず学業でいえば、何といってもドイツ語の学習です。ドイツ語圏ですから、日常生活の中でも必要ですしね。といっても自分はドイツ・ドイツ語が好きでドイツに留学したような人間ですから、全く苦ではありませんでした。実際、「こんな語学力で足りるだろうか」という不安は最後まで付き纏いましたが、そもそも人間 100% 準備した上で行くなんて無理です。現地で揉まれる中でこそ身に付くことはたくさんあります。ただし、現地でのビザ取得に関してはよく準備した方がいいでしょう。
ライプツィヒ大学の良いところは、何といってもその抱える外国人学生数も多いことから、留学生に対する支援が充実していることです。学業面のみならず、例えば学内には主に留学生のため小旅行やパーティーなどを企画してくれる学生団体があります。また 24 時間オープンのキャンパス図書館もよく気に入って利用していました。それから学食では気軽に安い値段で食事が出来るのが便利です。

住居に関しては、大学のメインキャンパスからそう遠くない寮に住んでいました。2 人用のいわゆる Wohngemeinschaft(WG) と呼ばれるシェアフラットで、キッチンとシャワー・トイレは共用、個室は各自に 1 つずつという形です。市内はトラムによる交通網が発達しており、通学にもそれを利用していましたが、授業によっては街中に点在する様々な学部の建物へ行く必要があったので、4 月以降、中古自転車を（わずか 30 ユーロで）入手してからは、基本それでどこへでも出かけていました。昼食に関して日曜以外はほぼ毎日のように学食、時に友達との会食も楽しみ、日曜および夕食は自炊か外食がほとんどでした。ドイツではスーパーを含め基本全ての店が日曜休業なので、買い物は土曜日までに済ませましょう。授業以外の時間にはよく、日本語を学ぶドイツ人の友達とカフェなどで会い、Tandem（互いの母国語を教え合うこと）をしたものです。

1 年間すなわち 2 学期あった留学期間中に、まず一貫して受講していたのはドイツ語の語学の授業です。冬学期はそれぞれ B2 レベルの発音、ライティング、会話に特化したコースを、続く夏学期は C1 レベルの週 3 回集中コースを受けていました。これらの授業は主に「大学でドイツ語を使って勉強する外国人学生」を対象に開講されているもので、そのため学術的なドイツ語に関するテーマも多く取り入れながら、幅広く 4 技能を伸ばす練習をしました。それと並行して僕が大学で履修していた専門の授業は大きく分けて 2 種類。1 つは自身が所属する理学部における専門である化学、もう 1 つは自身が大変興味を持つ外国語教育の分野に相当する DaF（日本語訳：外国語としてのドイツ語）の授業です。前者で受講したのは特に表面化学と呼ばれる分野の修士向け授業（英語開講）、後者に関してはそもそも日本ではまだ専門分野として確立されていない領域なので、現地に行ってからその存在および詳しいところを知り、興味を持ったので受講することに決めたというのが正直な流れです。このようにライプツィヒ大学の留学生は自らの所属学部を持ちつつも、基本的には他学部にもわたってあらゆる授業を履修することが出来ます。

まず化学の方から説明すると、受講していた授業名は「Surface Analysis of Solid State Surfaces」、つまり「固体表面の表面分析」となります。内容としては化学の中でも物理化学と呼ばれる分野の一領域で、簡単に言えば、固体の状態にある物質の表面がどうなっているかを調べるための技術に関するお話。なぜそんなに表面のことが大事かというと、皆さんの身の回りの様々な「固体」である物体を考えても、我々がそれらと触れ合う接点って、いつもその「表面」ですよね？つまり表面というのは、常に外界からの様々な影響にさらされる、いわば「内部」とは異なった「むき出し」の面なのです。ゆえにそこで起こる化学反応は特異的で、そうした固体表面の性質を調べることは、新素材などを開発する上でも重要になってきます。この授業ではそのための先端的な技術を講義形式にて学びました。さて、僕としてはもう一方の DaF にこそ力点を置いて説明したいところなのですが、これはドイツ語でいう Germanistik、つまり「独文学」とは別に独立して存在する専門分野で、前項で示した日本語訳の通り、ドイツ語の「外国語としての」性格に注目し、近年精力的に研究が行われている分野です。具体的には外国語教育論、教授法、第 2 言語習得など様々な立場からアプローチが取られており、要はドイツ語という言語を外国語として教えるためのベストな手法は何か、それを考え編み出すことに一つの目的が置かれています。かねてより外国語を学ぶのが好きで、日々いろいろ試行錯誤しながら外国語を学ぶ自分にとって、この DaF という分野は大変魅力的なものでした。

留学と呼ばれている以上、留学の中心とは「学び」にあるわけですが、どうでしょう、その「学び」とは単純に学業における知識のことだけを指すのでしょうか？僕が 1 年間ドイツで学び、持ち帰ってきたものはたくさんありますが、僕にとっての成長につながった「学び」は、むしろ教室の中で習ったことより、ドイツという国に住み、多くの人々と交わりながら共に生きていく中で学び感じたこと、すなわちドイツの人たちの生き方や考え方、人とのつながりの大切さと温かさ、この世界の言語や文化の多様性…といったことでした。そしてその中で「自分」を見つめ直したこと―人生の意義とは何か、自分にとっての幸せとは何か―が、帰国後の今にわたっても自分をさらにまた先へと導いてくれる原動力となっています。自分は「自分」でいて良い。これこそドイツという社会の寛容性が僕に示してくれたことなのかもしれません。1 年の留学の終わりを「。」ではなく、1 つの「、」に。僕にとってドイツ留学は、自分がこれからの人生、何に関わっていきたいのか、何をしたいのかを改めて素直に考えるきっかけをくれました。具体的にはドイツ語をはじめとする外国語学習および教育。やはりそれに携わることが自分にとって一番楽しく、面白い。今はまだまだ手探りですが、道はいろいろあります。だから別にいわゆる一般的な「就活」が全てだとは全く思いません。苦労もあるでしょう、でも自分は自分の道を。

僕の留学は決して模範的でないかもしれません。でも各々の留学に普遍的な「正解」なんてない。だからこそあなたも「あなた自身」の留学へ、出かけてみませんか。

POLITECHNIC UNIVERSITY OF MILAN　Milan, Italy

融合理工学府　創成工学専攻デザインコース１年　岩崎有紗

イタリアはより専門科目に対する職人気質が強いように感じます。製作のレベルが高く、競争的な雰囲気が強いので刺激的です。イノベーション系のデザインはあまり強くないかもしれません。授業によって「イタリア人とその他」という雰囲気も少しあるので、イタリア語を使うなどして溶け込む工夫が必要なときもあります。人数が多い大学なので、コミュニティ作りが少し難しいこともあるかもしれません。大学関連や住居の留学生のサポートは自分から求めないとあまり無いです。 ESNという、留学生向けのサポートのような学生団体もあり、ツアーやイタリアを知るイベントが定期的に開催されています。

千葉大の第二外国語の授業を取って、留学先の言語を簡単には勉強していきましたが、現地の言語よりも、授業で使う英語を優先的に勉強しました。専攻は同じだったので、デザイン分野についての準備はあまりしていません。同じ大学に過去留学した先輩に、おすすめのデザイン系のイベントや美術館などを聴いていきました。乾燥しているので、のど風邪をひいたとき用に使い捨てマスクを持っていけばよかったなと思いました。
学生教師ともにレベルが高く、競争的で刺激的な環境であること、そして授業やデザインウィークをはじめとして世界の一流のデザインに触れられる機会が多いことが良い点です。授業によってはイタリアの学生と関わる機会が少なかったり、学生数が多いので留学生へのサポートが基本的には最低限であること、イタリア語がわからないとついていけない場面があることが悪い点です。

ミラノもなかなか家探しが難しいです。加えて、不穏な通りもあるため、ミラノ工科大学に通う知り合いの意見を聞きながら家探しをしました。最終的には大学の寮の空きを運良く見つけたのでそこに応募しました。デザイン系の学科キャンパスがあるボビザ周辺は、雰囲気があまり良くない上に生活に不便だと聞き、建築学科のキャンパスの近くの Dateo にある寮にしました。通学は電車で 30 分程度でした。電車、地下鉄、バス、トラムが張り巡らされているので、ミラノ内の移動は公共交通機関で済みます。終電が終わっても同じルートでバスが走るので、いつでも移動できます。授業は 1 コマ 3 時間なので、授業のある日は 9 時過ぎから 18 時過ぎが授業でした。グループ課題チェック前には、毎回 24 時間開いている他のキャンパスに移動して夜通し制作をすることが多かったです。

「PRODUCT SERVICE SYSTEM DESIGN STUDIO SPATIAL DESIGN」所属したプロダクトサービスシステムデザインコース（通称 PSSD）のメイン授業です。ミラノ商工会議所をリデザインしていく内容でした。場所・環境・エクスペリエンスの要素を、説得力があり、ユーザーの記憶に残るものとしてプロダクトデザイン・サービスデザイン・システムデザインのアプローチにいかに融合させるかを探求し、リサーチから課題発見、コンセプト設定、最終提案までを一貫して学習します。「MATTER OF IMPORTANCE A CRITICAL INVESTIGATION INTO GLOBAL MATERIAL RESOURCES」材料と材料の製造、加工、環境負荷について理解し、デザインの際の材料選びの知識を得ることを目的としています。「DESIGN SEMINAR」ワークショップ形式の授業。メインのスタジオ授業での提案を充実させることを目的とし、クリエイティブな思考と総合的にデザインをする技術を向上させ、精細なプロダクト・サービス・システムデザインを行うために、アイデア出しと検討の方法を学習したり、数種類のラピッドプロトタイプを行ったりする。

「PRODUCT SERVICE SYSTEM DESIGN STUDIO SPATIAL DESIGN」実際にミラノ商工会議所で調査を行うところから提案まで、じっくり行いました。調査と分析の結果を元にして課題を精査するとともに提案のコンセプトを作成します。 単にコンセプトを作成するだけではなく、歴史的に使われているデザイン・建築の要素を調査し取り入れました。最終プレゼンテーションは、担当教員、アシスタント、ミラノ商工会議所の職員の前で行いました。
「MATTER OF IMPORTANCE A CRITICAL INVESTIGATION INTO GLOBAL MATERIAL RESOURCES」個別の材料についての知識を深めるというより、材料の供給、使用、廃棄に関する包括的な知識や、地球規模での影響など、サステイナビリティについて学びました。座学だけではなく、それぞれの材料への知識を深める目的で、Material ConneXion Milano を訪問したり、座学や視察で学習したことを元にして、既存の製品の材料を再考し発表したりしました。「DESIGN SEMINAR」『work』『living』『leisure』の 3 つの側面から 2035 年の都市の姿を考えることがテーマでした。調査から最終提案までを短期間で行い、アイデアの検討とラピッドプロトタイピングの手法についての学習をしました。2035 年の都市を考えるにあたり、過去の都市についてテクノロジー、材料、燃料、インフラ等の歴史を振り返り、今後 16 年でどう発展するかを思考しました。

専攻しているデザインを日本と異なる環境で学べたことにより、1 つのテーマや課題に対する解釈、要件の優先順位のつけ方、アプローチの多様性を肌で感じることができました。また、ヨーロッパの中でデザインの傾向の違う 2 つの国に連続で留学することによって、ヨーロッパの中でのデザインの違い、デザインのスタイルごとの長所と短所についてそれぞれ考える良い機会になりました。また、国際的に働いていきたいという気持ちが生まれたのも留学前後での大きな変化の1つだと思います。
国籍のアイデンティティについて悩んだり考えたりすることができたのも、1 年間という長めの期間で留学したからこそ感じられたことだったと思います。留学を通して、日本にいるだけでは味わえないような失敗や悔しい思いをしたり、成功や友情を得たりすることを経験しました。さまざまな物事をに対しての視野や視座を広げることが出来たと考えています。このことにより、将来の職業についての考えの幅が広がり、また、就職活動において自分の価値の一つとしてアピールできるも経験の1つになったと思います。ヨーロッパは日本と文化が異なり、さらに国によって雰囲気が大きく異なるように感じました。留学先の国の友人ができるとインターネットでは知り得ない文化や言い伝え、雰囲気を知ることができるので、現地の友人作りは大切です。

COLOGNE UNIVERSITY OF APPLIED SCIENCES Cologne, Germany

融合理工学府　創成工学専攻デザインコース１年　岩﨑有紗

国際色豊かで、誰に対してもオープンな雰囲気です。ケルン応用科学大学 (TH Köln) が大学全体の名称で、Köln International School of Design は学部の名前です。他学部とキャンパスが分かれており人数が少ないため、デザイン学科内は半年もあれば全員顔見知りになるくらいです。自由度が高い分、質の高い製作をするには自主的な活動が必要になります。毎週金曜は全員授業がなく公開プレゼンテーションのみなので、他の授業からもたくさん学べる環境です。製作をするための施設は揃っており、それぞれの施設に担当の教師が在中するため簡単に利用することができます。留学生の割合が多いため、サポートはオープンで充実しています。履修や生活についてをはじめとして、留学生、全学生用のイベントが月１くらいのペースであります。

千葉大の第二外国語の授業を取って、留学先の言語を簡単には勉強していきましたが、現地の言語よりも、授業で使う英語を優先的に勉強しました。専攻は同じだったので、デザイン分野についての準備はあまりしていません。同じ大学に過去留学した先輩に、おすすめのデザイン系のイベントや美術館などを聴いていきました。乾燥しているので、のど風邪をひいたとき用に使い捨てマスクを持っていけばよかったなと思いました。

良い点と悪い点が表裏一体のように感じました。様々なデザイン分野の授業を選択できることと、１年生から大学院生が同じ授業を取れることは、授業内容や履修している学生によって授業の質が変わる要因になっているように感じました。また、国際色が豊かなぶん、授業によってはドイツの学生と関わる機会があまり無い場合もあります。初心者向けのドイツ語の授業を無料で開講していることはありがたかったです。

ケルンは家さがしが難しい都市です。留学開始前に家を見つけるつもりが見つからず、最初の１週間ちょっとは Airbnb などでしのぎました。賃貸サイト経由でも数件応募しましたが連絡が返って来ず、結局大学運営の賃貸の貸し借りなどが載っている Face book 非公開ページを経由して、ちょうど１セメスター留学する KISD の学生の部屋を又貸ししてもらいました。通学はバスとトラムを乗り継いで 30 分程度でした。大学に登録されている間はノルトライン・ヴェストファーレン州内の公共交通機関が乗り放題になります。授業は週３日ほどでした。単位上限的に授業コマ数はあまり多くないので、拘束時間は少ないです。授業後や全休の日によく仲の良い友達またはチームメイトとお互いアドバイスしあいながら制作をしていました。土日は大学が閉まっているため、プレゼンテーション前の期間以外は家でゆっくりしたり、近くの都市に日帰りで遊びにいったりしていました。

「IoT at ZOO」Long term project (1 セメスター)。ケルン動物園との共同プロジェクト。IoT の提案をケルン動物園に行うというテーマでした。チームには、デザイン学部から２人、ケルン応用科学大学のエンジニア学科から２人、経済学部から１人という編成で行いました。「Eating the past」Short term project (1~2 週間ほぼ毎日のワークショップ形式)。「自分にとって意味や思い出のある食」をテーマにアイデアを広げていき、各々自由な手法で A2 ポスターの制作を行いました。最終成果物は、ケルン市内のレストランで展示しました。「Desktop Video for International Students」project とは別の、ソフトウェアのスキルアップを図る授業です。主に After Effect の技術を一から勉強しました。レクチャー形式なので効率的な習得ができ、先生がよく使う便利な裏技も学べます。「Gute Stube AG」学内のカフェの運営スタッフです。留学生を含め学内の運営スタッフに参加しなくてはなりません。他には写真、映像などがありました。

「IoT at ZOO」デザインパートは基本的にフィードバック形式でしたが、良いか悪いかくらいしかフィードバックがもらえなかったため、演習に近いような感覚でした。私は新入生とペアになってしまって、デザイン系ソフトを何も使えないメンバーがいることに対するフォローなどは特に先生側から無く、結局１人で制作をすることになりました。「Eating the past」期間が短いこともあり、アイデア展開の仕方など、授業の進行が決まっていました。考えたアイデア、ストーリー、コンセプトをポスターの１枚のグラフィックにどのように落とし込むかということに注力した授業です。単なるコンピューターグラフィックにせず、写真を撮ったり、版画を作ったりと、全学生が違う方法で表現していたので、学生からも表現の幅広さやアイデアについて学ぶことができました。「Desktop Video for International Students」具体的には、グリーンバック映像の処理の仕方、ある映像を別の映像のスクリーンにはめこむやり方など、実際に役立つ映像スキルを重点的に教えてもらいました。AfterEffect は以前個人的に学習してアルバイトで使ったりしていましたが、プロに直接教えてもらうと無駄なくより綺麗な編集ができるようになりました。初心者にも対応した授業でしたが、習得者にもためになると思います。「Gute Stube AG」週に１回４時間ほどカフェスタンドでコーヒーを作ります。約３人でシフトを組むのですが、ドイツの学生が少ない授業ばかり取っていた私にとっては、現地の学生と話す絶好の機会となりました。コーヒーを買いに来た人とも会話することが多いので、ある意味留学生にはもってこいかもしれません。

専攻しているデザインを日本と異なる環境で学べたことにより、１つのテーマや課題に対する解釈、要件の優先順位のつけ方、アプローチの多様性を肌で感じることができました。また、ヨーロッパの中でデザインの傾向の違う２つの国に連続で留学することによって、ヨーロッパの中でのデザインの違い、デザインのスタイルごとの長所と短所についてそれぞれ考える良い機会になりました。また、国際的に働いていきたいという気持ちが生まれたのも留学前後での大きな変化の1つだと思います。国籍のアイデンティティについて悩んだり考えたりすることができたのも、１年間という長めの期間で留学したからこそ感じられたことだったと思います。留学を通して、日本にいるだけでは味わえないような失敗や悔しい思いをしたり、成功や友情を得たりすることを経験しました。さまざまな物事をに対しての視野や視座を広げることが出来たと考えています。このことにより、将来の職業についての考えの幅が広がり、また、就職活動において自分の価値の一つとしてアピールできるも経験の１つになったと思います。

ヨーロッパは日本と文化が異なり、さらに国によって雰囲気が大きく異なるように感じました。留学先の国の友人ができるとインターネットでは知り得ない文化や言い伝え、雰囲気を知ることができるので、現地の友人作りは大切です。

POLITECHNIC UNIVERSITY OF MILAN Milan, Italy

融合理工学府　創成工学専攻デザインコース１年　仲宗根掌心

ミラノ工科大学はイタリア最大の学校の1つで、建築・工学・デザインを学ぶことができます。授業カリキュラムも整っていて、学生は先生から与えられた課題をその意図に沿って着実にこなしていく印象でした。イタリア人以外にも中国人やインド人の学生が多く、修士課程の授業は英語で行われます。留学生へのサポートは最初のガイダンスやチューター制度はあるものの、とりわけ手厚いということはなく、授業でも正規学生に混じって平等に扱われるような感じです。

P

イタリアに３ヶ月以上滞在する場合は事前にビザ（入国査証）を取得する必要があり、私は留学前半で滞在していたドイツで、フランクフルトにあるイタリア領事館で申請を行いました。申請は事前に予約して、午前中に受付、書類に不備がなければ午後にビザの発行という流れです。申請時には住居に関する書類（入国日から最低３～4週間程度の住居）も必要で、私は３週間分の宿の予約票をもって申請しました。

私が留学前半で行っていたケルン応用科学大学と比べ、ミラノ工科大学は大きな学校で授業内容やカリキュラムもしっかりしています。授業内で先生から与えられる課題を着実にこなしていけば仕事で活躍するための実践的な力は身につきます。その反面、与えられた課題に応えているだけでは身につかない自由な発想力、ステレオタイプから逸脱する力などは習得しづらい環境であると学生や授業の様子を見ていて感じました。

住居についてはドイツのケルンと比べ見つけやすく、予算が多ければいくらでも良い部屋が見つかるといった感じです。私は予算を低めに設定したので郊外にある共同寝室の４人向けシェアハウスに住み、大学へは地下鉄と電車を利用して１時間ほどかけて通っていました。授業のない日にもプロジェクトのミーティングが入ることが多かったので、午前中に大学へ行って夕方まで作業し、帰りに近所のスーパーで買い物をして帰宅、夕飯を食べて、ルームメイトと雑談をしながら一日を終えるような生活をしていました。何も予定のない日は、家でルームメイトと雑談しながらゆっくり過ごしたり、必要であれば市街地へ買い物へ行ったりもしました。ルームメイトにも恵まれ、たまに外食へ行ったり一緒に料理をすることもあり、家族のような感覚でした。

履修登録は、入学手続きのメールのやり取りの際に授業のリスト（うち1つは受入先から受講を推奨されます）が送られてきて、授業の選択と仮登録、留学初日のガイダンスで本登録を行うという簡単なものでした。私はメインとして実習型のプロジェクト「Product Development Design Studio 2」を受講しました。製品デザインの授業で、午前中はグループで行うプロジェクトの進捗に対する教授からのフィードバック、午後は作品制作のための3Dモデリングやプリンティング、電子工作の実習があり、朝９時から夕方６時まで続くハードな授業です。授業外で行う課題も多く、休日にフィールドワークやミーティングを毎週のようにしていました。その他にサステナブル（持続可能な）デザインについて学ぶ「System Design for Sustainability」という講義がメインの授業を受講しました。授業は午後からで、授業期間中の前半は講義を通して理論を学び、後半は講義を踏まえて「サステナブルなシステム提案」をテーマに簡易的な実習を行いました。

メインのプロジェクト「Product Development Design Studio 2」では「旅行体験」をテーマに航空機内のプロダクトのデザインと設計を行いました。航空業界に関するデスクリサーチや利用者へのインタビューから現状の旅行体験における課題の発見、課題を解決するためのアイデア、ユーザーエクスペリエンス（どのように製品を使用するか、ユーザーにとってどのようなメリットがあるのか等）の検討、製品のデザイン、製造工程の検討、図面の作成を通して、製品デザインのプロセスを学びました。千葉大学でも製品デザインの授業は受講していましたが、製造工程の検討や図面の作成など製品の実現の部分まで徹底的に突き詰めたことは無かったので、苦しみながらも大きな学びとなりました。また、このプロジェクトも前半のケルンに引き続き、デザイン学生とエンジニア学生の分野混合チームで行ったのですが、エンジニア学生が１人途中で辞めてしまう、残ったもう１人はモチベーションが高くない上に、設計などを行うプロジェクト後半のエンジニアリングの段階で彼がほとんどエンジニアの経験が無いことが判明するなどトラブル続きでした。「どうやってモチベーション・長所を引き出せば良かったのか」「エンジニアの経験が無いと分かった上で彼にどの仕事を任せれば良かったのか」などプロジェクト中に克服できなかった課題や反省点がいくつもあります。今まで仕事を任せられる側にしかいたことが無かった私にとって初めてぶつかる壁でした。この苦い経験から得たものを今後グループワークをするときに生かすことが出来たらなと思っています。

ケルン、ミラノで過ごした一年間は留学前に想像していたよりもあっという間に過ぎ去りました。「自分に足りないことを学ぶ」という目的で留学に挑戦し、特にミラノでは授業を通して「ネジ一本一本まで設計を考え、工業的に実現可能なデザインをする」という今まで挑戦したことがなかった経験をしました。しかし、「自分に足りないことを習得・克服できた」とは言い切れず、留学を通して「自分に足りないことが分かった上でこれからどう学んでいくか」が重要だと感じています。実際に留学を終えてみると、１年間とても短くお試しのようなもので、これから将来に向けてどうするか考えるきっかけに過ぎないのかもしれないと思います。留学へ行ったという事実に慢心せず、学び続けていきたいです。

１年間の留学は最初から最後まで、自分の周りのたくさんの人々に支えられて実現できたものでした。留学を終えて、自分の留学経験を周りに還元するには、やはりこれから留学に挑戦する人のサポートすることが一番だと感じています。留学を考えている、留学に挑戦中の後輩の相談にのったり、自分の留学経験をSNSなどを利用して発信することで、次の世代にバトンを繋げたいと思います。
実際に留学してみると１年間はあっという間でした。もし「将来は海外で活躍したい」という明確なビジョンがあれば最初から２年間の留学に挑戦してみるのもありだと思います。

COLOGNE UNIVERSITY OF APPLIED SCIENCES Cologne, Germany

融合理工学府　創成工学専攻デザインコース１年　仲宗根掌心

ケルン応用科学大学は、ケルン専門大学 (TH Köln) のデザイン部門が分立した小さな学校です。Köln International School of Design という名の通り、学校にはヨーロッパ諸国をはじめとした様々な国から来た学生が在籍しており、授業の多くが英語で開講され、プロジェクトは基本的にグループワークで行います。留学生に対するサポートも手厚く、留学初日のオリエンテーションで滞在許可などの手続きなどについてまとめた冊子を渡され、ドイツの保険の契約なども大学を通して行いました。

C

ドイツへの入国には事前にビザ（入国査証）を取得する必要は無かった（但し、入国から３ヶ月以内に滞在許可申請をする必要あり）ので、事前準備は大学への入学手続き（C.V.、ポートフォリオなどの提出）くらいでした。住居については、日本でも不動産サイトのチェックは行なっていたのですが契約は難しく、実際に内見へ行ける入国後に本格的に家探しを始めました。
ケルン応用科学大学は小さい学校なので、授業も課外活動も自由度が高いです。プロジェクトはバックグラウンドの異なるメンバーで、特定の課題をこなすのではなく、個々の得意分野を活かして進めていく感じです。工房やラボなどの設備も夜遅くまで自由に使えます。但し、管理がずさんな面も見られ、履修登録のシステムが曖昧であったり、プロジェクトに関する集合時間などの重要な連絡が当日に来たりすることもあります。

ケルンにいた半年間、生活面で一番苦労したのは家探しでした。ケルンで家を探すのは非常に難しいらしく、私も住居が見つからないまま留学へ出発しました。到着から約３週間は安宿を転々としながら WG-GESUCHT.de というドイツで主流の不動産サイトを利用して家探しをしました。掲載されている住居にドイツ語でメールを書いて貸主に直接連絡を取るというものですが、かなりの確率でメールの返信が来ず、移住者を狙った詐欺物件も多く、私も 10 件中２件ほど詐欺の物件に遭遇しました。自分の予算内で半年間住める家が見つからず、１週間〜３ヶ月の短期契約の家を転々とし、ケルンにいる半年間で４回も引っ越すことになりました。終始、家探しのことで慌ただしかったですが、ケルンの街の中でも色んな場所を知ることができて良い経験になりました。

事前に受け入れ先大学から送られてきた履修授業の候補リストに学びたいサービスデザインの授業が1つもなく、履修登録は大学の掲示板に張り出された授業一覧の紙に先着で学生が名前を記入するというものだったのですが、それに関するアナウンスが無く、私が知った時には受講したいと思っていたサービスデザインの教授の授業の受け入れ人数が埋まっていました。その後、代わりの授業を探したり、取ろうとした授業が他の授業との兼ね合いで取れなくなったりと履修登録期間は慌ただしく過ごしました。留学前に考えていた履修計画が早速崩れ、留学生の受け入れ担当の方に相談して自分が学びたいことに近い授業を探し、ケルン専門大学のエンジニア専攻と経済学専攻の学生と一緒に、ケルン動物園にインターネットサービスの提案を行う「IoT in Zoo」という長期プロジェクトに参加しました。その他に、デザインやアートに関する歴史・哲学を学ぶ「The Eye is Part of　the Mind」、学内にあるカフェの運営を行う「Gute Stube」という授業を履修しました。

長期プロジェクト「IoT in Zoo」では、ケルン専門大学のエンジニア専攻と経済学専攻の学生と一緒に、ケルン動物園にインターネットと連動したサービスの提案を行いました。ケルン動物園で来園客や飼育員、経営に関わる園長へのインタビューなどを行なった上で、技術的に実現可能か?、どのようなビジネスモデルでどれほどの収益が見込めるのか？を考えながら、動物園さらに楽しくするサービスのアイデアを検討しました。最後には、ケルン動物園で経営陣へのプレゼンテーションを行いました。一番苦労したのは、同じチーム内のエンジニア、経済学を学ぶ異分野の学生とのコミュニケーションでした。出身国や専門分野の違いで思考回路も全く異なり、私からは出ないようなアイデアや意見を出してくれるという良い点もありますが、自分の意見を言っても理解してもらえない、相手の言っていることが理解できない、物事の優先度が異なるなどのすれ違いが多くありました。それを乗り越えるには根気強くコミュニケーションを重ねるしかなく、理解できるまで何度も話し合う、わかりやすい言葉で図やイラストなどを使って説明する、相手にもそうしてもらうことなどを常日頃行なっていました。自分の専門分野に関する学びもありましたが、このような異分野の人間と働く上での学びが一番大きかったです。デザインの歴史・哲学を学ぶ「The Eye is Part of　the Mind」は毎回、文献を読んできて、代表の学生がプレゼンテーションを行い、皆で討論を行うというものでした。英語で歴史や哲学を学ぶのは難しく、文献を 2、3 度読み直しても理解できないことが多々ありましたが、得られる価値観は興味深いもので、改めてデザインの歴史、文化を日本語で学び直したいと思いました。

専門分野における知識・スキルの習得以上に、ケルンで一番の学びだったのは「異分野の人間と働くこと」でした。専門分野やバックグラウンドの違いから生まれるコミュニケーションのすれ違いを埋めるために、「どうすればチーム内のコミュニケーションが円滑に行くか」「メンバー個々の持ち味を生かしグループ全体の実力を最大限に発揮するにはどうすれば良いのか」などを以前よりも考えるようになりました。異分野の学生とのコミュニケーションはトラブルも多くかなり苦労しましたが、将来、企業の中で技術職や経営に関わる人達とやり取りをしながらデザイナーとして働くイメージがつき、学生のうちにこのような経験が出来たのは大きな価値だと思っています。

私の留学の中で「異分野の人間とどうコミュニケーションを取るか」が一番大きな学びでした。ここで得たコミュニケーション能力は、現在在籍している千葉大学でのプロジェクトでも必要となりますし、就職した後はさらに重要になると思います。グループワークの中で自分の得意分野を生かしつつ、メンバーのポテンシャルも引き出し、チームとしての実力を最大限に引き出せるような人間になりたいと思っています。
ケルン応用科学大学は、留学生へのサポートが手厚く周りにも留学生が多く環境にも溶け込みやすいので、初めて留学に挑戦する人にはオススメの学校だと思います。

UNIVERSITY OF EASTERN FINLAND Joensuu, Finland

国際教養学部　国際教養学科 3 年　田中 静香

森林学が強い大きな大学で、徒歩 or 自転車で移動する距離の、総じてとても綺麗なキャンパスです。一回 2€ 程で食べ放題のカフェテリアや、モダンなデザインの図書館がお気に入りでした。冬になると、大学でスキー板やスケート靴、そりを無料で貸し出してくれます。大学が始まった頃は、6 人程の留学生が一つのグループとしてまとめられ、そこに一人のフィンランド人チューターがお世話係として配属されます。面倒見のよいチューターにあたるかどうかは運次第です。留学生組織 ESN が交流イベントの開催、近隣諸国への団体旅行の企画、様々な言語を気軽に学べる機会の提供を行っているので、Facebook を頻繁にチェックして参加してみることが友達作りのきっかけになります。

E

家探しは、できるだけ早く Joensuu Elli に連絡しましょう。もし長い間連絡が来なかったら何回も送ること。遅れると寮がなくなります。私はバスルームのシェアが嫌で、自分で facebook や youtube など、思いつく限りのサイトを手あたり次第に探しました。
また、語学勉強サイト等などで事前に現地に友達を作るのはおすすめです。EnterFinland 申請時に personal identity code 申請にチェックを入れるのを忘れずに！
悪い点は、もしフィンランドが教育が先進的だからといって大学の授業も先進的だと思っていたら、それは勘違いということです。特に教育以外の講義では日本の大学と変わりはありません。良い点＝こちらでしか学べないこと、と言えば、現地のフィールドワークです。私は小学校の見学や、森林への遠征授業、教授へのインタビューを経験しました。自分の目で見なければ気づかない、まだ見ぬ視点を発見する機会になります。

食事は、大学のカフェテリアか自炊、たまにカフェでお茶、ごくたまに外食、でした。太る食文化ではありませんが、私は冬の寒さがこたえて少し食べすぎました。日本米によく似たお米が手に入るのは嬉しいところです。物価が高いと言われていますが、学生割引率が高く、学生にとても優しい国だと思います。野菜や果物は日本より安く、化粧品や衣類は日本と同じくらいで買えます。冬の日照時間の短さに関して、人によっては軽い鬱になったりするようですが、私はあまり影響を感じずに過ごしました。冬の寒さは最低－ 30 度で、屋内も寒いので家用の防寒具も必要です。冬は雪が積もりますが、除雪車が活発なので、自転車で通学しても問題ありません。課外活動として、ディベートクラブや NGO に所属したり、教会のバイブル勉強会や言語勉強会に行ってみたり、週末は友人とコテージで過ごしたり、旅行したりしました。

留学に行く前にざっとシラバスに目を通して、これだけは絶対に取りたい！というのを一つ決めておくくらいで大丈夫です。私は結局、申請時の授業科目と全然違うものを取りました。シラバスに書いてあるのに開講されなかった授業はなかったと思います。また、所属学部もだいたいで大丈夫です。私は Forestry の学部に入りたかったのですが、2 年生以上でないと Forestry の授業が取れないと書いてあり、仕方なく philosophical 学部の humanity 学科という全然違う学部に入りました。しかし、実際に現地では非常に寛容で、教育、宗教、森林学、なんでも好きに取らせてくれたので、学部はほとんど関係ありませんでした。授業は、フィンランド語で受講したい人は別として、すべての留学生は留学生用の英語で行われる授業科目一覧から選択します。UEF はキャンパスが二つあるので、Joensuu で開講される授業かどうかのチェックを忘れずに。

Survival Finnish は留学生必修の講義のようで、フィンランド語の基本を気軽に楽しく学べる授業です。とは言っても、私自身、ある日この授業内容が非常に役に立ったので、決して甘く見てはいけません。私は、自分の興味のあることを見つけることをこの留学の目標としていたので、興味のあるすべての授業を片っ端から受講しました。宗教、教育、森林学、異文化コミュニケーション、文化、気候変動など（ちなみに、森林学では虫や木の病気の種類、植物の水の吸い上げ方などを勉強しました）。単位のことはあまり気にしていなかったため、授業をすべて受けて、最後のグループプレゼンテーションまでやったのに関わらず、最終レポートや最終テストの内容が自分に必要ないと思ったら切っていました。そのため、比較的自由時間を得ることができ、自分の目標に沿って、様々なことを経験できたと思います。英語での授業や論文をこなすことに不安を抱いている方が多いと思いますが、フィンランドは英語が第一言語ではないためか、英語学習者にとても優しい環境だと思います。かと言って、彼らの英語に不備があるというのではなく、むしろペラペラの人が圧倒的に多いです。彼らには英語もしくは言語を学ぶことの苦労への理解があって、こちらが英語で話しているときにつまずいたり、理解しづらいときも、見守る体勢を取ってくれます。アメリカなどの英語圏に留学した人の経験談で、ネイティブがまず話を聞いてくれないことに心が折れて、怖くて英語を話せなかったという話を聞くことがあります。そういった環境に比べると、フィンランドでは比較的英語に寛容な環境で勉強できると感じました。その人の中身の評価に、英語のスキルは関係ない、という考えです。

留学を経て、興味のあることを見つけるという目標を果たし、今はフィンランドの自然と人々の自然観に関して研究したいと考えています。しかしこの留学はこの目標以上に価値のあるものになりました。留学前は、人の目を気にしたり自分を他人と比較したり、自分のことをよくわかっていなかった私ですが、留学を通じて様々な困難に立ち向かう度に、今まで向き合ってこなかった自分の混沌とした多くの疑問に気づき、対峙する機会を得ました。フィンランドの誰もいない静かな自然に囲まれ、何度も何度も自問するうち、他人中心だった自分の中に自信が芽生え、確固たる軸が築かれたのを感じます。また多種多様な背景を持つ留学生たちとの交流の中で、国という概念が薄くなりました。英語のレベルも文化も何もかも関係なく、”人”という単位で、中身で対話することを学びました。

私にとっては、フィンランドでの経験が今後の人生の基盤になっていくと思います。フィンランドの自然が大好きになったことをきっかけに、大学院で人と自然のかかわりに関して研究していきたいです。自然保護という全人類の課題への重要性に対して認識が強まった今、美しい自然に覆われた地球が持続していく未来の構築に、研究を通して携わっていけたらと考えています。日本での暮らしと比べると、留学中は新しく直面する気持ちや問題などが日々たくさんあるでしょう。もしそれらが悲しいことやつらいことだったとしても、自分の視点の持ちようによって、すべて自分の成長に貢献します。持っていく不安はほどほどに。自分次第で未来は変えられます。

UNIVERSITY OF EASTERN FINLAND Joensuu, Finland

文学部　国際言語文化学科４年　吉田茜

小さな田舎町にある大学という感じです。留学生の数も多く、日本人留学生は私を含めて 10 名ほどいました。なかでも、ヨーロッパの学生が多いイメージです。留学生へのサポート体制としては、実際少し不安がありました。留学生が多い分連絡が遅かったり、夏休み期間は全く連絡を取ることができなかったりしました。住むところに関しては、学生寮というものはなく、大学と提携しているアパートがあるので多くの学生はそのアパートを申請するのですが、アパート探しも自分でやらないといけませんでした。また、見つからない場合はホステルなどは提案してくれます。

E

学業での準備としては、どのような授業があるのかを事前に調べたりしていました。また、フィンランドの文化･簡単な歴史と、スピーキングが苦手だったので英会話に通ったりしました。生活の準備としては、パスポートは元々持っていたので在留許可証、アパートの申請などを主にしていました。在留許可証においては web で申請した後に何度か大使館に行かなければならないので、早めの申請がとても大切だと感じました。
良い点は、図書館がきれいで勉強しやすい環境が整っていました。留学生の数も多かったため安心感があり、また、色々な人と出会えたのでとても良かったです。悪い点は、留学生の数が多い分、一人一人への対応が遅くなってしまっていると感じ、少し不安でした。

大学と提携しているアパートは、どれも 2，3 キロ大学からは離れていて少し遠いと感じたのですが、通えない距離ではないです。自転車かバスで通学していましたが、バスが 30 分に 1 本ほどしか走っていないので、乗り遅れないように気を付けていました。どのアパートでも近くにスーパーがあるため買い物にはそれほど困りませんでした。また、電化製品や服、キッチン用品などは大学から徒歩 10 分ほどの小さいショッピングモールに行っていました。他には Facebook のセカンドハンドショップで家具や自転車などを買いました。授業がある日は、授業後に図書館に行き勉強することが多かったです。授業がない日も課題や自分自身の勉強もあったので朝からカフェや図書館で勉強することがほとんどでした。その後に友達と夜ご飯を食べたり、一緒に作っていたりしました。課題締め切りやテスト前は図書館から帰った後も家で勉強するなど，1 日中勉強することが多かったです。

Weboodi というページから様々な授業を調べることができました。授業の期間や英語で受けられる授業なのか、何単位の授業なのか、どのような授業なのかなどが載っています。実際に現地に行ってから、実は開講されていなかったり、開講されないと思っていた授業がやっていたりするので、興味がある授業をできるだけ見つけておくようにしました。私は言語学の授業を主にとっていました。Phonetics and Phonology という音声学と音韻論の授業、Changing English という授業、また、この他にも統語論の授業や簡単なフィンランド語と文化を学ぶ授業、フィンランドの教育について、世界の差別偏見についてなど、言語学以外にも自分の興味のある授業をいくつか取りました。私は自分の専攻である、言語学の授業を多くとっていました。

Phonetics and phonology
音声学と音韻論の授業で、ヒトが音声器官のどこの部分を使って発音しているか、などを学びました。また、スペクトラムを使って発音の波長を見て、どれが何の音かの見分けたりしました。

Changing English
Old English からの英語の歴史を学びました。今世界中で使われている英語が外部と内部との関りでどのように派生して、どのように変化していったのかを見ました。

Structures and Sounds of English
主に英語の音韻論と統語論を勉強しました。3 人の先生が交替で授業をするのですが、どの先生も面白い授業をしてくださるので、楽しく授業に参加できました。

Observing ongoing change in present-day Englishes
コーパスを使って present-day Englishes の変化を研究する授業でした。

Survival Finnish
フィンランドに 1 年以内滞在する生徒のためのフィンランドの授業でした。生徒同士で対話練習をしたりするので新しい友達を作るのにも最適です。フィンランド語は難しいですが、フィンランド語の基本を楽しく学べます。

Racism, Prejudice and Cultural Discrimination
この授業では人種・社会的地位・性別などによる差別がどのように起こり､存在しているのかを勉強しました。この授業は留学生が多く、様々な国の差別についてを学ぶことができました。

学習面においては、千葉大学では取れないような授業、例えばフィンランド語や文化･教育について学ぶことができ、フィンランドへの理解を深めることができました。また、専攻の言語学については、今まで勉強したことがなかったようなコーパス言語学であったり、音声波形を読み取るなどの新しいことに挑戦することができたので自分の知識を応用していけたと思います。ディスカッションも多くあったので、他の生徒の考えを聞くことができたり、自分の考えを伝える機会もあったので相手の考えを用いて自分の考えをまとめることができました。他にも、年齢も国籍もバラバラな多くの人と関わり話したことで、自分の考え方というものも広がったと思います。今までよりも色々なものの見方ができて、考えが柔軟になったなと帰国してから思うようになりました。

私は帰国したら 4 年生だったので、すぐに就活に活かしました。自分が留学で多くの人から支えられた分、私も国際的なことに関われて、かつサポートできる仕事がしたいと思い、就活をして無事に終えることができました。今後社会人になった後も、留学中の自分を振り返って初心を忘れずに頑張りたいと思います。
大変なことももちろんたくさんありますが、それよりも楽しいこと成長できることがたくさんあるので、留学先でも多くのことに挑戦していってほしいと思います。がんばってください。

UNIVERSITY OF LAPLAND Rovaniemi, Finland

国際教養学部　国際教養学科４年　湧井悠真

ラップランド大学は授業の構成が特徴的です。単位数が授業時間の長さや回数などで決まっており、３時間×１７回の授業もあれば、４時間×８回のものもあります。また、授業は曜日も教室も定まっておらず、イレギュラーで開講されます。留学生へのサポートについては、オリエンテーション期間が5日間あり、書類の申請、授業登録の仕方、施設の使い方など、様々なことを丁寧に説明してもらいました。また、留学生10人程度に対し1人チューター（ラップランド大学の学生）がつき、大学到着時の迎え、寮の案内などをしてもらいました。毎日のように、大学、街のイベントやプログラムのお知らせをフェイスブックに載せており、留学生が充実した生活を送れるようなサポートをしていました。

L

フィンランドでの寒さ対策のために、普段着や防寒具について以前ラップランド大学に留学した先輩に相談しました。また、交通手段やお金の取り扱い（現金かクレジットカードか）生活していく上で必要なことをチェックしました。そして、授業のシラバスを事前に確認し、自分の受けたい授業を予め選択しておきました。調べる際に、授業内容のレベルや授業内の使用言語に注意しました。
留学生へのサポートは大変充実していたと思います。また、大学の教授やスタッフは英語が堪能で、学内サービスも英語で受けられるので、フィンランド語が理解できなくても問題ない環境でした。不便だった点は、授業がイレギュラーに開講するため、同じ時間帯に複数の授業が重なってしまうこともありました。教授もそのシステムを承知なので、授業重複による欠席は認められますが、受講したくても受講できない授業がでてきます。

留学生は学生寮に住むことになり、大学から徒歩5分で市街地から徒歩30分のOpintieか、大学から徒歩50分で市街地から徒歩30分のKuntotieの２つの寮があります。Kuntotieは自転車かバスで大学に通うことになりますが、大学に近いOpintieでも自転車は必需品です。大学内に２つの食堂があり、平日10時から20時、土曜日10時から14時ごろまで利用できます。一食(ビュッフェ形式)2.6ユーロですみます。毎日メイン（スパゲッティ、お肉、お魚など）が変わり、野菜もたくさん摂取できます。平日は必ず学食を利用し、休日は大学付近のスーパーで食品を買いました。市街地に行けば大きなスーパーやショッピングモールがあります。授業外の時間帯は、課題がなければ一人で街中を散策したり、留学生とともに遊んだりしました。

私は７つの授業を選択し、すべて英語で受講しました。① The Phenomenon of Globalization & Cultural Diversity では、グローバル化による恩恵や課題について探ります。 ② Survival Finnish では、初心者向けで簡単なフィンランド語を学びます。 ③ Teaching Other Languages では、英語を小学生に教えるために必要な概念や知識、技術を学びます。④ Children's Literature では、児童文学を読んでそれについての感想や意見を共有します。⑤ Phonetics and Pronunciation では、英語の発音の仕方、発音記号の書き方、音声の性質などを学びます。 ⑥ Oral Skills では、英語をたくさん使うことを目的に、様々なトピックについて学生と英語で話します。 ⑦ Observation Period Leading to the Teaching Experience では、フィンランドの小学校で英語の授業を観察します。①の授業では、「人類は同じ地球に住んでいる（地球市民）」、「人や文化が違うことはいいこと」という視点を持ちながらグローバル化によって起きた事象や問題を講義やディスカッションを通して見ます。３時間半（休憩20分）の授業で難しい英語で難しい内容を聞き続けるのがとても大変でした。②の授業では、自己紹介に必要な表現、お店での会話用語、時計の読み方などを習得します。③の授業では、先生の講義を受けつつ、ペアワークで、「紹介された英語の教授方法にはどんな意味があるのか」、「どのような教え方が適しているのか」といったような分析やディスカッションもします。最後に、グループでデジタル教材を用いた英語の教授法のプレゼンテーションと、受講生を小学生として見立て、簡単な英語と母国語の単語を教える模擬授業を行います。④の授業では、課題として出された児童文学（シンデレラやプーさんなど）を事前に読み、授業の前半では受講生で物語の感想や意見交換をし、後半は先生からの説明や見解があります。この授業は積極的な発言が求められます。⑤の授業では、英語の正しい発音の仕方、発音学の専門用語を覚える他に、受講生の出身国において英語の発音の問題について話すこともあります。また、教員志望の学生が集まっているので、発音の仕方を生徒に教える方法についても学びます。⑥の授業では、「世界の教育システム」、「緊張をほぐす方法」といったテーマが出され、ひたすら英語で受講生と話し続けることをします。英検やIELTSのような英語の口頭試験の体験にも挑戦し、試験官1人、評価をする人1人、スピーカー2人で15分のテストを行い、終わったら役割を交代する活動も行いました。

留学する前は、大学で学習している内容が、将来の目標である教員と関わりがないと思っていました。しかし、留学で初めて教育に関する分野を学んだことで、教員になりたいという願望が強くなり、大学の授業において教員として教育現場で使える知識、資質について探るようになりました。
私は大学院で教員免許を取ったのち、小学校の教員を志望しています。そのステップとして、留学を利用して英語教育を中心に勉強しました。教員になるため実践的な演習や授業観察を経験したことを、フィンランドの教育における基本的な概念や教育の本質とつなぎ合わせ、自分の教員像を明確にするための糧にしたいと思います。

どのような学習目的の留学でも、日本から出ることにより視野が広がり、自分の身になることは間違いありません。また、現地の人、他の留学生と交流できる機会は必ずあり、学習以上のものを得ることができるので、ぜひ積極的に人脈を広げてください。

UNIVERSITY OF JYVASKYLA Jyvaskyla, Finland

教育学部　中学校教員養成課程英語科教育分野4年　佐野光

フィンランドの中央に位置するユヴァスキュラという街にあります。街の中心に近いところにキャンパスが3つあり、留学生も多い大学です。
留学生のサポートに関しては、日本にいる段階からチューターの学生が連絡をしてくれ、到着した際には駅まで出迎えてくれました。また、到着後には近くのスーパーに連れて行ってくれたり、大学内の案内をしてくれるなど、特に生活が整うまでの数日にはかなりサポートをしてくれました。また、何か困ったことがあった場合には大学の支援室の方が丁寧にサポートをしてくれたのでとても良かったです。

学業に関しては、どのような授業があるのかを事前に少しシラバスで確認をしていましたが、現地に行ってから決めたものがほとんどでした。生活に関しては、現地でなかなか手に入らないようなものを持っていく準備をしていました。また、カード決済が主流と聞いていたので、クレジットカードが使えるよう準備をしました。
人々も親切で、自然が豊かで、フィンランドの良い文化を感じることのできる場所だと思います。ただ、図書館が閉まるのが早いなど、課題提出前には少し不便に感じる部分もありました。また、私は英語教育を学んでいたので特に不便と思うことはあまりありませんでしたが、分野によっては受講したい授業が英語で開講されていないこともあるため、事前に調べておくことが必要だと思います。

住居は、留学の申し込みの際に同時に申し込みをしました。多くの留学生が、家具付き、光熱費込みの、2～4名でのシェアハウスといった形で生活をしていました。留学生が住む場所は主に4つあり、どこも大学からはそれほど遠くはありませんでした。多くの留学生が徒歩や自転車、バス（主に冬季）で通学をしていました。徒歩圏内にスーパーもあるので、買い物にも特に困ることはありませんでした。キッチン用品などは、最低限のものは一式安くレンタルができるシステムがあるので、購入の必要はありませんでした。
受講する授業にもよりますが、基本的には午前中から大学へ行って授業を受け、授業の後には買い物へ行ったり、大学のジムへ行ったり、友達と遊んだりというような生活をしていました。課題提出前の期間には朝から大学へ行き、大学内の図書館やカフェなどで勉強をしていました。

シラバスの内容と講義のスケジュールを見て受講する授業を決めていました。また、英語で開講されているかどうかもシラバスで確認していました。講義日程が変則的で、日時が毎週同じとは限らないので、どの程度出席できるかも考慮していました。特に印象に残っている授業を簡単に紹介します。○ Content and Language Integrated Learning：英語（外国語）を使って他教科の授業を行う方法について学んでいました。講義を受けるだけではく、ディスカッションをしたり、実際に学校見学に行ったりすることができました。○ Language, Literature and Culture：小学生に向けて、英語俳句をテーマに授業を実践してきました。○ Guide to Finnish Education：オンラインの講義で、フィンランドの教育について学ぶことができました。自分の好きな時間に受講することができるのが良かったです。○ Teaching Practice for International Students：大学の付属小学校へ行って授業を見学したり、日本文化紹介をしたりしました。

私は主に英語教育について学んできたのですが、フィンランドでは、授業を快く見学させてくれる先生方も多く、いくつかの学校で授業の様子を見ることができました。授業中に廊下で勉強をしていたり、ICT を多く活用していたりと、日本の学校では見られないような授業風景をたくさん見ることができました。大学の講義ではディスカッションを行うことも多く、受け身で参加するのではなく常に自分の意見を持って臨まなければならないと強く感じました。全体的に日本の大学よりも勉強が忙しかった印象があり、論文を読むなどの課題も多いことから、課題提出や発表前には図書館へ行って課題をするような日々が続いていました。また、教育学部の授業では、実際に小学校へ行って授業を行うというような、実践的なものが多くありました。数名のグループで授業を作成し、小学校で授業実践をするという講義もいくつかありました。学校の雰囲気など日本と異なる点も多いため、児童の反応を予測しながらの授業準備はとても大変でしたが、その分とても良い経験になったと感じています。そして、大学ではフィンランド語も学んでいました。1年間で習得とまではいきませんでしたが、簡単なあいさつや自己紹介などができるようになり、学校見学へ行った際などに、少しだけ小学生とコミュニケーションを図ることもできました。新しい言語を英語で学習するのは初めての経験で難しいと感じたこともありましたが、言葉から見えてくる文化などもあり、とても良い勉強になりました。その他、違う街の学校見学へ行くプロジェクトに参加させてもらえたり、日本文化紹介の授業を行う機会をいただけたりと、日本ではなかなかできない活動をたくさんすることができ、忙しくもとても充実した大学生活を送ることができました。

大学での勉強に関しても、生活に関しても、もちろん良い部分ばかりではなく、ストレスを感じたことや、苦労した部分もありました。例えば、時間をかけて準備をした小学校での授業が全くうまくいかなかったり、寒くて暗い冬を乗り越えるのが想像以上に大変だったり…。しかし、それらを乗り越えるということも含めて、留学をするということなのかなと思いました。友達と一緒に夜遅くまで授業準備をしたり、キャンドルを灯して北欧ならではの冬の楽しみ方を真似してみたり。何事もポジティブに考えて行動することが、留学生活を楽しむためには必要ではないかと思います。大変だったことも、今となっては自分にとって大きな糧になっているなと感じます。何事も、機会があればチャレンジしてみることをお勧めします。

日本とは異なる文化を体験し、違った考え方に触れることによって、いろいろな人の視点に立って物事を考えることができるようになったと思います。今後社会に出ていくにあたり、異文化理解や多角的な視点を持つことは大切になっていくと思うので、留学を通して得られたそのような視点を忘れずに今後も生活をしていきたいと思います。
もう一度戻りたいと思えるような素敵な経験がたくさんできる、本当にいい場所だと思います。フィンランドの豊かな自然を感じながら、素敵な留学生活をお送りください！

UNIVERSITY OF JYVASKYLA Jyvaskyla, Finland

教育学部　スポーツ科学課程４年　高橋諒多

フィンランドの中部に位置するユバスキュラという都市にある国立大学。数多くある学部の中でも教育学部は有名である。そして私が所属していたスポーツ健康科学部もフィンランドの大学で唯一、スポーツ専門の学部があり、フィンランド全土からエリート達が集まっている。小さな街であり、大学と少し賑わっている市街地以外は森と湖に囲まれている。
毎年、数多くの留学生を受け入れており、英語で開講されている授業も充実している。また、留学生に対するサポートはかなり厚く、現地で特に困ることはなかった。

J

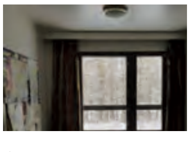
私は派遣留学に必要な語学力が全くなかったので、派遣留学選考前の半年は英語に特化して勉強していた。特に IELTS に向けて、焦点を絞って勉強していた。英語の授業を多く取り、English house にもほぼ毎日通った。また、夏には１ヶ月ほど、フィリピンセブ島にて語学留学を行なった。長期で海外に滞在したことがなかった自分にとっては、派遣留学前に良い経験となった。
良い点は、英語開講の授業が豊富であること、英語圏の国ではないが国民のほとんどが高い英語力を持っており、大学での学びはもちろん、生活や、現地の人々とのコミュニケーションも不自由なくとることができる。また、ヨーロッパの都会的な刺激はないが、非常に静かで、落ち着いた生活環境であるために勉強に集中することができる。また、北欧らしいゆっくりとした生活を体感することができる。悪い点は、退寮した後の部屋のクリーニング代をこれでもかというほどに請求してくるところ。

住居は大学の寮で、３人でシェアの部屋に住んでいた。個人の部屋はあり、キッチンと共有のスペース、トイレとシャワーを共有で使っていた。生活必需品や食品などは自転車で５分ほどの大きなスーパーで揃えることができる。食事は大学のレストランか、自炊をしていた。移動は基本的に自転車でどこにでも行くことができる。（授業のある日）起床 (7:30) →授業 (8:15) →昼食 (12:00) →図書館 (13:00) →ジム（筋トレ＋サウナ）(15:00) →帰宅 (17:00) →ルームメイトと夕食→リラックス (ビリヤード、パーティーなど）or 勉強（授業のない日）起床 (9:00) →勉強 (10:00) →昼食 (12:00) →サッカー、イベントがあれば参加 or 勉強 (13:00) → 帰宅 (18:00) →ルームメイトと夕食→リラックス (ビリヤード、パーティーなど）or 勉強

ユバスキュラ大学の場合は事前にホームページにて前年のシラバスを確認することができる。授業はほとんど前年と変化がなかったように思える。授業を全て紹介することはできないので、いくつか面白かった授業を紹介する。
〇 Academic English Communication2
この授業は、最後に自分の専門に関してプレゼンすることが目標で、それに向けて、テーマの選び方や、論文の読み方などを中心に学んでいく。
〇 Planning and Implementation of sports event
この授業は 20 人程度の学生で、スポーツイベントを立ち上げて、運営まで行い、その過程でイベントを計画、運営する方法を学んでいくというもの。役割に分かれ、グループでミーティングなどをしながら計画を立て、授業ごとにそれぞれ情報交換したり、アイデアを出しあったりしていくという流れ。
〇 Public and voluntary sector in sport
スポーツに関する公的機関（政府、地方自治体）や自発的な機関（スポーツクラブ、サークル）がスポーツの発展にどういった影響を及ぼしているかを学ぶ授業。修士課程の学生向けの授業で、課されるタスクも少し難しい。

座学の授業では、スポーツ倫理や、スポーツマーケティング、国際的な比較を通してスポーツ組織を学ぶ授業、スポーツ産業におけるグローバル化や多文化主義、スポーツメディアなど千葉大学の授業で扱った内容もあったが、一つ一つのトピックをより深く、広い視点から学んだ。また、アウトプットの形も様々で、実際に関係者にインタビューするものや、実際のスポーツ施設の改善案を出すものなど実用的な内容が多くあった。中でも、スポーツイベントを企画する授業はイベント企画から資金集め、宣伝、運営まで全て学生のみで行い、イベントの運営法を身をもって学ぶことができた。実技の授業も多くあった。アイススケートや、クロスカントリー、パラスポーツ、スキー、スノーボードなど、日本ではほとんど経験することができないような北欧ならではの種目ばかりであった。実際にスキルを習得しながら、どのように教えるのか、どのようなトレーニングがあるのかなどを学んだ。パラスポーツの授業は特に興味深かった。スポーツ関係で有名な大学だけに、施設設備がかなり整っており、あまり体験できなようなパラスポーツをいくつか経験することができた。また、春セメスターとサマースクールでは興味のあった、ビジネス関係の授業をいくつか受講した。そこでは、マーケティングに関する基礎知識や、アントレプレナーシップ、北欧独自の働き方などについて学んだ。授業全体を通して、論文や文献などを読んでくる課題が多く、レポートも日本で書いているレポートの量よりはるかに多いものだった。さらに一つ一つに時間がかかるため、ストレスを感じることも多かった。

〇目標を明確にすることの重要性の気づき：自分はトビタテ留学ジャパンという留学プログラムを通して、留学の目標を明確化し、その達成に向けて留学中に様々なことに取り組んだ。そのプロセス中で多くのことを学んだ。〇とらわれない考え方、生き方の気づき：これまで関わってこなかったような多くの価値観や考え方に触れることで、いかに自分が縛られてきた世界で、考え方で生きて来たかがわかった。選択肢と可能性がに気づけた。〇設定した目標に向けて、まず行動してみることの大切さ。そこから何か気づきと学びが得られる。貪欲な行動力がついた。〇自分を開示し、自分の素でコミュニケーションをとることがうまくなった。自分の留学は専門性が深まって研究に活きるというよりかは、人としての幅を広げることができたという意味が大きかった。もちろん、語学力が向上して、ほとんど不自由なくコミュニケーションを取れるようになったことで、繋がれる人の幅、知ることができる情報量が増えたということは大きい。それ以上に、留学を通して、これまでと全く異なる環境に身を置いたことで自分について多くのことを知ることができた。そう言った気づきを人生の軸として、就職活動を行ったり、フィンランドの現地の学校の体育の授業を訪問したことを活かして卒業論文に取り組んでいきたいと思う。留学（特に長期の交換留学など）は辛いことの方が多いという話は、本当だと思います。ただ、現地で辛いことから逃げようと思えばいくらでも逃げることができます。誰とも関わらず、何もせずに１年間過ごすことが出来てしまいます。私は「何れにせよ、一年後に日本に帰って来るのだから、ここでどんなに失敗しても、恥をかいても誰も覚えてない」と思えば、どれだけでも頑張れました。ぜひ、留学に目標を持って、それを達成すべく頑張ってください。



LINKOPING UNIVERSITY Linkoping, Sweden

国際教養学部　国際教養学科４年　秋田谷蘭

私が留学したスウェーデンのリンショーピン大学は、ヨーロッパ・アジアを含め、世界の様々な国から留学生が集まる大学で、授業の中でもいろんな国から来た学生と関わる機会が多くありました。また、スウェーデンの正規の学生で日本語を学んでいる学生や、アジアに興味のある学生が集まる団体もあり、他の日本人の学生とともに彼らとも積極的に交流をしていたので、スウェーデン人の学生と「日本」や「アジア」というキーワードで仲良くなることもでき、同じ留学生のみならず、現地の学生とも比較的簡単に繋がることができました。留学生へのサポート体制も充実しており、多くのWelcomeイベントが開催されていたり、各学部ごとに困った時の留学生用の相談連絡先も整っていたので、心強かったです。

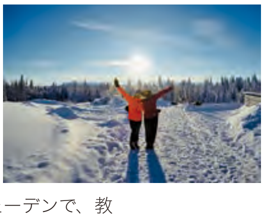
留学前の学業面での準備は、私はスウェーデンで教育を学びたかったので、スウェーデンの教育に関する文献を読んだり情報を集めること、比較対象として日本の教育についての情報も集めておくことに取り組みました。スウェーデン語に関しては、現地に渡ってから勉強をしようと思っていたので、特に用意はしていきませんでした。生活面での準備は、自分が生活に必要なものの他に、日本から持って行った方が良いよと教えてもらったもの、そして日本が恋しくなった時用の日本食を準備しました。
派遣先大学の良いところは、様々な国から学生が集まっているため、いろんな人と交流することができること、大学内でたくさんのイベントが行われていたり、施設が充実していたり、広い敷地があることで、おもいおもいの過ごし方で留学生活を楽しめることだと思います。悪い点は、キャンパスによって雰囲気が違ったり、集まる学生や留学生活そのものの質が変わってくることだと思います。一度は小さなキャンパスで過ごすことも楽しいですが、メインキャンパスに通う経験も必要だったな、してよかったなと感じています。

住居は大学へのアプリケーションの際に、一緒に寮も申し込むことができたので、大学を通して申し込みました。私が住んでいた街はスウェーデンのノーショーピンという小さな街でしたが、スーパーや大学など生活に必要な建物も街の中心部にまとまって位置していたので、基本的に徒歩で生活することができ、特に不便は感じませんでした。通学手段は市内のキャンパスに通う際には徒歩、隣の市にあるメインキャンパスに通う場合には、大学が提供しているキャンパスバスを利用していました。各所要時間は約15分、１時間ほどでした。毎日授業が詰まっているわけではなかったので、決まったスケジュールはなく、自由に使える時間もたくさんある中でのびのびと学べたなと感じています。

１年間の留学の中で、前半は全てスウェーデンの教育に関する授業、後半はもう少し広げてスウェーデンの政治や北欧の文化について学ぶ授業を受講しました。前半は、「音楽やアート、演劇をどうやって幼児教育に活用するか」、「スウェーデンの幼稚園での教育実習」、「スウェーデンの教育機関でのフィールドワーク」、「スウェーデンの教育システム」について学ぶ授業をとっていました。後半は、「スウェーデンの政治」、「体験を通して学ぶ北欧の文化」、「体験を通して学ぶアウトドア教育」、「スウェーデンの特別支援教育」について学ぶ授業をとっていました。授業の内容やスケジュールなどについては、基本的に、事前にWeb上に公開されているシラバスが役に立ったと感じています。活を送ることができました。

スウェーデンの教育システムの大まかな構造から、幼児教育や特別支援教育などの特定の分野の教育、そしてそれを支えているスウェーデンの政治について学んだり、実際の体験を通して北欧の文化に触れたり、アウトドア教育の実践を行ったりしました。授業自体はそこまで大変ではありませんでしたが、授業の回数が少ない分、きちんとした自主学習が求められており、自主学習の中で知識をインプットしたり、自分の考えを構築した上で授業に臨み、インプットした知識をアップデートしたり、他の学生とディスカッションをしたりするスタイルが多かったなと感じています。また、授業自体に出席のチェックなどはない授業が多い反面、提出物の採点が厳しかったり、合格点に達していなければやり直しという措置が取られている授業もありました。私は教育学部ではなく、日本で教育を専門的に学んだ経験がないままスウェーデンの大学の教育学部へと留学し、初めの頃は小さな困難もたくさんありましたが、そこまで大きな困難はなく授業にもついていくことができたので、今回の留学を通して、自分が日本で専門的に取り組んでいることではなくとも、現地での努力次第で留学期間中に学ぶことは可能なのだと感じました。

学習面においては、留学先での勉強が一つ一つ明確に繋がりが見えていたので、学ぶことが楽しくなりました。例えば、幼児教育での音楽・美術・演劇の活かし方を学んだ後に教育実習でそれを実践し、教育実習の中で浮かんだ疑問をその後のフィールドワークで調査したりというように、一つの授業で学んだ内容が連続して関連していたのが学びのモチベーションになりました。そのほか、３年の後半から４年の前半というタイミングで日本を離れていたので、就職活動などから一旦離れ、自分の将来についてを考える良い機会にもなりました。



私は教育先進国と言われている国の一つであるスウェーデンで、教育実習やフィールドワークなど自分の経験を通して教育についてを学んできたので、就職活動やこの先の人生の中で教育に関わる道に進んだ際には、スウェーデンの教育でいいなと感じた部分や心惹かれた部分を活用・応用していけるようになりたいなと思います。
派遣留学への挑戦は、きっとこれまでたくさん考え悩んできた過程があっての挑戦だと思います。留学先での経験は、必ず自分の人生に必要なかけがえのない経験となること間違いなしなので、みなさんぜひ、楽しんできてください！

UNIVERSITY OF SALAMANCA

文学部　人文学科4年　三橋諒子

Salamanca, Spain

サラマンカは大学や大聖堂のある旧市街全体がユネスコの世界遺産に登録されており、サラマンカ大学も2018年で創立800周年を迎えた歴史ある大学です。留学生も多数在籍しており、特に文献学部のアジア学科には日本語を勉強している学生がいるので、日本人として興味を持ってもらえる機会が多くありました。留学前はコーディネーターとメールでやり取りが出来、また留学生支援団体のプログラムに申し込めば、現地でサポーターを1人付けてもらうこともできます。ただ、留学前も留学中もサポートはそんなに手厚くないので、自分からコーディネーターやサポーターを頼って積極的に情報を集める必要があります。

留学前の準備としては、ビザの取得がメインになると思います。年度や期間によってビザの申請に必要な書類が変わるので、早めに駐日スペイン大使館のホームページをチェックして、必要書類を揃えることをお勧めします。また、ビザ申請に必要な入学許可証はサラマンカ大学から郵送してもらう必要があるので、コーディネーターに期日を確認しておいた方がより安心です。学業に関しては、通学中スペイン語のポッドキャストを聞いたり、DELE を目標に学習したりしていました。
サラマンカ大学は日本の大学と多く協定を結んでいたり、日西文化センターが街にあることから、日本人留学生や日本語を勉強している学生は想像していたよりもたくさんいました。自分が辛いときに母語で話せる環境があることに救われることもありましたが、その環境に甘えすぎてしまうと本来の目的を果たせなくなってしまうので、自分でバランスを取ることが必要になると思います。

住居を選ぶ際、主に寮とアパートの２通りがあります。寮は大学のホームページから申請可能です。アパートは一般のサイトから見つけることも出来ますし、サラマンカ大学の留学生支援団体の Facebook 内で、学生が一緒に住む人の募集を出していたらそこから応募することも可能です。私は前年度留学していた先輩にアパートを紹介して頂きました。シャンプーや洗剤などの生活必需品はスーパーに置いてあり、大型のデパートに行けば布団やドライヤーなども売っているので、日本から持参しなくても大抵のものは現地で調達できます。サラマンカは小さな大学都市なので、徒歩圏内に必要なお店が揃っており、他の都市に比べて比較的安全です。バスやタクシーも至る所にあります。バルやレストランも街中に多くあるので、自炊しない人でも食事に困ることはないと思います。

渡航前にホームページにアップされているシラバスや開講予定授業の一覧を見て目ぼしい授業をいくつかリストアップしていましたが、シラバスは最新のものではなかったり、そもそもホームページにアップされていないものもあったので、渡航後実際に授業を受けてから受講を決めた科目がほとんどです。
① Gramática para la enseñanza del español Ⅰ
② Gramática para la enseñanza del español Ⅱ
スペイン語を母語としない人たちにスペイン語文法を教える際、どのように指導するかについて勉強します。
③ Seminario de traducción japonés- español
日本語をスペイン語に翻訳する方法を学びます。
④ Sociedades de Asia Oriental
東アジア社会について学びます。
⑤ Crenncias del Próximo oriente
近東の歴史や神話、信仰について学びます。
⑥ Semámtica y Pragmática
意味論、統語論について学びます。
① Gramática para la enseñanza del español Ⅰ
② Gramática para la enseñanza del español Ⅱ
文法事項そのものは日本で既に学習したものでしたが、それをのようにスペイン語で説明するのか、また学習者の母国語の特徴から、スペイン語文法を学んだ際に間違えやすい点についてまで言及して説明したくれたので、スペイン語をより深く理解する手助けとなりました。
③ Seminario de traducción japonés- español
日本語のテキストが意図している内容をできるだけ自然なスペイン語で表現するにはどうしたらよいかについて学びました。また、地名·施設名の訳し方や会話文の表記の仕方、翻訳の際に利用すると良いサイトやツールについても言及しながら授業を進めてくれたので、今後翻訳する際に必要な基礎的な知識を得ることが出来ました。
④ Sociedades de Asia Oriental
授業では東アジアのなかでも北朝鮮、中国、韓国、日本の 4 か国の政治、経済、社会の特徴について学びました。
⑤ Crenncias del Próximo oriente
始めに主に古代の近東の歴史について学び、その後関連する叙事詩や聖書、創造神話を読みながら、当時の人々の信仰やその背景、また現代の私たちとの関連について学びました。
⑥ Semámtica y Pragmática
類義語のニュアンス、使い方の違いや文脈に合わせた意味の捉え方、また地域による差異など、様々なことについて学びました。授業ではネイティブでないと分かりづらい違いやニュアンスについて学べるのでとても興味深かったのですが、評価は 100%テストだったので、対策が大変でした。

留学を通して自分で考えて意見を持つことの大切さを痛感しました。私はこれまで勉強をするうえで正解にたどり着くことにこだわっていたり、日常生活では何をまわりが求めているのかにとらわれていたりしましたが、絶対的な正解が存在する研究なんてものは無く、ましてや「自分はこうでなくてはならない」という縛りなどは存在しません。大切なことは、自分はどう考えるかなのだと実感しました。そして、ものごとを考える基盤として知識や資料が必要であり、その知識、資料をより多く、正確に収集するためには、(特に私の興味・関心のある分野を学ぶには) 外国語の習得が必須であると感じました。前述した通り、留学を通して外国語の習得が必須であると感じました。なぜなら、原文や原語が意味していることを全く同じニュアンスや意味合いで翻訳することの難しさを痛感したからです。そのため、元の言語の文脈や使われ方も含めて知ることができる原文をあたることはとても重要なことだと思うようになりました。また、もしその言語を知らないとしても、自分の国に存在しない文化や物事の捉え方について考えたり、理解したりするためには、母語による世界の分節の仕方にだけとらわれていては難しいように感じました。これを言語や他の国について知るときだけでなく、これから先日々の生活の中で自分以外の人と関わるときにも活かし、自分と相手との間にある違いについて想像し、許容、理解できる人でありたいと思います。

留学前は何かと不安なことがたくさんあると思います。ただ、留学を終えた今、もし少しでも留学したいという思いがあるなら、思い切って挑戦してみてほしいと思います。応援しています。

UNIVERSITY OF THE BASQUE COUNTRY San Sebastian, Spain

融合理工学府　創成工学専攻建築学コース修士２年　原田瑞妃

サンセバスチャンにある州立大学である。建築では有名な大学で、最新の機械など設備が整っている。街はスペイン王国の避暑地ともなる綺麗なビーチと美食の街で有名である。キャンパスはビーチから徒歩７分にあるので、空き時間に学生同士で遊びに行く学生や、サーフィンを習っている学生が多かった。サンセバスチャンはバスク自治州の都市であり、バスク語など独自の文化を持つ。大学には主にヨーロッパ系や中南米から留学生が来ており、アジア系は少ない。しかし、留学生担当の先生方がとても優しく面倒を見てくださったので、不安を取り除くことができた。授業では英語が通じるが、地元の学生や街では英語が通じない場合の方が多い。

B

大学でスペイン語を学ぶコースが設けられていた。学校が始まる前にスペイン語の授業を受けるだけのコースが用意されていたが、事情により参加できなかったため、独自にスペイン語の教材を買い勉強した。また、ゼミで一度現地に訪問したので、その時の千葉大学紹介のプレゼンスライド（英語版）などをまとめておいた。実際に留学生間でお互いの出身校ではどんな勉強をしているのかを聞き合う機会が多かったので役に立った。
良くも悪くもハードだったと思う。バスクの街や大学の良い面は、一般的に人が穏やかで優しいことだと思う。留学生活で苦戦したときも様々な人に助けられたおかげで乗り切れたし、とてもいい思い出が作れた。悪い面は、物価が高いことで、学生たちは節約生活を頑張っていた。また、サンセバスチャンは比較的安心だが、バルセロナの治安の悪化など、常に情報収集を怠らず近辺の状況を確認することは大事だと思った。

住居は、現地に着いてから学校が勧めた寮に決めた。大学からは徒歩 15 分の立地で歩いて登校した。１日３食ついており、西洋式の食事を楽しめたし、友達も作りやすかったので良かったと思う。私の部屋からは海が見えて、とても嬉しかった。買い物は大学の近くにスーパーが２軒あったのでとても便利だった。通学路にはテイクアウトできる飲食店が多く、祝日など寮のサービスがない時に助かった。時間の使い方について、時間割を組むときに一日休みをつくっておいたことが後々役に立った。たまった課題を済ませる、図書館で様々な資料を読む、買い物してストレス発散する、寝て体力をつけるなどして活用した。週末は友達と近くの街に旅行をしたり、海で遊んだ。授業はグループワークが多く、空きコマに集まって課題を進めた。毎週木曜日は「ピンチョポテ」という学生が安くワインを飲めるイベントがあり、それまでに課題を終わらせてみんなでご飯を食べに行った。

ホームページのシラバスはスペイン語だったため、翻訳機で授業内容を読み解くことが難しかった。写真もなく文章だけではイメージがしづらかった。また、コマで授業時間を区切るのではなく、担当する教授がそれぞれ時間を決めているので、授業時間が被ることも多い。さらに、エラスムス奨学金での留学だったため、取得すべき単位数も多かった。結局現地に行ってから授業時間と単位数で調整をした結果、時間割が決まった。その中でも私は研究室ではあまり学ばないかつ日本との違いが大きい都市計画についての授業を多くとった。授業では、サンセバスチャンに流れる大きな川沿いの都市再生計画や設計でゲルニカを敷地とした都市計画の提案をグループで行った。また、最新の機械の使い方を学びたかったので、自由曲線で構成されるオブジェクトをライノセラスとグラスホッパーで設計し、3D プリンターで模型を作る授業に参加した。授業の最後にはパビリオンの設計コンペを行い、原寸のモックアップを全員で協力して作り、ものづくりの楽しさを体感した。他にも、環境負荷の少ない建築について学ぶビルバオの EXPO 展を見学するなど課外授業が多く、学びが広がった。
当初の目的だった「日本と西洋間における建築や都市に対する考え方の違いを学ぶ」ことは少し達成できたと思う。日本の建築はスク

ラップアンドビルドで建てられたため、敷地内でどれだけの価値を生むかに焦点が当てられ機能やデザインを重視されたことに対して、西洋の建築は長く使われ続けているため、都市のスケールでの位置づけと現在ある資源を生かすことに焦点が当てられ土地性や景観が重視されているように感じた。近代的な建築に対する感想かもしれないが、日本の町並みが独特なのは日本がわずか数十年で目覚しく経済発展を遂げ、建物がその生活を支えるために急な変身を遂げたからだという印象を抱いた。逆に西洋の建築では、自由曲線を用いた大胆な構成の建築も人気があり、新しさをどう生み出すかが注目されているのではないかと感じた。しかし、共通するのは環境負荷が少ない建築や都市のあり方を考えることだと思った。ソーラー発電や風力のほか、バイオエネルギーを用いた建築など最先端の技術を身につけるなど授業を通して今後の課題を学んだ。各授業に関して述べると、設計の授業では図面が多く要求され、図面の精度も高かった。現地の学生の質の高い卒業制作をみて参考にした。教授は様々な事例を教えてくださり、デザインの幅が広がった。都市計画の授業では、敷地分析や事例紹介に精度を求められ、計画の実現に関する諸問題を学んだ。パラメトリックデザインの授業ではコンピューターのソフトの使い方を学び、模型にするときにパソコン上では成り立っていても実際は素材や構造、組み立て方で失敗して成り立たないことがあり、その原因を考えた。新しい建築の授業では、工法やエコ建築について学び、次世代の建築を学んだ。法律の授業では、法律に則り設計を行うことで、より実務に近い作業を学ぶことができた。

英語やスペイン語の学習に対するモチベーションは以前よりも増した。外国人とコミュニケーションをとる時には、その人の背景にあるものや状況をよく理解することが大事であると学んだ。帰国後も考えは変わらず、コミュニケーションの仕方を見直せた。建築を考える時に、デザインの美しさだけでなく都市の構成や状況、環境に対する負荷、構造、工法など幅広く考えるようになった。その際に留学中に見た都市や建築を参考にしている。大学図書館には世界各国の建築図書があり、今まで以上に建築に関する学習意欲が沸いて、帰国後も様々な図書を読むようになった。また、西洋の建築と日本の建築を比較することで、日本の建築がもつ独特さに気付き、その魅力を改めて知ることができた。また、自身の性格も、以前は受身で消極的だったが、自発的に行動するようになったと思う。

海外で仕事できる人間になりたいと常々思っていたが、留学によりその目標に対する課題が明確化したと思う。例えば、英語でも対等に議論を交わすコミュニケーション能力、価値観の違う人とお互いの考えを認め合う柔軟性、グループワークで期限内に仕事を進めるマネジメント能力など、これらの能力が向上するよう努めたい。今回の留学で視野が広がったことを生かし、今後は国内および海外の都市開発に取り組んでいきたいと思う。
千葉大学とは環境が全く異なるので何に対しても学びがいがあり、楽しい留学生活を送れました。留学の学習目標や目的をもって行くと必ず成長できるし、そんな学生を温かく支えてくれる大学だと思います。

TSINGHUA UNIVERSITY Beijing, China

法政経学部　法政経学科３年　長弓拓矢

北京大学と双璧をなす中国のトップ大学であり、受験人口比で計算して全学部が東大理Ⅲと同じくらいの入試難易度である。北京大学は文系が強く、清華大学は理系が強い傾向にある。キャンパスがとても広く、東京ディズニーリゾート全体より大きい。事実上の全寮制で、スーパー、映画館、劇場、郵便局や住宅地がキャンパス内にあり、キャンパスというより町である。留学生へのサポート体制は手厚くない。メールは一通も返ってこないので留学生課オフィスまで行ってメールを見るよう催促しなければならない。日本にいるときは連絡の取りようがない。

T

生活費として給付奨学金（トビタテ）を申請した。寮の申込みをした。申込後に確認メール等が来ない仕組みでちゃんと申し込めたのか不安だったが現地に行ったら入れた。語学力は、現地学生と一緒に受ける授業であれば、HSK 6 級レベルの中国語能力が最低限無いと厳しい。英語で開講されている授業に関しては TOEFLibt80 点くらいあれば理解できる。但し清華大の文系学生は 100 点越えが普通であるのでそれに合わせて授業は作られていると思う。清華大学に留学する利点は、・優秀な中国の学生と交流し人脈を広げられる・著名人が沢山公演に来る。
私の留学期間中に、トヨタの豊田章男社長が公演にいらっしゃり、お隣の北京大学にはハーバードのジョセフ･ナイ教授（清華大学シュワルツマンカレッジ教員）や、安倍首相もいらっしゃった。・色々なチャンスが降ってくることが利点として挙げられる。大企業でのインターンの機会や、現地学生から様々なことに誘われる。私は友人の中国人学生から推薦され、中国中央テレビに出演した。･寮、食堂やスーパーなどの生活環境が素晴らしい。寮はホテルのように清掃やシーツ交換が定期的に来る。食堂の数は優に 10 を超え、料理の種類がとても多く飽きることはない。・図書館、体育館、ジム、プールなどの大学設備がとても充実している。欠点として、・千葉大のように都心から遠く、北京中心部まで 1 時間かかる。・留学生課がひどいので不安になる。･大学の最寄り駅はクラブやバーなどが多く、そういうのが好きな人は生活が堕落する危険性がある。私も最初は毎日飲み歩いてしまった。結論として、チャンスを掴みたい学生は清華大学をお勧めする。

大学の留学生用寮は一人部屋 (CNY80/day) と二人部屋 (CNY40/day) がある。Asian Youth Center という国際寮もあり、ここは一人部屋 (CNY120/day) しかないが、中国人学生も同じ建物に住んでいるので交流することができる。値段が高いので寮費が無料の中国政府奨学金生が大半を占める。私は留学生寮の一人部屋にした。いくつか棟があるが、19 号楼にすることを強く強く勧める。設備が一番良いからだ。ほかの棟はマットレスがないことがあるなど問題がある。部屋の詳細についてだが、部屋にはポットくらいしかものがなく、テレビすらない。ハンガーを買うことから生活はスタートするだろう。学内環境は非常に充実している。大学から出なくても生活できる。図書館は総合図書館があるだけでなく、専門図書館がある。映画館、劇場、郵便局、銀行、スーパー、携帯電話ショップ、食堂 10 か所以上、タピオカ屋、パン屋、靴・服修理屋、自転車屋、ジム、プール、テニス・バスケコート各 10 面以上、バドミントン・卓球専用ドーム、etc. 基本的に全て揃っている。バドミントンコートなどは予約すればいつでも使えるので非常に便利。一日のスケジュールは千葉大に下宿で通うときと大差ないと思う。授業後はサークル活動に参加したりする。

事前にシラバスを知ることが不可能だった。全ての受講科目を渡航後に決めた。院生向けの授業はタフで課題も重い傾向があるので学部生向けの授業を主にする。千葉大学と違う点は履修登録期間が終わっても履修を切る期間が存在すること。これにより成績表に不可がつくことを防ぐことができる。期間は履修登録期間が終わって1週間後と学期末テスト1週間前の各学期計２回ある。従って多めに履修選択して後から絞る方法を取ると良い。「日本政治、政治と経済」中国国内の日本政治研究の第一人者が開く授業。他国の日本政治の見方を知ることにより視野が広がる。面白い。教授や中国人学生の忌憚のない意見が聞けて面白い。「漢語精読」「漢語聴力」「漢語口語」リーディング、リスニング、スピーキングの授業が４レベルずつある。新出の単語、成語、語法が毎授業で沢山出るので授業は大変だが、その分成長を感じられる。同級生は韓国人が最も多く、アジア人と白人の割合はほぼ同じくらいである。日本人以外のほとんどは中国語専攻である。そのためやる気に満ち溢れており授業で行うプレゼンもとても上手である。「民法」「商法」中国法は日本法と同じくドイツ法を基にしており、日本法にもかなり影響を受けている。中国の法律用語の 40%は日本から輸入されたものである。授業で紹介される民法の教科書には日本の教科書の中国語訳もあった。こうした背景もあって中国法自体の理解は難しくはない。しかし専門性の高い講義を理解するのは難しい。法律専門用語は聞き慣れない為、ときどき何を説明しているのか分からなくなる。後で発音から漢字を調べれば日本にもある法律用語だった、ということも度々ある。日本との法律の違いを知ることにより日本法の理解も深まる。

留学前は大学の授業を適当に受けていたが、留学によって、日本語で授業を受けられるありがたみを知って、真面目に受けるようになった。真面目に聴くと案外面白いことが分かった。苦難を乗り越える経験が積めたのは何にも耐え難い貴重な財産だと思う。ストレスで眠れない夜もあったし、危うく寮を追い出される寸前までいったこともあった。今後何があっても動じないと思う。精神力が鍛えられたので、就活でどんなにひどい圧迫面接を受けても全くへこたれない自信がある。正直行く前は勉強しかしないつまらない大学なのではないかと心配していたが、すぐに考えを改めることになり、終わりの方ではもう帰りたくないと思った。イベントも山程あり、サークルも楽しく、充実した生活を送れた。派遣留学は私費留学に比べて清華大学では優遇されており、具体的には寮の優先割当、現地学生と同じ税金による補助の入った割安な食堂価格などがあり、派遣留学で良かったと思った。

MAHIDOL UNIVERSITY Phutthamonthon, Thailand

国際教養学部　国際教養学科３年　小林拓磨

マヒドン大学は、バンコクから程近くにある、国際色豊かな学びの場が特徴の大学です。というのも、アジア圏では珍しく、アメリカ、ヨーロッパからの留学生も多く訪れるため、様々な人に合わせた環境を整えてくれます。また、講師も他大学、企業からとバリエーション豊かな人材を登用しており、自分に合った適切な学修を行えるのも特徴の一つです。留学生課もありますが、チューター制度や大学主催のアクティビティなど学生が助け合う心強いサポート体制が取られています。タイ特有のゆっくりとした空間が流れ、モダンな雰囲気な施設からちょっとした森林が広がる植物園など毎日新たな発見のあるキャンパスになっています。

M

私は、観光学を現地大学で履修しようとしていたので、留学前には日本で旅行会社とホテルのインターンを一ヶ月間ほどしていました。他には、LEX プログラムでタイ語、English House で英語を意識的に勉強し、留学生活のみならず、これからに役に立つような勉強を行いました。また、ビザの準備が思った以上にかかったので、保険などの手続き関係は早めに行動することをおすすめします。
マヒドン大学では留学生がアクティブに過ごせるよう、パーティーはもちろん、課外アクティビティやフードフェスティバルなど常にイベントがあり、飽きることがありません。一方で、大学を出ればそこはローカルな人達が暮らすタイの生活です。もちろん、観光地でもないので英語は通じません。タイ語をある程度話せないと、少し不便に感じてしまうかもしれませんが、分からないからこその楽しみがあるのも面白いところです。

私は千葉大学の教授にドミトリーを紹介していただいたので、問題なく住居を決めることが出来ました。また、大学付近に学生街があるので食事や買い物には苦労しませんでした。通学には、ドミトリーのシャトルサービスやバスを利用して通っていましたが、タクシーが安いので友達と一緒の時はタクシー通学をしたりもしました。週に３日インターンに通っていたのとスラムの子供達のボランティアをしていたため、バンコクに出向くことが多く、授業が終わると夜まではバンコクで過ごすことが多かったです。それでも、休みの日には、友達と勉強したり、ジムに行ったり、大学のバドミントンサークルの練習に参加したりと充実した日々を過ごしていました。授業は一コマ２時間で週に２回あるので、一日２時間ほどしか大学はありません。一つの授業が週に４時間あるため、履修上限自体が少なく、課題やテストも少ないですが、質や量が日本とは比べものにならないほど要求されます。

現地では観光学とタイ語の授業を履修していました。事前に履修希望を提出しなければいけないため、送られてきたシラバスを元に決めなければいけないのですが、科目名とコードしか載っていないため、自分で先生に直接アポイントを取って授業内容を詳しく聞きました。また、授業が始まってからも履修内容の変更ができ、留学生を優先してくれるため比較的ゆっくりと履修を決めることが出来ます。ただし、履修条件がある場合は注意が必要です。授業を受ける前提として知識を要求されることがあるので、足りない部分は自分で補うしかないため、学部生で２、３、４年生用の授業を取る人は履修条件と授業の目標を確認しておくと後で後悔せずに済みます。また、留学生であっても現地学生用の英語のクラスに参加できるため、現地で英語のスキル不足を感じた際は、活用してみると良いかもしれません。私は前半に２年生用のコースを取り、後半に少し難易度を上げた３年生用のコースを取りましたが、やはりそれなりに必要となる知識が異なり、図書館を活用したりと大変なことが多かったです。

観光学では、時には座学もありましたが、主な活動は実際に自分たちで行動してみる実践的な内容がほとんどです。座学を前半期にまとめて行い、後半は自分たちでプロジェクトを進めるといった授業が多かったです。座学の内容としては、経済学的側面や観光の歴史など幅広いものが用意されています。授業の一環として、５つ星ホテルへの見学や経営者へのインタビューを行いました。しかし、これらは授業時間外に行う必要があるため、履修予定よりも大幅に時間を取られます。ただ、グループ活動が基本であるため、英語やタイ語が分からなくても助け合えるので、語学や積極性に自信が無い人でも安心して履修できます。タイ語の授業では、履修予定期間によって受けられる授業が変わりますが、私は２ターム用の授業を取っていました。この授業では、リーディング、リスニング、ライティング、スピーキングを同時に進めていくため、覚えるべき量は非常に多かったですが、日常生活ですぐに使えることもあり、あまり苦にはなりませんでした。

私は、特に生活面で意欲的に行動することが出来るようになりました。もちろん、学習面でも大きな成長を感じますが、それ以上に積極的に行動する勇気を身につけました。留学中の辛く苦労が絶えないあの頃の自分より、今の自分の方が負けていないと胸を張って言えるようにどんなことにも挑戦してみようと思えるようになりました。そうして、自分をアップデートしていけば、いつかはタイのスラムで毎日を必死に生きる彼らを救えるようになると信じ、無理だと思っても挑戦してみる勇気を手に入れることが出来ました。また、留学中の授業は初めての分野で、しかも英語で全てやらなければいけない環境だったので、自分が納得できるまで問題に向き合い続ける根気が付いたと思います。

私はこの留学経験がたくさん人の協力と支えで叶えられた素晴らしい体験だったと思っています。就職活動や大学での学修以前に、私を人間として大きく成長させてくれたこの経験を大切にしたいと考えています。そして、これから出会うであろう人たちに私が受けた以上の恩を返そうと思います。学習面でも就職活動にもこの経験を生かせるようにしていきたいと考えています。
留学という経験は輝いて見えるかもしれませんが、実際は辛く苦しいことも多いです。しかし、それは私たちが自分を見つめ直す良い機会であると共に、そこから新しい自分が生まれる出発点です。どんな留学にしたいかはあなた次第です。

CHIANG MAI UNIVERSITY

Chiang Mai, Thailand

国際教養学部　国際教養学科３年　菅野博斗

地方都市で最初に設立された国立大学。１７の学部と３つの研究所を持つ総合大学。大学の教育の特色として北タイの文化の文化維持を目的としている。大学は山々に囲まれており、ドイステープ国立公園ドイステープ山の麓に位置している。敷地面積は東京ドームの８０個分に相当するため、学生のほとんどはバイクや無料の電気シャトルバスを利用して移動する。フードコートが学部ごとにあるため飽きることなく、安くて美味しいご飯を食べることができる。大学の周りにもマーケットやショッピングモールがあり充実している。留学生課がチューターを一人一人つけてくれたりサポートもしっかりしている。

C

留学前の準備としては、言語面が大きい。タイに行くので最低限のタイ語とタイ文字の学習をタイ人に教えてもらったりした。千葉大学のタイ語の授業にも参加した。また基本的に英語による授業なのでもう一度英語の学習につとめた。千葉大学で他大学との長期的なプロジェクトに参加することにより英語を使う機会が多くあったため、ある程度の自信を持って留学に挑むことができた。以前にもタイで短期プログラムに参加したことがあったので生活面での不安はなかった。

良い点としては、柔軟性が高い点である。本来タイの学生だけに行われているような行事、イベントにも参加することができた。タイの友人に頼み、獣医学部で行われていた象の保護センターにおける２泊３日の研修に留学生として自分が唯一参加した。事前に先行としてテストのようなものがあったのだが、特別に英語でも可能にしてもらい、合格し、研修中も英語のできる学生に全てタイ語から英語に直してもらうことで有意義な時間を過ごすことができた。タイという環境に身を沈めることができたよい経験である。

住居選び→学校が手配した大学から徒歩１０分の距離にある英語を使うことができるスタッフのいるアパートに住んだため、住居選びはしていない。そのアパートでは、他の大学から同じように交換留学で来ている学生とルームシェアをした。食事→お金のないときはみんなで自炊をしたり、一番安い学食を食べる。お金の余裕がある場合は、学外の食べ放題やタイ料理以外を食べる。生活必需品→学校内の商業施設の中にある薬局や近くのコンビニで調達できる。通学手段→学内に無料で走っている電気シャトルバス。しかし乗り継ぎを２回しなければいけなかったので慣れてきたら、スケートボードで通学していた。　交通手段→遠いところに行く場合は、基本的にタクシー（GRAB）や友達のバイクに乗せてもらった。

事前に履修を考えていた科目が今期は開講されなかったり、留学生はその授業を取れなかったりなどの問題があったため、いくつかの授業は実際に授業を受けてみることで履修を決めた。「トランスナショナリズムと東南アジア」。東南アジアを中心に起きている、人身売買、密輸、空気汚染などの国境を越えて起こるような問題に対して、ディスカッションを中心に理解を深め、解決策を模索した。「ランナー文化」。北タイ地域特有の文化であるランナー文化に関する授業であり、ランナー王朝の歴史、文化、芸術を学修した。フィールドワークで、それらに関連した場所を訪れたり、ゲスト講師を招待して授業を受けたりなど充実した内容となっていた。「タイ語」。初級タイ語をタイ語ネイティブの先生から学んだ。５つの声調のあるタイ語を発音を中心に日常で使用する言葉などを身につけた。「スイミング」。留学生にも開講されている数少ないスポーツ科目。５０メートルのプールを使い、少人数の授業を行った。綺麗なフォームを身につけると共に、なぜこのような動きをすべきかとスポーツ科学的視点からも学ぶことができた。

授業は全体的に大変であった。基本的に授業前にその授業に関連した論文を読み、それを要約して授業前に提出した。そして授業中ではディスカッションを中心に授業が進んでいくのだが、みんなが知っている前提としての知識は自分が知らないということが多く、ついて行くのに苦労する反面、多くの知識を得られたと思う。例えば留学生の中にミャンマーからの学生がいたため、話題がカレン族についてになったが、自分は名前を知っているだけであり、実際にどういったことが問題になっているかや、むしろミャンマーについて何も知らなかった。勉強不足を実感するとともに、勉強をもっと頑張ろうという意欲、そして情報を得た時にその情報をより理解しようとするなどして質を高めるべきだと実感した。それに加え、先生は、今の勉強がいかに多くの他のことと複雑に関連しているかや、いかに日頃から新しい情報を取り入れ学び続けることができるか、そして人生の先輩としての意見など、授業だけに止まらず、大学４年間、そして人生という俯瞰した目線からのアドバイスをしてくれた。こういったことができるのも先生が相当な熱量を持ってそれぞれの授業に取り組んでいることや、先生の自己認識として、授業をやれと上の人から言われたから授業をしているのではなく、能動的に、この授業は学部の中の中でこういった立ち位置にあり、この授業が生徒たちも将来に影響を及ぼすという認識を持ち、真摯に授業に取り組んでいるからのように思う。学部と先生とそれに生徒がしっかりついて来ているように見受けられ、良い学部だなと感じた。そこで一学期という短い期間だったが一人の生徒してそこにいたことに誇りに思うし、幸運だったと実感している。

学習面の変化としては、自分の学習の幅も広がったように感じている。日頃から英語での情報収集をするようになったり、またディスカッションのクラスのおかげでどう伝えれば人に伝わるかを考えるようになった。また生活面の変化として、周りの目をあまり気にしないようになった気がしている。たくさん日本人として見られたし、アジア人として見られたし、外国人として見られた。この経験は良い意味で周りの人が自分のことをどう思うかはたとえどんなに、自分がどんな考え方、生活スタイル、服装をしていても、変えられないと理解したのでまわりからどう思われるかがあまり気になるものではなくなった。言語面では、英語やタイ語での生活が長く続き、日本語に対する過剰な自信が相対的に出てきたことを原因に論理的に話すことが余計にできなくなってしまった。

留学経験を通して今後活かしていけることがあるとすれば自分に対する理解が深まったことである。留学を通して多くの人、多くの違った考え方を持つ人たちと話し、ともに生活を過ごすことできたのはとても良い経験だったと考えている。確かに学校の授業を通して得た知識やタイ語などの語学の面もあるがやはり人間関係という全てにおいて不可欠な要素に自信が持てていることは今後良い影響をもたらして行くだろう。留学は行くだけで素晴らしいように周りから見られる点も多いが実際に自分がそこで何をしてきたかが自分の将来に影響をもたらすものであり、留学に行っただけで価値がつくものではない。海外に行けば良い変化がもたらせると考えて行くのは危険だと思う。

UNIVERSITY PUTRA MALAYSIA Selangor, Malaysia

園芸学部　緑地環境学科４年　菊地達郎

場所はクアラルンプール国際空港から車で北に 40 分の所。UPM は 1931 年に農業学校として始まった大学で、農業分野で世界的に高く評価されている。現在は 16 学部に加え 9 個の研究機関を持つ、非常に大きな大学である。キャンパスはいくつかに分かれているが、合計すると東京ディズニーランド 40 個分くらい。体育館、ジム、プール等の施設は留学生寮からは遠いが、自転車か学内バスを利用すれば問題はない。大学内には、留学生を支援する団体「UPM Buddies」があり、定期的にイベントを企画してくれる。彼らに学生生活や私生活等は相談すると良い。

P

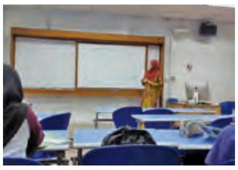
学業に関しては、基礎的な熱帯生態学について学んだ。留学先の学部の先生方の研究を浅くであったが、調べておいた。また、英語の勉強として TOEFL 対策をしていた。生活に関しては、なるべく留学生と過ごすようにしていた。様々な予防接種が必要だったので、計画的に打った。また、キャッシングカードや普段使っている常備薬など日々の生活に必要なものをリスト化し持っていくことを忘れないようにした。
良い点は、キャンパスが広くて、食事が安く済むことである。松戸キャンパスは狭いし、食べ物も高いので、特に感じた。また、治安が悪くない。近くにモールが複数あるので、必要な物があればすぐに何でも購入可能なのも良い点の1つ。悪い点は、授業の英語の質が良くないことである。重要な箇所をマレー語でしか言えない先生がいる。授業は完全に英語を使うと書いてあるが、普通はマレー語混じりである。

住居は留学生寮（Guest House）の一択しかなかった。全部屋冷房完備で快適。キッチンがフラットで共同で，シャワーは部屋にある。部屋は２人1部屋なので，気が合わない人と一緒になると大変かも。寮といっても小さいので，各フラットはマンションのようである．交番が隣にあるので安心。食事は学食，学外，自炊が均等くらい．学食は The 学食って感じの場所と個人経営みたいなのがある。値段は安い。寮近くにあるインド料理的な店を多用した．生活必需品は近くのスーパーもしくは遠出してモールで購入した。林学部への通学手段は徒歩もしくは自転車。自転車は購入した。レンタルも可。農学部へのアクセスはバスを使う必要がある。遠くに行く時は Grab Taxi、たまに学校のバスを利用。学校のバスで South City という小規模なモールがある所に無料で行ける。学校周辺はパッとせず，ごちゃごちゃしているのが東南アジアっぽい。

授業はシラバスを見て取りたい授業を考えてから、アドバイザーと相談して決めた。Forest Botany：マレーシアの植物、それに関することを大まかに全部学ぶ授業。他学部の自由選択科目にも指定されてる。難易度はあまり高くなく、学部を問わず、１、２年生が多い。午前 8-10 時が座学で、午後 3-6 時が実習。履修登録が出来ず、聴講生として参加した。実習として UPM の演習林等に行ける。
Forest Mensuration：森林で樹木を調査する際に必要な計測の仕方について学ぶ。コンパス、バークゲージ、ビルトモアスティックなどの道具の使い方を覚える。Forest Botany 同様、午前座学（10 時～ 12 時）で午後実習（14 時～ 17 時）。実習では、班に分かれて、その日座学で習った道具を使用した演習を行う。Final Year Project ：専攻研究。Cameron Highlands という高原の自然再生プロジェクトに関った。 植物病理学に関する調査を担当した。シラバスを見ると興味深い授業がたくさんあるが実際受けてみると想像と違う。これは千葉大学と同じ。Forest Botany では、マレーシアにある樹木の基本的なことを学んだ。実習として UPM の演習林やバスで2時間ほどの所にあるマングローブ林に行けるので楽しい。マレーシアにはおよそ 2000 種の木があるとされていて、その数は日本のおよそ 700 種の 2 倍以上。見た目がそっくりな木が多く名前を覚えることは非常に難しい。さらに、日本の木より樹高が高いものが多く、葉が見えないことが多い。葉や実がわからない時は、樹皮をめくった時の色、どんな樹液を出しているかなどがその木の名前を当てる手がかりとなる。聴講生として出ていたので、外へ出かけるイベントがなくなったら、出席することをやめた。
Forest Mensuration では、森林で樹木を調査する際に必要になる計測の仕方について学んだ。実習の時間で、班に分かれて習った道具の使い方を確認するのだが、全員マレー語を使って勝手に作業を始めるので、全然使い方を確認できなかった。英語を使ってくれるように頼んでも改善がなかったし、授業内容も面白くなかったので、履修をやめた。

Final Year Project では、Cameron Highlands という自然が豊かで観光地としても有名な高原における自然再生プロジェクトに関わった。そのプロジェクトで必要な樹木の苗に発生していた病気を突き止め、改善策を考えるパートを担当した。元々は、アドバイザーの元でマングローブの研究をするつもりだったが、共同で研究を行なっている他の大学がその活動を停止したので、出来なかった。植物病理学的なことは千葉大学で習っていなかったので、一から勉強をすることになり､大変であった。また、調査地が大学から遠いため、中々調査する許可が下りなかったり、他のグループが一緒に活動できる日でないといけなかったり、苦労した。

課題は図書館か寮で行なった。図書館は 10 時くらいに閉まる。寒いので上着が必須。後期はカフェができたので、やる気がない日に利用した。料金はあまり安くはない。研究はうまく行かないことがほとんどであったのでストレスが溜まった。愚痴を吐ける人が身近にいると良いかも。



余暇はテニス、ハイキング、水泳、ジョギングをしていた。前期は特にフラットメイトがテニスをしたがったので、テニスをしていた。また週末に山登りもした。一方で後期はフラットメイトが運動をしない人だったので、1 人でできる水泳をしていた。料金が安い。ちゃんとした水着を持って行ったことは正解だった。キャンパスが広いのでジョギングが楽しい。たまに外へ出てカラオケとビリヤードもした。長期休暇は旅行。国内もしくは国外周辺へのアクセスは容易かつ安価。海外で研究活動をすると、外国人であるが故に色々な手続きが必要になる。当たり前のことのように思えるが、わかっていなかった。大学院で留学する機会があれば、留学先の大学近くで完結するテーマを選ぶ。また、ネットの情報はあてにならないので、担当教官の知り合いの人の所へ行くのが無難である。研究関連以外の仕事では、海外からの移住者の支援などに携わりたい。
今回長期留学し、自身が外国人となり苦労したり、寂しかったりした経験を直接活かせるだろう。入念に準備したつもりであったが、目標をもっと明確にすべきであったと後悔している。応募する際の書類や選考面接の中で目標をはっきりと示す必要があるが、本当に目標を明確にすることが重要である。目標があやふやだと後悔する。

RMIT UNIVERSITY / UNIVERSITY OF MONTERREY Melbourne, Australia / Monterrey, Mexico

国際教養学部　国際教養学科３年　高木峻

ロイヤルメルボルン工科大学（以下 RMIT 大学）は、オーストラリアメルボルンの中心にキャンパスを持つ公立大学です。その特徴として大規模な大学であり世界中の国からたくさんの留学生を受け入れています。留学の申請がすべてオンラインでできたり、シラバスなどの情報が充実していたり、留学生に対するサポートシステムがしっかりと確立されています。２つ目に留学したモンテレイ大学（以下 UDEM）は、メキシコモンテレイにある私立大学で、RMIT 大学と比べると規模は小さいです。留学生用のイベントは豊富で、現地のメキシコ人メンターによる学生グループを中心に月に３、４回のペースで留学生用のイベントが企画されていました。

R

学業面では、特に言語の準備に力を入れました。言語に関しては充分ということはないと思ったので、留学のために必要な語学の試験準備に加えて、RMIT 大学の前には英語を、UDEM の前にはスペイン語を練習しました。RMIT 大学のためには大学関連の手続きに加え、学生ビザや住宅の手続きも行いました。UDEM は半年間以下であれば、ビザが必要なく、住宅も現地で決めたので、必要な手続きは少なかったです。
RMIT 大学は、学業に関する各システムや学生へのサポートが充実していました。一方で留学生のためのイベントは最初に数回しかなかったので、大学内で新たな友達と交流する機会は限られていました。UDEM では、留学生用のイベントが充実しており、大学内における友人、特に留学生と知り合う機会に恵まれていました。しかしシラバスがなかったことや、履修などの学習面でのサポートが限られていた点は不便に感じました。

生活面に関して、RMIT 大学の留学では大学公認のアパートでインド人の留学生とシェアルームをしていました。食事について、物価の高いオーストラリアにおいては多く自炊をしました。メルボルンはトラムが整備されており、通学や郊外への外出に利用していました。友人とビーチに行ったり、ビリヤードをやったり、レストランで外食をしたりしてリラックスしていました。また月に一回ほど旅行に行っていました。UDEM の留学では、コロンビア人三人とシェアハウスをしていました。食事は、よく大学内のフードコートや近所のタコスショップに行っていました。ウーバーが安価でとても便利でした。休日はショッピングに行ったり、友人と家で食事をしたりしてリラックスしましたが、デザインの課題が多くあったため、大学に行くことも多かったです。週末は、留学生用のイベントや、自分たちの家やクラブでパーティーが開かれるため、楽しく過ごせました。

RMIT 大学では当初、社会学を中心に「Interculturalcommunication」、「Introduction to Australian Society」、「Language Management in International Organizations」「Spanish I」の4つのコースの履修をしようとしました。しかし２週目の履修登録期間が終わる前日に、「Language Management」の授業が、学生の人数が足りないことを理由に突然キャンセルになりました。結局この授業を除いた３つの授業を受講しました。「Intercultural communication」は、異なる文化を持つ人々の間におけるコミュニケーションがトピックです。「Introduction to Australian Society」はオーストラリアの社会についての授業です。UDEM では、デザインを中心にスペイン語中級、スケッチ、セラミックデザイン、ウッドデザイン、ビジネスイングリッシュ（授業がスペイン語名のためすべて日本語訳）を受講しました。UDEM は英語のシラバスが存在せず、また英語で開講されている授業も限られていたため、現地においてコーディネーターや教授からアドバイスを頂き選択しました。

RMIT大学では、授業に関してはじめの２ヶ月ほど、授業内の特にディスカッションで英語を理解するのに苦労しました。Intercultural communication では、様々な異文化交流を理解するための理論がレクチャーで解説され、チュートリアルで具体的な事例とともにグループディスカッションをしながら進んでいきました。Introduction to Australian Society の授業では、オーストラリア社会に歴史、先住民、文化、産業などについてのレクチャーがなされました。最後にスペイン語では、メルボルンの生活と絡ませながらスペイン語を学習しました。UDEM では、スペイン語で開講される授業と英語のものが半々で、英語でのコミュニケーションに問題はなかったです。一方でスペイン語の授業は、全体への説明で理解することは困難でしたが、その後教授が個別に英語で解説してくださったため、授業の内容を把握する上で問題はありませんでした。デザインの授業は専用の施設にて、その他の授業は通常の教室で授業を行いました。デザインの授業は課題が与えられて、その製作を通して学習していくスタイルでした。スペイン語とビジネス英語の授業は、日本のものと似た形式でしたが、より積極的な参加が求められました。セラミックのクラスは、実際にセラミックでテキーラショットやボックスなどを製作しました。ウッドデザインでは、お盆やスモールチェア、ペンダントなどを加工制作しました。スケッチのクラスでは、様々なスケッチの対象が課題として与えられ、それに必要な技術のレクチャーを受けました。これらの授業は、授業外で作業を実際に手を動かしてすすめる必要があり、課題が重なったときなどは体力的にも大変でした。

学習面に関して、留学前には国際教養学部の性質上、専門性に富んだ内容を学習する機会がありませんでした。しかし留学を通じて RMIT 大学では社会学を、UDEM ではデザインに関して限定的ではあるものの専門的に学ぶことができました。語学面では、特に英語に関して、自信を持って会話することができるようになりました。またスペイン語に関しても、生活する上で最低限のものは身につけることができました。しかし今回の留学を通じて、精神的に成長したところが最も大きかったと感じます。留学する前は、どちらかというと引っ込み思案な性格だったのですが、新しい環境で生活した経験から、新たなことに挑戦する自信がつきました。さらに、異なる文化や背景を持つ人々と交流し、幅広い思考に触れた経験から、多面的に物事を考えられるようになったと思います。２つの留学経験から、社会学とデザインという異なる分野を専門的に学んだことは、今後国際教養学部の進路を決める上で非常に役に立っています。さらに語学面においても、引き続き練習を続けることで、キャリア形成や外国人とのコミュニケーションに活かしていきたいです。また身につけたチャレンジ精神で、今後も新たなことに取り組んでいきたいです。

千葉大学は留学に対するサポートも手厚く、また過去の留学体験データへのアクセスも容易なので、派遣留学をするには最高の場だと思います。留学に興味がある方は、是非異なる環境で多くを学び貴重な経験をしてください！

P

協定校
PARTNER UNIVERSITY

海外キャンパス
- バンコク キャンパス
- ベルリンキャンパス
- サンディエゴキャンパス

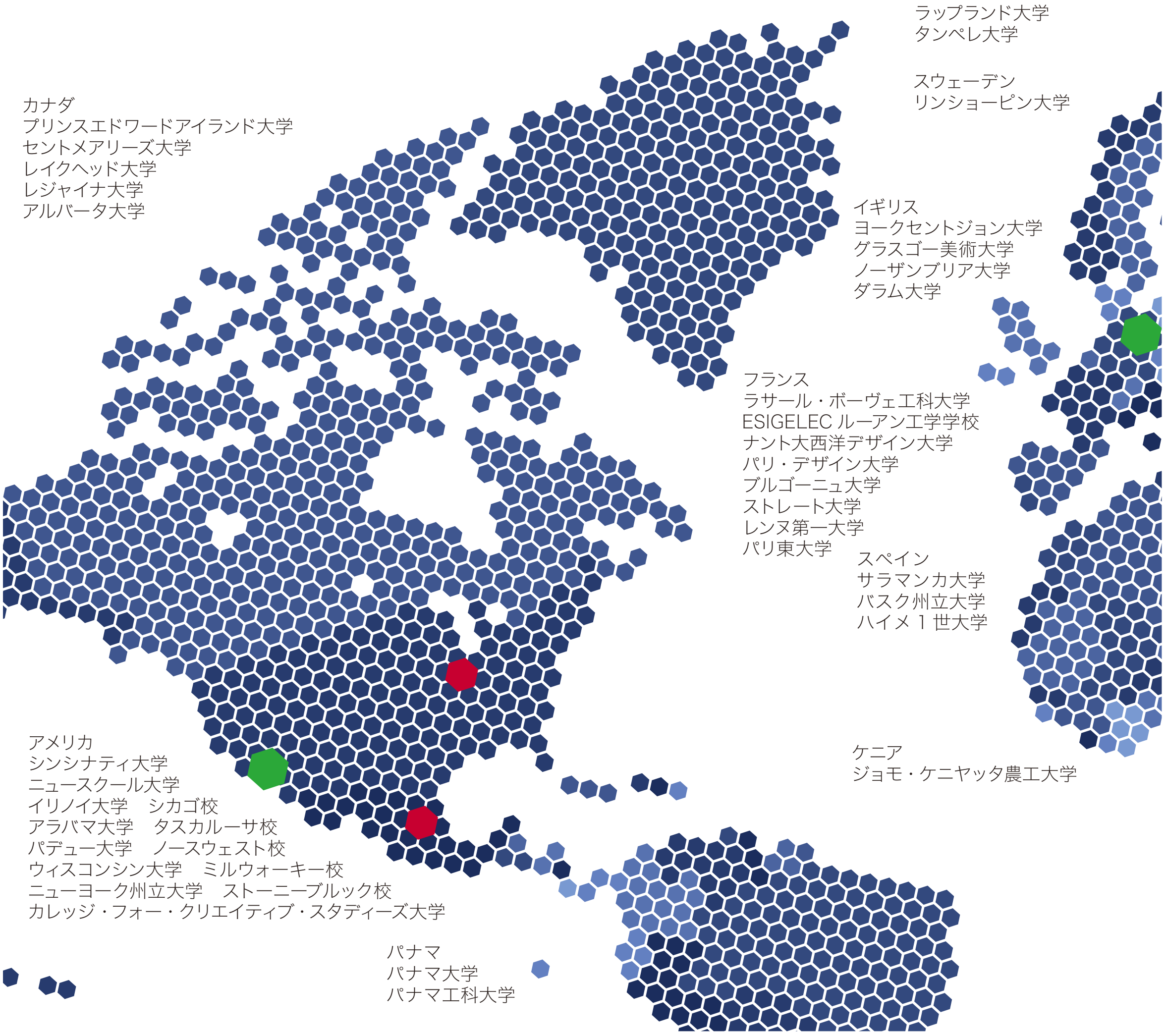
オフィス
- 北京オフィス
- 上海オフィス
- ホーチミンオフィス
- ベルリンオフィス

共同研究センター
- 上海交通大学

IEC オフィス
- セイナヨキ応用科学大学
- ロシア人文大学（日本センター）
- シャリテ医科大学
- 上海交通大学
- 浙江大学
- マヒドン大学
- インドネシア大学
- シンシナティ大学
- モンテレイ大学

学生交流協定校一覧（2019.10）33ヵ国 206 協定

北米地域	13 協定	アメリカ：8	カナダ：5		
中南米地域	11 協定	メキシコ：9	パナマ：2		
欧州地域	48 協定	イギリス：4	フランス：8	スイス：1	ベルギー：1
		ドイツ：8	イタリア：2	ギリシャ：1	
		フィンランド：6	スウェーデン：1	スペイン：3	ポルトガル：1
		ハンガリー：1	チェコ：1	ロシア：10	



カナダ
- プリンスエドワードアイランド大学
- セントメアリーズ大学
- レイクヘッド大学
- レジャイナ大学
- アルバータ大学

アメリカ
- シンシナティ大学
- ニュースクール大学
- イリノイ大学　シカゴ校
- アラバマ大学　タスカルーサ校
- パデュー大学　ノースウェスト校
- ウィスコンシン大学　ミルウォーキー校
- ニューヨーク州立大学　ストーニーブルック校
- カレッジ・フォー・クリエイティブ・スタディーズ大学

パナマ
- パナマ大学
- パナマ工科大学

フィンランド
- アアルト大学芸術デザイン校
- セイナヨキ応用科学大学
- ユヴァスキュラ大学
- 東フィンランド大学
- ラップランド大学
- タンペレ大学

スウェーデン
- リンショーピン大学

イギリス
- ヨークセントジョン大学
- グラスゴー美術大学
- ノーザンブリア大学
- ダラム大学

フランス
- ラサール・ボーヴェ工科大学
- ESIGELEC ルーアン工学学校
- ナント大西洋デザイン大学
- パリ・デザイン大学
- ブルゴーニュ大学
- ストレート大学
- レンヌ第一大学
- パリ東大学

スペイン
- サラマンカ大学
- バスク州立大学
- ハイメ 1 世大学

ケニア
- ジョモ・ケニヤッタ農工大学

メキシコ
- モンテレイ大学
- グアダラハラ大学
- ヴェラクルス大学
- パンアメリカン大学
- モンテレイ工科大学
- メリダ　マリスタ大学
- イベロアメリカーナ大学
- メトロポリタン自治大学
- アグアスカリエンテス自治大学

スイス
- ベルン応用科学大学

ベルギー
- リエージュ大学

ハンガリー
- デブレツェン大学

チェコ
- オストラバ大学

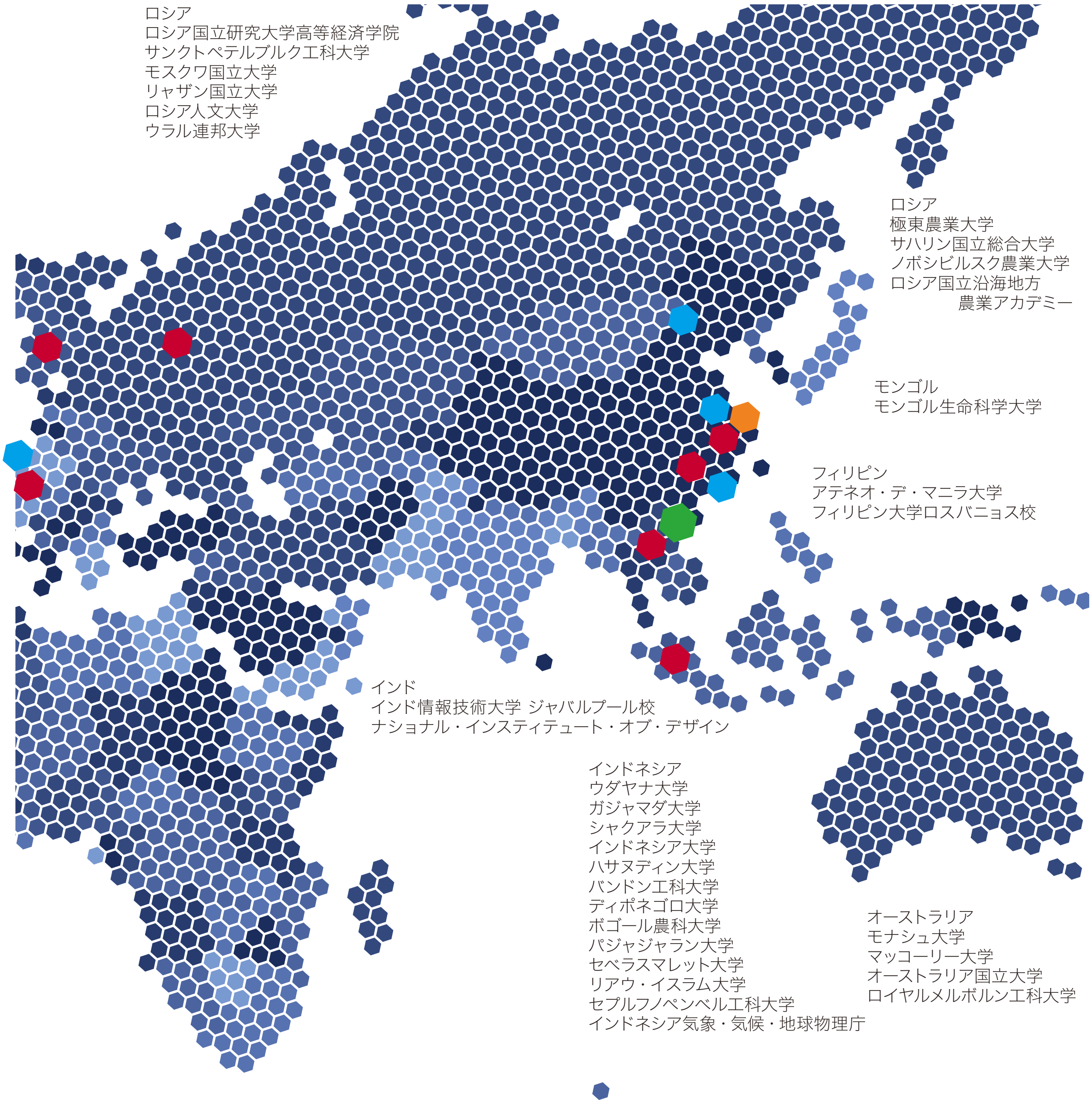
イタリア
- ミラノ工科大学（POLIMI）
- 工業デザイン大学ローマ校（ISIA）

ギリシャ
- テッサロニキ・アリストテレス大学

ポルトガル
- IADE

ドイツ
- ライプツィヒ大学
- ゲッティンゲン大学
- ハイデルベルク大学
- デュッセルドルフ大学
- ドレスデン応用科学大学
- ケルン応用科学大学（KISD）
- ローゼンハイム応用科学大学
- ベルリン自由大学歴史・文化学部

アジア地域	126 協定	中国：40	韓国：22	台湾：18	インドネシア：13
		タイ：15	シンガポール：1	マレーシア：5	カンボジア：1
		ベトナム：6	フィリピン：2	インド：2	モンゴル：1
中近東地域	3 協定	トルコ：3			
アフリカ地域	1 協定	ケニア：1			
オセアニア地域	4 協定	オーストラリア：4			



ロシア
ロシア国立研究大学高等経済学院
サンクトペテルブルク工科大学
モスクワ国立大学
リャザン国立大学
ロシア人文大学
ウラル連邦大学

ロシア
極東農業大学
サハリン国立総合大学
ノボシビルスク農業大学
ロシア国立沿海地方
農業アカデミー

モンゴル
モンゴル生命科学大学

フィリピン
アテネオ・デ・マニラ大学
フィリピン大学ロスバニョス校

インド
インド情報技術大学 ジャバルプール校
ナショナル・インスティテュート・オブ・デザイン

インドネシア
ウダヤナ大学
ガジャマダ大学
シャクアラ大学
インドネシア大学
ハサヌディン大学
バンドン工科大学
ディポネゴロ大学
ボゴール農科大学
パジャジャラン大学
セベラスマレット大学
リアウ・イスラム大学
セプルフノペンベル工科大学
インドネシア気象・気候・地球物理庁

オーストラリア
モナシュ大学
マッコーリー大学
オーストラリア国立大学
ロイヤルメルボルン工科大学

トルコ
アクデニズ大学
イリディズ工科大学
イスタンブール工科大学

タイ
マヒドン大学
カセサート大学
チェンマイ大学
サイアム大学
メージョー大学
ランシット大学
コンケン大学
泰日工業大学
アジア工科大学院
メーファールアン大学
チュラロンコーン大学
チュラポーン大学院大学
プリンスオブソンクラ大学
キングモンクット工科大学トンブリ校
ラジャマンガラ工科大学 タンヤブリ校

カンボジア
王立プノンペン大学

ベトナム
ハノイ大学
ノンラム大学
ホンバン国際大学
インターナショナル大学
ホーチミン技術師範大学
ベトナム国家大学ハノイ校
人文社会科学大学

中国
浙江大学
清華大学
蘭州大学
江南大学
江蘇大学
上海大学
東華大学
貴州大学
湖南大学
烟台大学
中南大学
魯東大学
済南大学
復旦大学
西華師範大学
北京理工大学
湖南師範大学
南京林業大学
安徽医科大学
上海交通大学
新疆師範大学
浙江工業大学
中央民族大学
中国農業大学
中国美術学院
南京農業大学
北京印刷学院
大連理工大学
華東理工大学
浙江工商大学
広州美術学院
西北工業大学
北京郵電大学
北京林業大学
長春理工大学
西安交通大学
天津中医薬大学
ハルビン工業大学
南京信息工程大学
中国電子科技大学

韓国
中央大学
仁川大学
国民大学
延世大学
金剛大学
亜洲大学
釜慶大学
明知大学
全北大学
仁済大学校
慶熙大学校
江原大学校
成均館大学
国立釜山大学
誠信女子大学
国立韓京大学
淑明女子大学
ソウル市立大学
ソウル国立大学
国立公州大学校
蔚山科学技術大学
ソウル科学技術大学

台湾
実践大学
中原大学
東海大学
大同大学
台北医学大学
国立成功大学
国立中山大学
高雄師範大学
国立政治大学
国立高雄大学
南台科技大学
国立交通大学
文藻外語大学
国立中央大学
国立清華大学
国立台湾師範大学
国立台北教育大学
国立台湾芸術大学

シンガポール
シンガポール工科デザイン大学

マレーシア
マラヤ大学
サラワク大学
マルチメディア大学
テナガナショナル大学
プトラ・マレーシア大学

S

留学のスケジュール（留学準備と留学後の学習）

留学の準備は１年以上前から始めてください。ここでは、一般的な海外の大学のアカデミックカレンダーである８月からの授業開始を基準にスケジュールを提示しますので参考にしてください。このスケジュールはあくまでも一般的なものです。留学先によってはかなり異なりますし、各種奨学金を申請するためにはより長い期間が必要ですので、十分に余裕を持って準備をしてください。

スケジュール SCHEDULE

SEP OCT NOV DEC JAN FEB MAR APR MAY JUN JUL AUG

- SEP: 留学生課に相談 / *イングリッシュハウスで自分に合う準備
- SEP: *LEX プログラム登録 Language Exchange
- NOV: 秋派遣応募学内締切
- DEC: 派遣留学学内選考 面接および審査
- JAN: 合格者オリエンテーション 派遣先推薦・申請手続き開始
- JAN: 学外各種奨学金申請
- FEB: 派遣先交換留学生情報 派遣先国情報の入手
- APR: 自分で留学先大学のコーディネーターとやり取り
- MAY: JASSO奨学金申込 在留許可証取得手続き 入学許可書取得 入寮手続き開始
- JUN: 危機管理オリエンテーション 海外旅行保険・OSSMA・航空券購入
- JUL: 渡航前オリエンテーション 事前学習
- AUG: 出発

12ヶ月前

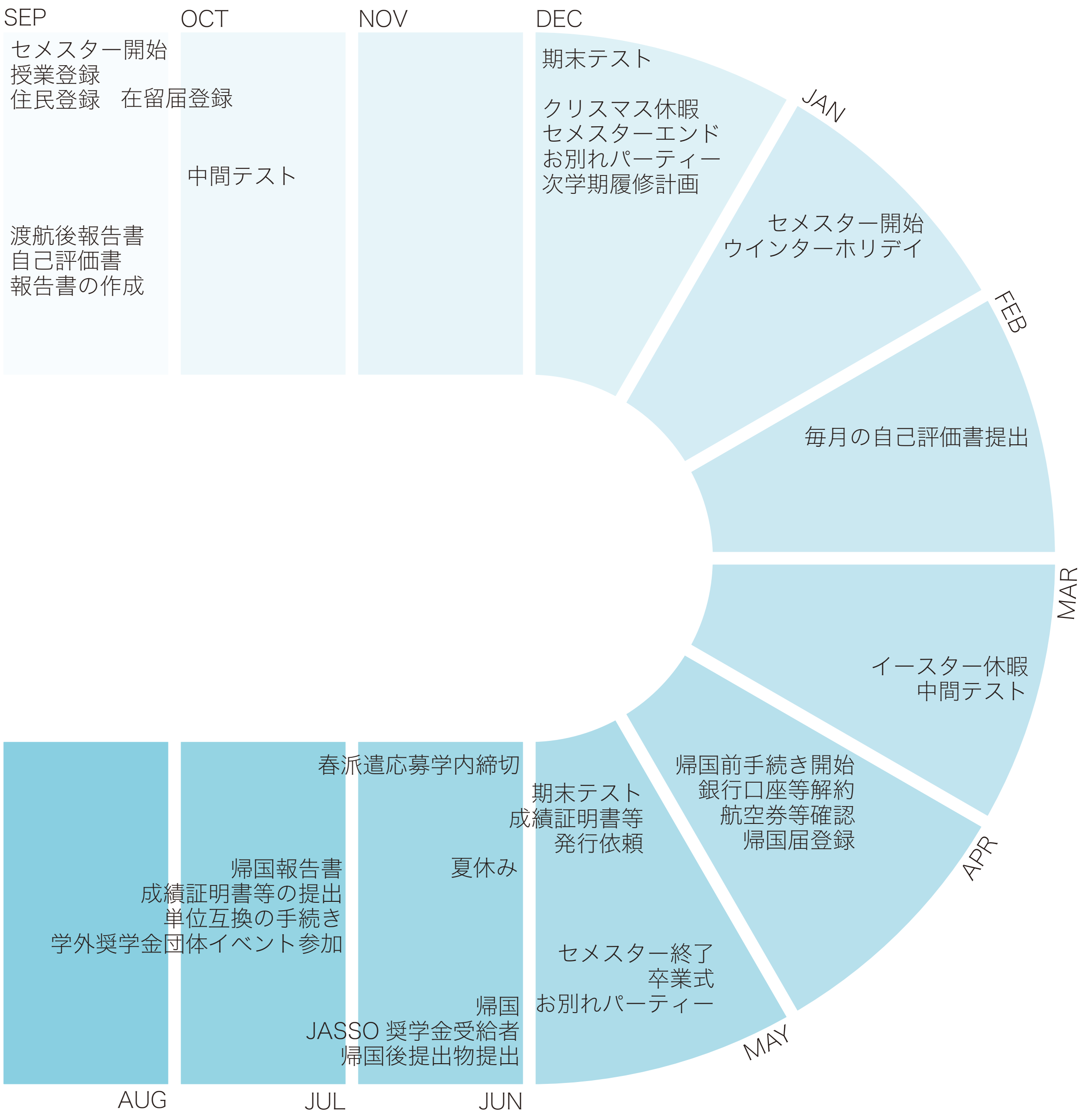
- OCT: 事後学習
- JAN: 派遣留学生帰国報告会 所属学科プレゼンテーション
- FEB: 春派遣留学生出発
- JUN: 帰国後 就職活動の開始 日本の大学院進学検討 海外の大学院進学検討 留学後の休学など

AUG JUL JUN MAY APR MAR FEB JAN DEC NOV OCT SEP

派遣留学プログラム面接官より：選考面接では、３～４人の面接委員が留学志望者との質疑応答を通して「この学生は有意義な留学生活を送れるだろうか」という観点で審査します。派遣留学は、単なる語学留学ではありません。千葉大学での勉学を土台にして、専門的な学習や研究を留学先の大学で行うプログラムです。そのため、まずは志望大学を中心に候補になる他の大学も含めてシラバスを熟読しましょう。留学生に開放されている授業科目から自分が受講したい科目を決め、きちんと説明できるようにしておいてください。また、面接では留学期間のストレスに耐えられるかも判断します。面接委員は敢えて答えにくい質問をすることもありますが、その際には冷静に自分の意見を主張してください。

留学先での学修

留学では、環境の変化に対応することが第一に求められます。学習もそうですが、生活習慣や食事などありとあらゆることが異なります。みなさんが日本で経験している便利で快適な生活とは異なることが多くありますのでそれらに根気よく対応してください。学習を重ね研鑽を積むことはもちろんですが、留学を楽しむことも重要です。バランスの良い学習を心がけてください。



留学生課：https://cie.chiba-u.ac.jp/sase/
ホームページにて派遣留学等に関する様々な情報を提供しています。海外派遣留学生からの生の声は「派遣留学生からのレポート」から月間報告書や帰国報告書が閲覧できます。また学外奨学金、学外での留学イベント、協定校の短期プログラム等のご案内なども掲載しています。相談予約も「海外留学相談の予約フォーム」からできます。総合学生支援センター２階で、開室時間：平日９：00～17：00、留学相談：平日 10：00～16：00 です。
* イングリッシュハウス：http://www.chiba-u.ac.jp/englishhouse/
* LEX プログラム：https://cie.chiba-u.jp/exchanges.html

S

奨学金
SCHOLARSHIP

奨学金制度

奨学金を獲得するためには早めの準備・対策が求められます。

〇日本学生支援機構（JASSO） 海外留学支援制度（協定派遣）
諸外国の協定校に派遣するプログラムを実施する場合、そのプログラムを支援し、資格・要件を満たす学生に奨学金を支援する制度です。多くの学生が利用しています。

・奨学金対象留学期間　8日以上1年以内
・奨学金額　月額6万～ 10 万円（地域により異なる）さらに一定の家計基準を満たした場合は、渡航支援金 16 万円を加算
・申込資格　全学部学生、全大学院学生
・問合せ先・応募先　各プログラム担当者
・参考 URL
https://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_a/scholarship/haken/index.html

※この奨学金は学生から JASSO へ個人で申し込みをするものではありません。千葉大学の留学のプログラムの中には、この奨学金に採択されているプログラムもありますので、各プログラムの担当者に確認してください。この報告書のもととなっている千葉大学海外派遣留学プログラム（協定校への交換留学）の場合は、プログラム合格者に留学生課が案内します。

〇日本学生支援機構（JASSO）第二種奨学金（短期留学）
大学在学中に、外国の大学・大学院に短期留学をするために奨学金を希望する人を対象に貸与する有利子の奨学金で、学長の推薦を得て短期留学をする前に申込む「予約制度」となっています。

・奨学金対象留学期間　3ヶ月以上1年以内（ダブルディグリープログラムで単位取得に1年以上の期間を必要とする場合は2年以内）
・奨学金額
学部学生：月額2万円・3万円・4万円・5万円・6万円・7万円・8万円・9万円・10 万円・11 万円・12 万円の選択制
大学院学生：月額 5 万円・8 万円・10 万円・13 万円・15 万円の選択制
・募集対象　全学部学生、全大学院学生
・申込資格　次のいずれかの条件で留学する場合
1. 千葉大学の学生交流に関する協定に基づく留学であること
2. 留学により取得した単位が千葉大学の単位として認定される留学であること
3. 大学院在籍中の学生の研究のための留学（研究留学）で千葉大学長が有意義と認めた留学であること
・問合せ先・応募先　学生支援課生活支援係
・参考 URL
https://www.jasso.go.jp/shogakukin/moshikomi/kaigai/2shu_short.html

〇学外の奨学金
学外の奨学金情報も留学生課のホームページに随時更新しています。募集要項に自分が当てはまるかを検討してみてはいかがでしょうか。

ここに記載された奨学金以外にも多くの奨学金が官民、国内外問わずあります。併給ができない奨学金、また併給に際して条件がある奨学金など条件は様々なので、内容を精査してみてください。奨学金の手続きは渡航前にかなりの時間がかかるので、余裕をもって準備を行いましょう。独自の成績基準が設けられている奨学金もあり、支援が必要であっても申請できない場合もあります。成績を高い水準に保っておくことも重要です。以下のホームページも参考にしてください。

日本学生支援機構（JASSO）海外留学支援サイト「海外留学のための奨学金」
http://ryugaku.jasso.go.jp/scholarship/

留学生課 HP「【学外】留学に関する様々な情報　2019 年度」
http://cie.chiba-u.ac.jp/sase/002017.html

準備諸々

〇留学資金貯蓄：多額の費用がかかることに加えて、現地ではアルバイトができないため収入がゼロになるため、それを考えて計画的に貯めていくことが大事

〇パスポート：申請、既に持っている人でも国によってはビザ申請時等で、残存期間の指定があるので、要確認

〇予防接種や歯の治療など：時間がかかるものは早くからの準備がお勧め

〇往復の航空券購入：直前だと高くなるので２～３ヶ月前にできれば買っておきたいところ

〇たびレジ登録：事前に現地の治安状況を知っておくのは、心構えをするとともに、渡航前の不要な不安を取り除く上でも大切

T

準備情報
TIPS

ビザ申請

ビザの取得方法は、国によってさまざま。また必要書類が多く、手続きや発行に時間がかかります。行き先が決定したら、早めに準備を始めましょう。

〇日本国内でビザを申請する国
本人か代理人が大使館で直接申請する場合と、オンラインで申請する場合があります。必要書類を英語または現地語で準備する事になります。注意して時間に余裕を持って手配しましょう。
〇渡航後現地で在留許可を申請する国
現地に入国した後､役所で在留許可(ビザ) を取得する国もあります。申請場所や手順、必要書類を各大使館ホームページで、あらかじめチェックすることが大切です。手続きに何時間も待ったり、足りない書類があると後日改めて申請に行く場合もあるので注意。

申請で証明すること　申請に必要な書類の参考にしてください。受け入れ先、犯罪歴、健康状態、保険の加入、住居、資金注意：ビザと在留許可は厳密には異なります。ビザ⇒入国の許可　在留許可⇒滞在の許可

家探し

〇寮に申し込む
大学からの紹介､または入学手続きと同時に申請します。大学によって、寮を選べるところもあれば、そうでないところもあります。寮の空きは少ないので、なるべく早く申し込むようにしましょう。寮の契約が完了するまでに時間がかかります。複数の希望を出せるときは、多く出したほうが部屋を割り当ててもらいやすいです。

〇大学の斡旋
大学が近隣に住める部屋等をインターネット上で紹介していることが稀にあります。ヨーロッパでは、契約に時間がかかる場合もあります。

〇自分で探す
現地に住んでいる友達や先輩に下見してもらったり、インターネットを介して家主と交渉したりします。家探しのための facebook グループもあったりします。留学先の団体やサイトが仲介している事もあります。国によって探し方や不動産サイトの仕組みも異なり、ネット上で完結してしまうものもあれば、家主と直接、何度もやりとりをしながら、下見、契約に至るようなものもあります。下見をせずに探すのは危険です。詐欺が多いので下見より前に敷金は払わないように。ルームシェアの場合は、契約書と保証金が必要なので、英語や現地語をわかっている人が契約者になること。保証金を返してもらえるよう、あらかじめ部屋の写真を撮り、貸主に誓約書を書いてもらいましょう。共同生活するときはルームメイトとの相性が重要！事前に面会しておくことを強くお勧めします。

〇その他家探し関連の注意事項・コツ（派遣留学帰国生より）
・現地のローカルな不動産サイトの方が、家主と直接契約できて賃料が安い物件が見つかりやすい。しかし、その国の言葉でのやり取りをすることがあったり、海外移住者狙いの詐欺が多いので上級者向け？
・ローカルなサイトで探す場合、メールのやり取りで「家主が海外にいるから契約金を送金してほしい。それから、鍵を郵送する。」と言われたら 99% 詐欺なので契約しない。このパターンはよく遭遇しました。
・メールで手厚いやり取りをしてくる家主の方が詐欺の場合が多い。(趣味、生活スタイル、生い立ちなどを書いた長文の自己紹介。それからこちらにも同じことを聞いてくる。この長いやりとりで打ち解けた風に見せて「海外にいるから…」パターンが多い。)
・本気で家を貸そうとしている家主は手短に「興味があったらこの番号に電話してくれ」という場合が結構多い。電話で手短に済ませようとしたり、直接会おうとする意思が見えれば割と信用できる。

保険

クレジットカードに付帯する海外旅行保険は、長期滞在はカバーしていません。きちんと保険に加入し、万が一に備えましょう。

〇自己加入保険
国や大学で指定がない場合は、自分に合った保険を探します。日本で提供されている海外旅行保険を利用している学生が多いようです。留学先によっては保険の補償範囲を指定している国もあるので、申し込む前によく調べましょう。歯医者や産婦人科の治療は日本の保険に含まれていないことが多く、その場合は追加で加入する必要があります。

〇大学指定保険
時には派遣先の大学が入学資格として、特定の保険への加入を強制することもあります。費用は大学によってさまざま。補償が薄い部分は自己加入保険を併用して補いましょう。

〇 OSSMA
(Overseas Student Safety Management Assistance)
千葉大学から留学する学生全員が加入する人的支援サービスです。OSSMA ヘルプラインにて 365 日 24 時間日本語で相談できます。パスポート紛失、盗難、健康上の不安（メンタル相談も可）、事故や入院の手続きなど、なんでも話を聞いてくれます。トラブルに遭った際、頼もしい仲介役になってくれます。＊トラブルサポートであり、保険ではないので注意！ OSSMA の他に保険の加入が必要

ビザ申請時に海外旅行保険にすでに加入している必要がある国もあります。早めに保険探しと契約を済ませましょう。また、ビザ要件に海外旅行保険による「緊急時一時帰国補償」が求められる国もあります。事前にビザ要件を確認し、的確な保険選びをしましょう。

CHIBA UNIVERSITY

CHIBA UNIVERSITY

1-33, Yayoi-cho, Inage-ku, Chiba-shi, Chiba, 263-8522 JAPAN
www.chiba-u.ac.jp/e

© 2020 Chiba University. All Rights Reserved.